生き残った男の子ハリー・ポッター

白アルパカ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしもハリーポッターが天才子役としてマグル界でも有名になってたら

タグは随時追加していきます。

あと、もっといい題名募集中です。

目次

賢者の石
1話　生き残った男の子 1
2話　魔法学校からの手紙 9
3話　ダイアゴン横丁 17
4話　ホグワーツ特急 28
5話　組み分け帽子 35
6話　初授業と天文学 45
7話　飛行訓練 52
8話　ハグリッドの家 62
9話　ノルウェー・ドラゴン 72
10話　ハロウィン 79
11話　クィディッチ観戦 88
12話　みぞの鏡 97
13話　アズカバンのクリスマス 107
14話　ムーニーとワームテール 118
15話　さよならスキャバース 124
16話　秘密の守り人 132
17話　ウィゼンガモット大法廷 141
18話　イースター休暇 149
19話　チャーリーと海外旅行 157
20話　賢者の石 165
秘密の部屋
1話　夏休み 175
2話　屋敷しもべ妖精 183

3話　ロックハートとルーナ ―――― 193
4話　ロックハート先生とコリン ―――― 203
5話　ロックハート先生とロン ―――― 213
6話　ホグワーツ探索 ―――― 225

賢者の石

1話　生き残った男の子

バーノン・ダーズリーは、「私たちはどこから見てもまともな一家です」というのが自慢だった。

彼はよくある中流階級の住宅街の一角の、よくある見た目の家に妻と一歳の子供と共に住んでいる普通の男だ。

学生時代から特別な才能は無いながらも地道な努力を重ね、この若さで中規模のドリル会社を経営しているのがささやかな自慢である。

彼は超能力や不思議なことが大嫌いで、ましてやまさか自分たちがそんなものと関わるなんてまっぴらだった。

そんなある秋の寒い日、バーノンは突然目が覚めた。耳には不快な音が響いていた。隣の家で赤子が泣いているのだろう。

「朝っぱらからうるさいな。自分の子供を制御することもできないなんて、非常識な奴め」

一人で毒づいたところで、バーノンはおや、と首を捻った。隣には老夫婦が住んでいて、赤ん坊なんていなかったはずだ。いたとしたらギネス記録になるであろうほどの高齢である。

だが、泣き声はかなり近いところから聞こえる。

訝しんだバーノンは、まともなパジャマに身を包んだまま、寒さに身を震わせながら玄関を出た。

空はまだ暗いが、地平線は薄っすらと赤く染まっている。

目の前に広がるのは画一的な家が立ち並ぶ住宅街。同じような屋根に同じような柵。どこにでもある普通の街だ。

しかし視線を下に落とし、バーノンは我が目を疑った。

「私のところに子供がいる、だと……？」

見慣れた風景の中、一つだけ紛れ込む異物。毛布に包まれた赤ん坊が階段の下に置いてあった。

「全く、何が起こったんだ？」

バーノンは、今にも爆発しそうな爆弾に近づく時のようにゆっくり

と赤ん坊の方に忍び寄った。
バーノンはまともなことを好む人間である。軒先に赤ん坊が置いてあるという〝まともでないことNo．　8〟ぐらいに匹敵するようなおかしなところをご近所さんに見られてはたまらない。
「なにっ、手紙がある！」
バーノンは早朝だということも忘れて大声で驚いた。幸いご近所さんが起きてくる様子はない。
彼は恐る恐る手紙を拾った。古ぼけた羊皮紙の封筒には不死鳥の封蝋がされている。
そこには、「ダーズリー夫妻へ」と書かれていた。
どうやら本当に私のところに置かれたらしい、とバーノンは観念した。
ひっそりと赤ん坊を部屋の中に引き込んだバーノンは、すやすやと眠る赤ん坊をテーブルの上に置き、手紙を開いた。
「まあ、バーノン。何があったんです？」
扉を開けて入ってきたのは妻のペチュニアだ。長い首をさらに伸ばして、キリンのように部屋を覗いている。
「それがだな。玄関に置かれていたんだ」
「赤ん坊が？　まあ、なんてこと！　すぐに警察に電話しましょう！」
今度はサルのように金切り声を出したペチュニアをバーノンは落ち着かせた。
「手紙が置いてあったんだ。さあ、一緒に読もう……」
バーノンとペチュニアは体を寄せ合って手紙を読んだ。
その手紙の内容はこうだった。
ペチュニアの妹とその夫が殺されて死んだ。
その赤ん坊は彼らが遺した子供だ。
彼が成人するまで大切に育ててほしい。
こんな感じだ。あまりに突然のことに、バーノンは目眩を感じた。
「つまり……この子は私達の甥だと？」
ペチュニアの妹は魔女だ。この赤ん坊はその妹の息子で、名前をハリーと言うらしい。

妻の妹の存在や、その正体はバーノンも前から知っていた。一度だけ共に食事をしたことがあるが、最悪の思い出の一つとして記憶されている。それ以来、彼らには絶対に関わるまいと強く心に決めていた。

まさかこんなことが起こるなんて想定外だ。

〝まともなこと〟を求めるバーノンにとって非常に悪い状況だ。

それに何より、赤ん坊ならすでに家にいる。

二人の息子――ダドリーという名で、日夜構わず泣きわめき、食い荒らす腕白な怪獣だ。

「わしは認めんぞ！　二匹も育てるなんて不可能だ！」

バーノンが憤って怒鳴ると、その声に驚いたハリーが泣き出してしまった。

バーノンはむしゃくしゃと頭をかく。このまま泣かせておくと、隣の部屋にいるダドリーまで起きてしまうかもしれない。

身の安全の為に、何としてでもその事態は阻止しなくては！

「私が泣き止ませますわ」

母親歴一年のペチュニアはハリーを抱き上げ、揺すり始める。

バーノンは悪夢の時間が訪れたな、と頭を抱えた。泣いている赤ん坊を寝かしつけるのは大変なことだ。

まず、なぜ泣いているのか分からない。乳を与えても、おしゃぶりをくわえさせても、ゆりかごで揺らしても、抱っこしても、歌を歌ってもだめだ。

そしてやっと泣き止んで寝たと思っても、ベビーベッドに置いた瞬間、火が付いたようにまた泣き出してしまうのだ。

産後、母親がノイローゼになってしまうのも無理はない。

しかし――驚くべきことに、ハリーはすぐに泣き止み、ペチュニアに無邪気に笑いかけた。

認めたくはないが、息子のダドリーとは大違いだ。

バーノンは感動でワナワナ震えた。

「この子は特別だ……選ばれし者だ！」

バーノンはライオンキングさながらにハリーを抱き上げた。窓か

ら射す朝日が神々しくハリーを照らす。
（芸能界を）生き残った男の子の伝説は、ここから始まったのだ！

＊

それから、ハリーの才能に気づいたバーノンは、その才能を最大限に開花させるべく仕事の合間に子育てに関する本を何冊も読み漁った。
そしてバーノンは、ある広告に目をつけた。
「赤ちゃんモデル……子役……そうかそんな手もあるな……」
ハリーはとても行儀の良い赤ん坊だった。人見知りしないし、よく笑うし、すぐに泣き止む。
綺麗なまん丸の緑色の瞳も可愛らしい。
息子のダドリーの可愛さには敵わないが、しかし、ハリーには大衆受けする可愛らしさがある、とバーノンは客観的に評価していた。
その後、バーノンの説得でペチュニアがハリーを連れて子役事務所のオーディションに向かうと、やはりハリーは合格することができた。
ちなみに、ついでに連れていったダドリーは一発で不合格になってしまった。
「あなた、本当にこの子を事務所に入れるんですか？」
赤ん坊二人が寝静まった夜、ペチュニアは不機嫌だった。
「ああ。そいつは稼いでくる。私が感じたんだから間違いない」
「でも、あの人達ときたら！　ダドリーのことを見るなり馬鹿にしたように溜息をついたのよ!?」
「ダドリーの才能を評価できるほどまだ世の中が追いついていないんだ。それより利用できるものはせねばならん。彼は絶対に稼いでくる」
バーノンは自信に満ち溢れていた。
しばらく口論になったが、最後にはペチュニアは嫌々ながら了承した。

さて、さすがは選ばれし者である。
ハリーが有名になるまでにそう時間はかからなかった。
ハリーの初めての仕事は赤ちゃん用のお洋服のモデルだった。ハリーは全く泣くことなく見事に仕事を終え、「こんなにスムーズに行ったのは初めてだ」とベテランカメラマンに言わしめた。
さらにそこからオムツのＣＭ、子供向け玩具のＣＭ、そしてドラマ、映画など3歳まででハリーはいくつもの大きな仕事をこなした。
そしてハリーを最も有名にしたのが、５歳の時に出演した映画『星のカラクリ』だ。
幼い頃に孤児院に置き去りにされた少年が両親を探しに旅する物語であり、健気な姿に世界中が涙した。
それからも『おばあちゃんの人参ジュース』や『九官鳥リリーの倦怠期』など大ヒット映画やドラマを連発し、ハリーは一躍国中の人気者になった。

＊

「はい、早くお食べ」
「ありがとう叔母さん！　美味しそう」
深夜、ハリーはダイニングで一人夕飯を食べていた。今日は北部で撮影があり、帰るのが遅れたのだ。
従兄弟のダドリーはとっくに寝ている時間なので、家はひっそりとしている。
ハリーはちらりと叔母のペチュニアを見た。彼女は頑なに料理雑誌を眺めている。いつものことだ。
ハリーは台本を取り出して、コップに立てかけて読み始めた。
大変なことも多いが、ハリーは演技するのが大好きだった。
カメラの前でみんなに囲まれて撮影するのは、とても刺激的で面白い。それに演技している間は他のことをなにも考えずに済む。
ハリーは素早く皿の上の焼き魚を食べ終えると、自分で食器を洗っ

た。
天才子役にしては、ハリーはかなり良い子に育っているように見えた。それはバーノンやペチュニアがハリーを甘やかさなかったからだ。
天狗にならないことは子役が芸能界を生き残る秘訣の一つである。（それと大人の指示に素直に従うこと、子供らしい無邪気さを演出することも大切だ）
「お風呂はいってくるね」
ハリーはそう呟いてリビングから出ていった。

＊

さて、ハリーが１０歳になった時、また、大きな仕事が飛び込んできた。
ドラマの主役に大抜擢されたのである。
原作はイギリスの大作家チャールズ・ディケンズの名作『デイヴィッド・コパフィールド』で、ハリーは主人公デイヴィッドの苦難の子供時代を演じることとなった。
撮影も中盤にさしかかってきた。
今日の撮影は大変だ。同じセットを使って、ほのぼのした楽しいシーンと深い悲しみのシーンを連続で撮らなければいけない。
初めに撮るのは楽しいシーンだ。こちらは難なく上手くいって、ハリーのテンションも上がった。
しかし直後に続けて撮るのは母親が亡くなったと伝えられ、家に帰って女中と悲しむシーンである。
この撮影の中の難所の一つだ。
ハリーは気持ちを切り替え、監督から演技指導を受け、本番に臨んだ。
沢山のスタッフとカメラがセットを囲い、現場特有の緊張感が流れる。
しかしこういう時に落ち着く為のルーティンをハリーは持ってい

る。
ひたすら脳内に色々なチキンを思い浮かべ、役に入るための精神統一を図るのだ。チキンの香りを想像しながらハリーは深く深呼吸した。
監督が撮影の合図を出した。ハリーは演技に入った――。
――ハリーは一発オーケーを勝ち取った。文句のつけようがない完璧な演技だった。
ハリーの強みは台詞のないシーンでの演技力だ。
女中の腕に抱かれ涙するハリーの顔は見えない。
しかし震える背中からは溢れんばかりの悲痛さが伝わってくる。
その場にいた全員が涙した。
ちょろいなぁとハリーは心の奥の奥の奥底で思ったが、表に出たらいけないと思って慌ててその気持ちを消し去った。
子供は無邪気にしていないとだめだ！
それは子役としてのハリーのプロ意識だった。

これが撮り終わると、最後に、エンディングで使われるコサックダンスを取って終わりだ。みんなが家の前に集まって踊るのである。
ハリーが部屋の隅で一心不乱にコサックダンスを練習していると、人の良い中年プロデューサーさんが近づいて来た。
「ハリー、今日もとても良かったよ」
「ありがとうございます！　皆さんのサポートのお陰です」
ハリーは汗を拭いながら口角を上げ、にっこりお礼を言った。
「また次も期待してるよ」
「はい！　頑張ります！」
ハリーは爽やかに返事して、再び神妙な顔でコサックダンスの練習に戻った。
お偉いさんに嫌われないようにするのは芸能界で立ち回る上で大切なことだ。

＊

ハーマイオニー・グレンジャーはとても優秀な生徒だった。歯科医の両親の期待に応えるため、幼い頃から猛勉強した。

しかし周りは馬鹿ばかりだ。

クラスメイト達はハーマイオニーのことを「ガリ勉」と言ってからかった。努力しない奴らに努力する人を馬鹿にする権利はない。

周りから孤立すればするほど、ハーマイオニーは勉強にのめり込んでいった。

ある日から、ハーマイオニーは学校の勉強ばかりでは飽き足らず、都心の塾に通うようになった。

ギラギラと陽射しが照りつける暑い日、夏期講習に向かう途中、ハーマイオニーは駅のホームの壁に貼られた大きなポスターを目にした。

緑色の綺麗な瞳の男の子が、力強い眼差しで湖を見つめている。

話題の天才子役ハリー・ポッターだ。厳しい芸能界を生き残り、テレビや映画に引っ張りだこの子供だ。

クラスの中でも大人気で、特に、このドラマのエンディングで踊られたコサックダンスは社会現象になるほどである。

アホらしい、とハーマイオニーは思った。

ほら、あそこでもコサックダンスをしている子供がいる。みんなコサックダンスに夢中だ。

あーあ、みんななんて馬鹿なのかしら！

ハーマイオニーはふん、と鼻を鳴らして、塾に入った。

……塾の先生まで、授業中にコサックダンスした。

もうこんな世界出て行きたいわ！

ハーマイオニーは心の底からそう思った。

2話　魔法学校からの手紙

11歳の誕生日、ハリーは朝から動物園ロケの仕事があった。
爬虫類館を見回ったとき、ハリーは蛇と心が通い合っているような奇妙な気分になったが、仕事中に変なことは出来ないのでスルーした。
幼い頃からハリーの周りでは色々と不思議なことが起こった。だから一時は不思議ちゃんキャラで行こうと思ったが、バーノンに全力で止められたのでやめた。
撮影後に何人かがハリーをお祝いしてくれて、ハリーは嬉しかった。ショートケーキはとても美味しかった。
家に帰ってくると、郵便受けは手紙でいっぱいだった。同じ子役のお友達、お仕事で知り合った人たち、子役スクールの先生。みんなからのメッセージカードを読みながら、ハリーは感動にふけっていた。
もちろん子役友達との関係は少しドロドロしたところがあって、明らかに嫌味と取れることを書いてある手紙も存在するので、そういうところには目を瞑るようにする必要がある。当然のことだ。
芸能界は華やかに見えて闇深い所だ。
「……これ、なんだ？」
沢山の手紙の中から、ひとつだけ、分厚くて重い手紙が出てきた。

サレー州　リトル・ウィンジング
プリベット通り4番地　2階のハリーの部屋
ハリー・ポッター様

ストーカーだろうか。ハリーは怖くなった。有名というのはそれだけ世間の反感も買いやすい、ということだ。
勝手に住所を特定して、誹謗中傷の手紙を送りつけられたことは何度もある。
しかしそれはそういう類いのものとは違っていた。
黄色味がかった羊皮紙の封筒に入った重い手紙。

裏返すと、紋章入りの紫色の蝋で封がしてある。中心にHと書かれ、それを囲むように獅子、鷲、穴熊、蛇がいる。
ただの悪戯なら、こんなに凝った手紙を送ってこないはずだ。
ハリーは恐る恐る手紙を開けた。

ホグワーツ魔法魔術学校
親愛なるポッター様
この度ホグワーツ魔法魔術学校に入学を許可されましたこと、心よりお喜び申し上げます。
新学期は9月1日に始まります。ふくろう便にてのお返事お待ちしております。
副校長ミネルバ・マクゴナガル

なんだこれ、とハリーは思った。魔法学校……？
訳がわからない。もしかしたら、新しい映画が決まったことをサプライズで伝えているのだろうか。
そうだとしたら奇妙なことだ。
幼い頃から、ペチュニア叔母さんは、魔法が題材になっている作品に決して出演させなかった。
宇宙を舞台にフォースという魔法の力を使って闘う、というワクワクするような作品の子役のオファーが来た時も、彼女は苦虫を潰したような顔をして断った。（ハリーは出てみたかったので悲しかったが、文句を言うのは許されなかった）
だからまさか、魔法学校を舞台にした映画なんて、出演させてくれるはずがない。
だとしたらただの手の込んだ悪戯だろうか。でも誰が、何のために？
ハリーは何度も手紙を読んだ。
ホグワーツ……聞いたこともない。ふくろう便……クロネコ便みたいなノリで言わないでほしい。
もう一つの可能性としては、これは本当の手紙である、ということ

だ。
つまりハリーは本当に魔法使いで、これは魔法学校への入学許可証なのだ。
……実は思い当たりがある。
映画でアクションをしなければいけないことになった時、ワイヤーが壊れていたのに、ハリーはそれに気づかないほど可憐に宙を飛べた。
その他にも、撮影でとても寒い地域に行った時は、自然と体が温まったし、小学校で筆箱を隠された時も、いつのまにかハリーの手元に戻ってきた。
それと何度か、魔法使いみたいなとんがり帽子を被ったお爺さん達に、崇めるような目で見られたこともある。
でも、まさか、そんなはずがない。
よし、これをペチュニア叔母さんに見せよう。ハリーは手紙を掴み、階段を降りてリビングに向かった。

＊

「ペチュニア叔母さん、手紙が来たんです」
ペチュニアはリビングで週刊誌を読んでいたが、ハリーに気づくと、無言で手紙を受け取った。
紋章を見た瞬間、ペチュニア叔母さんはギクリとした。
「……ただの悪戯よ」
そう言うと、ペチュニアは手紙を破り捨ててゴミ箱に入れた。
「早く部屋に戻って寝なさい」
「でも、こんなに作り込まれたものが悪戯だとは思えないよ！」
「明日もお仕事があるでしょう。さあ、早く寝なさい」
「叔母さんは何か知っているのでしょう？」
「は！や！く！寝なさい!!!」
ペチュニアは中途半端に賢いインコみたいに「寝なさい！」しか言わなくなった。

これ以上粘っても無駄だと思ったハリーはトボトボ部屋に戻った。

寝られそうになかったハリーは、窓から夜空を眺めていた。

ときどき、不思議な夢を見る。目も眩むような緑の閃光が視界いっぱいに広がる夢だ。

ペチュニア叔母さんは絶対に何か隠している。

叔母さんは、絶対にハリーの両親のことを話そうとしない。

それは、ハリーの両親が魔法使いだからなのかもしれない。だから、叔母さんは魔法を嫌悪しているのではないだろうか。

考えながら、ハリーはあまりの馬鹿馬鹿しさに吹き出してしまった。

映画の題材にはいいかもしれないけど、現実味がなさすぎる。

そういえば、昨日の夢は不思議だった。空飛ぶオートバイに乗る夢だ。まさか、オートバイが空を飛ぶわけがない……。

「えっ!!!!」

ハリーは目を凝らして空を見た。

巨大なオートバイが空を飛んで、こちらに向かって来ている。

ライトがハリーの部屋を照らした。ハリーは思わず目を瞑った。

オートバイは爆音で家の前に着陸した。

オートバイに乗っている男は、背丈は普通の2倍、横幅は5倍ぐらいありそうな大男だった。

大変だ!

ハリーは急いで玄関に向かって走った。

玄関に着いたと同時に、ベルが鳴った。

ハリーはドアを開けた。

毛むくじゃらの大男がハリーを見下ろしていた。

「……こんばんは」

ハリーは子役での経験を生かし、とりあえずニッコリ笑って挨拶した。

「おお、こんばんは。ハリーかね?」

「はい、ハリー・ポッターです」
「そりゃよかった。そろそろ日付が変わっちまうからな。ちょっと心配だからってダンブルドア先生が俺をここによこしたんだ。元気そうでよかったよハリー」
「あの、すみません……どちら様ですか？」
ハリーはなるべく失礼にならないように気をつけながら尋ねた。
「ああ、俺はルビウス・ハグリッド。ホグワーツの鍵と領地を守る番人だ」
「ホグワーツ？　なら、本当に魔法学校は存在してるのですか？」
「もっちろんだ！　ホグワーツは全寮制の魔法学校だ！　どうしたハリー、おねむか？」
その時、リビングのドアがガチャリと開いた。
顔を覗かせるバーノン叔父さんとペチュニア叔母さんは、恐怖そのものという表情だった。
「おお、こんばんは。ちょっとお邪魔させてくれんかね？　立ち話っちゅうのもなんだしな」
「今すぐお引き取り願いたいものですな。こんな深夜に訪ねるなど非常識ですぞ」
バーノンはかすれ声だ。
「ごめんなさい、叔父さん。ハグリッドさん、ちょっと外で話してもらってもいいですか？」
ハリーは外に出ようとした。
「……やめなさい。そんなのご近所に見られたらどうするっていうの」
止めたのはペチュニアだった。
ハリーはびっくりしてペチュニアを見た。
魔法を嫌う彼女が、「普通じゃない代表」みたいな存在であるハグリッドを家にあげるのを許すなんて！
明日は雪が降るかもしれない。
1分後、ダーズリー家のピカピカに磨かれたダイニングに、ヒゲも

じゃの男が座っていた。ちなみに地べたに座っているのはソファーに座ろうとしたら壊れかけたからだ。
「ふう、ありがとな、ハリー」
ハグリッドはハリーの手から紅茶を受け取った。
「よし、それでどうした？　なんで返事を送らなかった？」
「ふくろう便っていうのが分からなかったんです。それに魔法学校が実在するってことも疑ってたので……ごめんなさい」
「ワッハッハ！　なら、お前さんの両親はどこでいろいろ学んだっちゅうんだ！」
「いろいろ？　それって……」
「もうやめろ！　大男！　黙るんだ！」
バーノンがかすれ声で叫んだ。
「黙っちょれ腐ったオオスモモめ！」
ハグリッドは手に持っていたピンク色の傘をバーノンに向けた。バーノンは吹き飛ばされた。
アクション映画のようだ。
ハリーはバーノンを介抱しようかとも思ったが、両親に対する興味の方が上回った。
「ハグリッドさん。僕の両親は何者なんですか？　そのホグワーツ？とかいう学校に通っていたのですか？」
「その通りだ！　まさか、お前たち、この子になーんにも教えとらんちゅうのか!?」
「僕、ちょっとは学びました。忙しかったけど、出来るだけ学校にも行くようにしていました」
「いーやちがう。我々の世界のことだ」
ハグリッドは得意げに言った。
ペチュニアの顔面は蒼白だった。
「お前の父さんと母さんは有名なんだ。お前さんも有名なんだよ」
「僕の父さんと母さんも有名だったんですか？」
ハグリッドは頷いた。
俳優と女優だったのだろうかとハリーは考えた。

「もう、やめ、るんだ……これ以上話すな……！」
　再びバーンという音が響く。バーノンはさらに吹き飛んだ。
「ハリー、お前さんは魔法使いだ。父さんも母さんもそうだった」
「……本当に？　ファンタジー映画のオファーとかじゃなくて？」
　ハリーはただの天才子役だ。
「映画？　そりゃなんだ？　まあ、とにかくお前さんは魔法使いだ。それも、訓練さえ受ければ、すぐにそんじょそこらの魔法使いよりも凄くなる。なんせ、あのジェームズとリリーの子だ。おまえさんの名前は生まれた時からホグワーツの入学リストに載っちょるんだからな。そうじゃないか？」
「……知らなかったです」
　答えながらも、ハリーの意識は他のところに向いていた。
　ジェームズとリリー。それが両親の名前だったんだ……。二人とも魔法使いだったのだ。そして、ホグワーツに通っていた……。
　ハリーは両親の顔を思い浮かべようとしたが、全く何も覚えていなかった。
「それで、ふくろう便っていうのは何ですか？」
「おお、そうだった。忘れるとこだった」
　ハグリッドはポケットからクシャクシャの紙を取り出すと、走り書きした。

ダンブルドア先生
無事、ハリーに会えました。
明日、入学に必要なものを買いに連れてゆきます。
　　ハグリッドより

「僕がホグワーツに入るのはもう決まっているんですか？」
「……入りたくないっちゅうのかい？」
　ホグワーツに入れば、子役としての仕事は長期休みの時以外できなくなる。それだけが少し心残りだった。
「ホグワーツは何年制なんですか？」

「7年だ」
7年……となると、卒業する頃には１８歳か。
もう子役と言える歳ではない。
ハリーは今までの人生を演技に捧げてきた。
突然、子役をやめて魔法学校に通うなんて出来るだろうか。
でも、その魔法学校はただの魔法学校ではない。両親がかつて通っていた場所なのだ。
「僕をホグワーツに入らせてください！　入りたいです」
ハリーは決めた。ハグリッドはホッとして、にっこり微笑んだ。
「よし、じゃあ決まりだ。明日、入学の準備に行こう。朝の９時に迎えに行くよ」
「ごめんなさい、僕、明日はテレビのお仕事があるんです。だから午後２時以降からでもいいですか？」
「テレビ？　なんだそれは？」
「えっとー、箱に画面があって、映像が映し出される機械です」
「ふーむなるほど、マグルの機械っちゅうのはよくわからんな。まあとにかく明日は予定があるっちゅうことか？」
「はい」
明日の２時にハグリッドはもう一度この家を訪れてくれることになった。
ハグリッドが出て行った後、ハリーは急いでバーノンの手当てをした。
バーノンのお尻は真っ赤に腫れていて痛そうだった。

3話　ダイアゴン横丁

翌日、ＣＭの撮影中につい意識が逸れないようにするのはとても大変なことだった。

子役としての務めに集中しようと思っても、すぐ心は魔法やホグワーツに行ってしまう。

しかし天才子役としてのプライドで、ハリーは何とかいつも通り仕事をやり遂げた。ＣＭは特に儲かる仕事だから頑張らないといけない。

ハリーは家に帰るとすぐさま着替えて、荷物を詰めて、準備を整えた。

魔法学校の入学準備と言っていたが、いったいどこに行くのだろうか？

しばらくしてハグリッドがやってきた。

こんな巨体の人が天才子役の家を訪ねてくればご近所さんの噂になりそうだと、ハリーは少しだけ心配になったが、きっと大丈夫だと思うことにした。

バーノンは部屋にこもりっきりで出てこなかった。ハグリッドに吹き飛ばされて以来彼の存在はトラウマらしい。

ハリーはちょっと申し訳ない気分になって、いそいそと家を出た。

「ハグリッドさん、これからどこに行くのですか？」

ハリーはハグリッドの歩幅に追いつくよう、小走りで息を弾ませながら尋ねた。

「ロンドンのダイアゴン横丁っちゅうところだ」

「ロンドンに行くんですか？」

ロンドンは都会中の都会だ。

「ああ。それとおまえさん、別に敬語なんか使わんでくれ」

ハグリッドは大きな手をぶんぶん振った。

「それよりハグリッドさん。どうやってロンドンまで行くの？」

ハリーは焦って尋ねた。

ハグリッドは身長３メートルぐらいの超巨大だ。さらにハリーが

隣にいるとなれば、人の目を引くに違いない。
「なんちゅうんだっけな……そうだ、電車だ！　あれ、車電だっけな？」
「電車だよ。トレイン。でもそれよりハグリッドさん、僕達すごく目立たないかな？」
「あー、まあ俺はちょっとばかし大っきいからな。まあ大丈夫だ」
「あの……きっと大変なことになるよ。僕ちょぴっとだけ有名なんです」
「まあまあ心配するなって」
　ハグリッドは事態の深刻さを理解していなかった。
「あ、もしかして魔法を使うの？」
「そうだ！　いやー感動するぞ！」
「わー楽しみ！」
　ハリーはワクワクした。
　しかし1時間後……。
　パディントン駅で、ハリーは沢山の人達に囲まれて身動きが取れなくなっていた。
　変装用の帽子を被っていたが、ハグリッドと居ると役に立たなかった。
「ハリー、お前さんはマグルの中でも有名だったのか」
　ハリーをおんぶして、力技で人混みから抜け出したハグリッドは感心した様子で言った。
「ちょっとお芝居してたんです」
「ほーそれはすごいな。それにしてもすごかったなぁあれは」
「僕、てっきり魔法で目立たないようにしてダイアゴン横丁に行くんだと思ってました」
「なんでこそこそする必要があるんだ？」
「んー、あんまり問題に巻き込まれたくないんです。そういえば、どうやってロンドンに行くの？」
「夜の騎士バスだ。俺はあんま好きじゃねえが仕方ない……」
　ハグリッドは苦虫を噛み潰したような顔だ。

「夜なのに、昼でも走ってるの？」
「そうだ」
「へー！」
人気のない路地についたところで、ハグリッドが右腕をおもむろにあげた。
すると次の瞬間、耳をつんざくようなバーンという音と同時に、3階建ての派手な紫色のバスがどこからともなく現れ、キキーッと停車した。
金文字で『夜の騎士（ナイト）バス』とフロントガラスに書かれている。
『夜の騎士バス』がお迎えに来ました。迷子の魔法使い、魔女たちの緊急お助けバスです。えーっと、杖腕を差し出せば参じます。ご乗車ください。うーんと、そうすればどこでもお連れします。わたくしはアレク・ハーパップス。車掌として、お客様を――」
驚くべき棒読みだ。
「ああ、もういい。早く乗せとくれ」
「あ、ハグリッドじゃないか！」
紙切れを読み上げていた少年は、ハグリッドに気づくと、嬉しそうに歓声をあげた。
18、9歳の少年だ。制服の紫のズボンをダボダボにはいていて、金髪を短く刈り込んでいる。
「おお、アレクじゃねえか！　バスの車掌なんてやっとったのか！」
「なーんかさ。せっかく魔法生物の研究室に入れたっていうのに、同僚の女の子に惚れ薬飲ませて家に連れ込んだとか濡れ衣着せられてクビにされたんだよ。たった一週間で！　あり得るか、そんな酷い話？」
アレクは凄い勢いでまくしたてた。ハグリッドは残念そうに首を振った。
「そりゃ酷い話だ。またパブで飲もうな」
「ああ、ホグワーツ時代が懐かしいよ。で、今日はどこまで？」
彼は急に車掌に戻った。
「ダイアゴン横丁だ。彼の入学品を買いに行くんだ」

「新入生なんです。よろしくお願いします」
ハリーはアレクに向かって微笑んだ。
アレクの視線はハリーの額に釘付けだった。
「おまえ……まさか、ハリー・ポッターか？」
「はい、ハリー・ポッターです。好きな食べ物はペペロンチーノです。よろしくお願いします」
ハリーははにかんだ。
ハリーの額には、生まれた時から稲妻型の傷があった。子役の時にはこれを隠すのに苦労した。
両親が死んだ交通事故の時の傷跡だとペチュニアは言っていたが……そういえば、両親は本当に交通事故で死んだのだろうか？魔法使いなのに？
あとでハグリッドさんに聞こう、とハリーは思った。
「すげえや。まさかあのハリー・ポッターに会えるなんてな。『例のあの人』を倒したってほんとか？」
「……例のあの人ってどなたですか？」
「ハリーはマグルの家で育ってな、自分のことを何も知らねえんだ」
ハグリッドが説明した。
アレクは「ほーん」と言ってしばらくハリーをじっと見ていたが、ハッと我に返って2人を席に案内した。
ハグリッドはベッドに座ったが、お尻がはみ出ていた。
このバスの旅で、ハリーは魔法使いとしての洗礼を受けた。
魔法のバスは凄まじいスピードでトラックや植木、人々の間を疾走した。スピンや急ブレーキを繰り返し、その度にハリーはバスの後ろまで吹っ飛ばされた。
「ハグリッドさん……魔法界のバスって暴れ馬みたいですね！」
「ちっと今は話しかけねぇでくれ」
ハグリッドは乗り物酔いしやすいタイプらしく、真っ青な顔をして手すりにつかまっていた。
ハリーは黙った。
ふらふらになったハグリッドを一生懸命支えながら、ハリーはバス

を降りた。
「……ここであってますか？」
そこはごく普通の街だった。楽器店、ハンバーガー屋、映画館（ハリーの写真がデカデカと出ていて気恥ずかしかった）などが立ち並んでいる。
どこに魔法の道具が売っているのだろうか？
「ここだ。有名な店だ」
ハグリッドが指差したのは小さな薄汚れたパブだった。こんなところにハリーが入れば週刊誌で炎上しそうだ。
ハリーは心配になってチラチラと周りを見た――不思議なことに、この店に興味を向けている人は誰もいない。皆、ここに店があることすら分かっていないように見える。
「あ、待って下さい！」
ハリーはハグリッドに続いて慌てて店に入った。
中は暗くてみすぼらしかった。
隅の方では二、三人の奥様方がシェリー酒を楽しんでいる。
魔法でスプーンをくるくる回してコーヒーをかき混ぜている男や、鬼婆らしき女性もいる。
２人が店に入ると、人々の話し声はやんだ。みんなハグリッドに向かって話しかけたり、手を振ったりしている。ハグリッドは顔が広いようだ。
「おお大将、いつものやつかい？」
バーテンが巨大ジョッキに手を伸ばしながら聞いた。
「いや、トム、今日は違うんだ。ダンブルドア先生から仕事を仰せつかってね」
ハグリッドはハリーの背中をポンポン叩いた。その勢いが強くて、ハリーは床にめり込みそうになった。
「おお、これは……」
バーテンのトムはハリーの額に釘付けになった。
「ハリー・ポッター様！　なんたる光栄……！」
トムは駆け足でカウンターから出て、涙を浮かべてハリーの手を

握った。
　こんな崇めるように接されたことは無かったので、ハリーは戸惑ったが、子役としての条件反射でにっこり笑いながら手を握り返した。
　パブはシーンとなり、そして、ハリーの周りに一気に人が集まってきた。
　口々にみな「おかえりなさいポッターさん！」やら「ああ帰ったら親戚中に自慢しないと！」やら言っている。まるでカルト宗教の教祖役をしているみたいで、ハリーはちょっと楽しかった。
「みんな、ハリーはこれからホグワーツの学用品を揃えに行くんだ！
　それぐらいにしてくれ！」
　みんなは名残惜しそうにハリーから離れていった。

　ダイアゴン横丁への行き方は斬新だった。
　パブのゴミ箱の上のレンガをリズムよく叩くと、なんとレンガが動き出し、アーチになったのだ。その向こう側には石畳の通りが続いていた。
「ようこそ、ここがダイアゴン横丁だ」
「うわー、すごいよ！　こんな面白そうな場所来たことないです」
　大鍋、ふくろう、箒、ドラゴンのきも……さまざまな物が溢れんばかりに店の前に並んでいた。
「ねえハグリッドさん。なんでみんな僕の傷を見て驚くんですか？」
「ああ、それは……ちょっと重い話になるな。ここでアイスクリームでも食べながら話そうか」
「はい、ありがとうございます」
　２人はフローリアン・フォーテスキューというカラフルな内装のアイスクリーム屋さんに入った。
　ハグリッドは五人前も注文していたが、彼の体に比べると豆粒に見えた。
「お前さんのその傷跡……全ての始まりはある闇の魔法使いだ。何年も前のこと、ある男が恐ろしい悪の道に進んでしまった。悪も悪、悪の中の悪だ。本当に恐ろしかった……」

ハグリッドは身震いした。ハリーは不安だった。
「誰なんですか？」
「うーんとな、俺たちは未だにあの人の名前を言うことを恐れてる……口にすらしたくないほどに。しかし……よしっ言うぞ！　それ！　ヴォルデモート」
ハグリッドは恐ろしそうに自分の口を押さえた。
ハリーは険しい顔だった。
「ああ、もう二度と言わせないでくれ。とにかくそういう人がいたわけだ。そいつは巧みな話術や拷問、脅迫により仲間を集め、勢力を拡大させていった。誰が味方かも分からなんだ。暗い日々だった……ほとんど何も信じられなかった」
「拷問？」
ハグリッドは重く頷く。
怖い話だとハリーは思った。
「もちろん立ち向かう者もいたが、みんな殺された。当時最も力があった魔法使いや魔女も皆殺しだ……。おまえさんの父さんと母さんは、俺の知っとる中で一番優秀な夫妻だった。２人とも首席だ！そして決して闇の世界に足を踏みいれようとしなかった」
ハリーはにっこり笑った。
「そして悲劇が起こったんだ。２人を仲間にするよう説得できると思ったのか始末しに来たのか、あいつはお前さんたちが住んでいる村にやってきた。そして……」
「父さんと母さんが死んで、僕だけが生き残ったんですか？」
ハリーは小声で聞いた。
「そうだ。稲妻形の傷はその時の置き土産だ。ほーんとうに悲しかった……おまえの父さんや母さんのような良い人はどこを探してもいない……良い人から死んでいくっちゅうもんだ」
ハグリッドはテーブルクロス大のハンカチを出して、鼻をかんだ。
「不思議なこった。あの時代、あいつに狙われて生き延びたのは１人もいない。みーんな殺されちまった。ハリー、お前さん以外は。まだ赤ん坊のおまえだけが生き延びた」

ハリーの胸に痛みが走った。
なぜ両親は死んだのに、自分だけが生き残ったのだろう……心当たりは何もなかった。
ただ、目も絡むような緑色の閃光が、ハリーの脳裏に鮮烈に映った。

＊

ダイアゴン横丁は楽しいところだった。
ハリー達はまず最初に魔法使いの銀行、グリンゴッツに行った。両親が遺した大量の遺産にハリーは感動した。
ポッター家の金庫に行った後に、ハグリッドはさらに奥深くにある金庫に行って、小さな包みを回収した。それが何なのかハリーは気になったが、大人の事情がありそうな気がしたので何も尋ねなかった。
制服のローブ、教科書、大鍋、真鍮のはかりなど諸々の学用品を揃え終わると、ハグリッドがなんとサプライズでハリーにフクロウをプレゼントしてくれた。
「うわーもふもふで可愛い！　ありがとうハグリッド！」
雪のように白い羽をした美しいフクロウだった。
そして最後に向かったのはオリバンダーの杖店だ。
看板には紀元前３８２年創業、と書かれていた。
チリンチリン、とベルを鳴らしながら入る。
小狭くて埃っぽい部屋には、壁の天井近くまで杖の入った箱が積み重ねられていた。
今までの店とは違う静けさが流れていて、ハリーは無意識のうちに姿勢を正していた。
「いらっしゃいませ。おお、これはハリー・ポッター殿」
店の奥から老人が出てきた。
「こんにちは！」
ハリースマイルで挨拶する。
「待っておりましたよ、ポッターさん。お母さんと同じ目をしていらっしゃる。彼女がここに来て杖を買った日のことを覚えています

ぞ。柳の木で出来た振りやすい杖じゃった」
老人は不気味に銀色の目を光らせていた。
自分の緑色の瞳は母さん譲りのものだったのか。
ハリーの頭の中で、目だけが緑色にピカーンと光った女性(母親)が想像された。
「それとお父さんはマホガニーの杖だ。変身術に適していて、彼にぴったりの杖だった……」
「どんな見た目だったんですか?」
ハリーは尋ねた。
「顔は君によく似ておるが、額に傷はないし、瞳がハシバミ色だった。それと変身術に非常に長けておった」
「なら僕の顔は父さん似ってことですか?」
「もっちろんだ! おまえさんはジェームズそっくりだ!」
ハグリッドがガハハと笑った。
「しかし、〝気〟はむしろお母さんに似ておる」
「気? 性格みたいなものですか?」
「性格というよりかは雰囲気と言った方が近い」
「へー」
ハリーは何が違うのかイマイチ分からなかったが、ハグリッドは納得したように頷いた。
「確かにそうかもしれんな」
なるほど。ハリーの頭の中に、目が緑色にピカピカ光っている女の人と、ハリーによく似た男の人、そして二人と手を繋いで立っている自分の姿が浮かんだ。
「うむ。さあ、それでは杖選びに入りましょうか。杖腕はどちらで?」
「利き手なら右です」
いよいよ待ちに待った杖選びが始まった。
オリバンダー曰く、「魔法使いが杖を選ぶのではなく、杖が魔法使いを選ぶ」とのことだ。
ハリーは幾多もの杖を握らされたが、どれも馴染む物はなかった。杖を振る度に棚がガラガラドッシャーンと崩れ落ちるが、オリバン

ダーは御構い無しだった。
彼はとっかえひっかえハリーに杖を握らせた。
「うーむ、難しいな……。そうだ、奇抜な組み合わせだが……柊の木に不死鳥の羽根、２８センチ、良質で鋭い」
ハリーは杖を手に持った。その瞬間、今までとは違った暖かさが体の中に流れ込んでくる。
ハリーは杖を振った。
すると薄橙色の細長いものが杖先から出てきて、部屋中に溢れ出した。ペペロンチーノだ！
ペペロンチーノが雨あられに店の中に降り注いだ。
「ブラボー！」
「うわー美味しそう。こういうの夢だったんだ！」
ハリーは瞳を輝かせたが、一瞬にしてペペロンチーノは消えてしまった。
「不思議なことじゃ……」
井戸の底から響くような声だった。
オリバンダーはペペロンチーノに目もくれていなかった。
ハリーはヒエッと悲鳴をあげそうになった。
「この杖に使われているものと同じ不死鳥から作られた杖がもう一本だけある。その杖がお主にその傷を与えたのだ……」
「そうなんですか！」
ハリーは子役の時のクセで大きなリアクションを取ったが、すぐに真顔になった。
両親を殺した杖と同じ……悪いことの予兆としか考えられない。
「イチイの木に不死鳥の尾羽、３４センチ……あの人もある意味では偉大であった。非常に」
「僕は人殺しが偉大だとは思いません」
ハリーははっきり言ったが、オリバンダーは首を振った。
「彼の成したことは恐ろしく悍ましいことじゃ。しかし間違いなく偉大だった……」
オリバンダーの瞳は不気味な輝きを放っていた。ハリーはこの人

を好きになれないと思った。

４話　ホグワーツ特急

ペチュニアはハリーをホグワーツに行かせるつもりだったということが判明した。

というのも９月からハリーの仕事を一つも入れていなかったからだ。

ハリーは残りの夏休みをひたすらお仕事とレッスンに費やした。これからしばらくはお稽古ができなくなるのだ。今のうちに詰め込めるだけ詰め込んでおこう。

合間に読むためにホグワーツの教科書を持って行きたかったが、もし何かあると大変なのでやめておいた。

９月１日の朝、ハリーはバーノンの運転する車に乗ってキングズ・クロス駅に向かっていた。

１１時発の９と４番の３番線から出るホグワーツ特急に乗るためだ。

ハリーが電車に乗ると大騒ぎになってしまい、後々バーノンたちが怒られることになるので、渋々車を出してくれた。

家を出る時、従兄弟のダドリーはハリーの悪口を（独り言にしては随分と大声で）言っていたし、車の中では人生で一番気まずい時間が流れていたが、でもハリーは全く気にしなかった。

どんな映画の撮影の前よりもワクワクする。だって魔法だ！

両親が乗ったホグワーツ特急に自分も乗れるのだ！

駅前でお礼を言って降ろしてもらい、変装用の帽子を被ったハリーはトランクを乗せたカートを引いて駅構内を歩いていた。

巨体のハグリッドが居ないので、今日はバレて混乱を引き起こさずに済みそうだ。

９と４分の３番線という摩訶不思議なホームに行く方法はハグリッドから聞いている。

９番線と１０番線の間の柵に向かって思いっきり走るのだ。すると柵を通り抜けて、隠された魔法使い用のプラットホームに行ける、

とハグリッドは言っていた。
隠しているのは、マグルが誤って乗らないようにする為とのことだ。
ならなぜそもそもこんなマグルの公共機関ど真ん中にホームを設けるのだろうか、とハリーは思っていた。
ちなみに7と2分の1番線からはヨーロッパにある魔法使いだけの村トスカーナ村、3と8分の5番線からは大人気歌手魔女セレスティナ・ワーベックのコンサート会場行きの列車がそれぞれ出ているとのことだ。
ハグリッドが居ないとはいえ、フクロウも連れているのでハリーはなかなか目立つ。急いで行こう。
ハリーは大きく息を吐いてから、柵に向かって走り出した。
ぶつかる――と思ったがハリーの体はするりと柵を通り抜けた。
紅の蒸気機関車が乗客で混み合うプラットホームに停車していた。
がやがやと話す人々の声、ペットたちの鳴き声、ホームはとても賑やかだった。
「わーお……すごいや」
ハリーは驚きと感動でしばらく頭がボーッとなった。
人混みを掻き分けて空いているコンパーメントを探している時、ハリーはある少年に気づかれてしまった。
「あれ、まさか……あの『星のカラクリ』に出てた天才子役だったりする？」
黒人の男の子はすり抜けようとしたハリーを引き止めた。
ハリーは笑顔を作った。
「天才かどうかは分からないけど、そのドラマには出させてもらったよ」
「えーすごいよ！　なんでここにいるの？　魔法学校に行くの？」
「うん、そうだよ」
「すごいな。まさか魔法使いがドラマに出てるなんて思わなかったよ。あ、僕はディーン・トーマス。新入生なんだ。つい最近まで自分が魔法使いだって知らなかったんだ。君は知ってた？」

ディーンは凄い勢いで話しかけてきたので、振り切るのには１０分かかった。
不幸中の幸いは、その１０分間、彼は奇跡的にハリーの名前を一度も呼ばなかったということだ。
魔法界にもファンが居てくれるのは嬉しいことじゃないかとハリーは思うことにした。
ハリーは最後尾のコンパーメントに腰を据えた。
ホームでは沢山の生徒たちが家族と長い別れを惜しんでいるが、ハリーには関係のない話だ。
まもなく、列車は出発した。
「……ごめん、ここ空いてる？」
赤毛の男の子がひょっこり顔をのぞかせた。
「他はどこもいっぱいだったんだ」
男の子はもじもじ言った。
「いいよ！　僕以外誰もいないから」
そう言うと、男の子は胸をなでおろして、ハリーの向かいに座った。
そしてハリーを一瞥するが、何も見なかったふりをして窓の外に目を移した。
「君も新入生なの？」
ハリーは問いかけた。
「うん、そうだよ」
「へえ、なら一緒だ！　よろしくね」
「君も新入生なんだ！　よかった」
彼はハリーを知っていなさそうだ。それはそれでハリーは嬉しかった。
「でもさ、新入生って言っても兄ちゃんが５人もいるからホグワーツ特急は何度も見たことがあるんだ。僕が入学するのだって毎年のことって感じでさ、僕にとっては初めての体験なのに。あ、僕ロン・ウィーズリー」
男の子はしょんぼりしていた。
「いいな。僕の周りはみんなマグルだよ」

マグルとは魔法が使えない人を指す言葉だ。ハグリッドに教えてもらったので、ツウっぽく使ってみたが、ロンは無反応だった。
「ふーん。僕はみーんな魔法使い。しかも一番上のビルは首席だし、2番目のチャーリーはクィディッチのキャプテン、パーシーも監督生だし、フレッドとジョージはみんなの人気者。だからみんな僕が成績優秀で当たり前って思ってるんだ。やになっちゃうよ……あ、ごめん」
「ううん、みんなすごいんだね、君の家族」
「僕以外はね……って、その傷跡……!」
ロンはハリーの稲妻形の傷を指差して固まった。
「まさか君、ハリー・ポッター!?」
「うんそうだよ」
ハリーはちょっと恥ずかしかった。
「えー、じゃあ覚えてるの？『例のあの人』を倒した時のこととか？」
「何にも。ただ緑の閃光が広がったのだけは時々夢に見るよ」
「ほー」
ロンは口をまん丸に開けて、畏れ多い様子でハリーを見た。
それから2人は趣味の話で盛り上がった。
ロンは魔法界で人気のクィディッチというスポーツの話や魔法界のチェスの話を熱く語ってくれた。
「そーだ、君は何が好きなのかい？」
「コサックダンスだよ」
「何だいそれ？」
「マグル界で有名なダンスの一つなんだ。これを踊るとみんな元気になるんだよ」
「元気爆発薬みたいなものなのかなぁ？　やってみてよ」
「わかった」
ハリーは靴を脱いで列車の座席の上に立ち、コサックダンスを披露した。
ハリーが最後のポーズを決めると、ロンは杖から火花を散らし、パチパチと拍手を送った。

「ヒューヒュー！　すごいよハリー!!　僕ファンになっちゃったよ!!」
「そうでしょ！」
　ハリーの人を惹きつけるオーラは魔法界でも通用するということがわかった。
　その時、ドアが開く音がした。
「ねえ、あなたたちカエルを見てない？　ネビルのがいなくなったの」
　栗毛色のふさふさした髪の毛の少女だ。
「見てないよ。ロンも見てないよね？」
「うん」
「それは残念。じゃあもしも見つけたら声かけてくれるかしら」
　ハーマイオニーはロンが握っている杖に目線を移した。
「あら、あなた魔法をかけるの？　見せてちょうだい」
「ううん、ちがうよ。ハリーがダンス披露してくれたんだ。ねえハリー。もう一回やってよ」
「オッケイ！」
　ハリーはキラキラ歯を輝かせて爽やかに返事をすると、再び椅子に上がった。
「あーいいえ。やらなくて結構よ。あなたハリー・ポッターでしょう？」
「……うん、新入生なんだ。よろしくね」
　ハリーは寂しそうにぴょんと椅子から降りた。
「よろしく。私はハーマイオニー・グレンジャー。あなたのことよくテレビで見てたわ。まさか魔法使いなんて驚きよ。マグルの世界でも有名なご様子でしたけど、魔法界の本にもあなたのことがたーくさん載ってたわ」
「ほんと？　なら僕の父さんと母さんのことも載ってた？」
「ええ、少しは。多分探せばもっとみつかるわ」
「ありがとう！　知らなかったよ」
　魔法界でも有名だという実感があまりなかったので気づかなかった。

本か……今度買おう、とハリーは思った。
「いいなー僕のパパとママは絶対本なんか載れないよ。あ、でも世界鬼ばばベスト１００とかなら載れるかもしれないな」
ロンは神妙に言った。ハーマイオニーはあきれた様子で首を振った。
お子様の会話に付き合いきれないわ、という感じだ。
「私は時間がないからさようなら。それとあなたたち、着く直前にバタバタしないように早めに着替えておいた方がいいわよ」
ハーマイオニーはバタンとドアを閉めて出て行った。
「何だいあのお節介女？　聞いたか、『あたしは時間がないからさようなら』だってさ」
ロンがくねくね体を動かしながらハーマイオニーの声真似をした。
それが似ていてハリーは笑った。
「でも早めに着替えておいた方がいいっていうのはその通りだろうから、もう着替えようか？」
「そうだね。アイタッ！」
「どうしたの？」
「いや、なんでもない。ネズミのスキャバースが僕の手を噛んだんだ……」
ロンはポケットからネズミを引っ張り出すと、キャベツの切れ端を食べさせた。
「パーシーからのお下がりさ。いっつも寝てばっかりの役立たずだけどね」
「ふーん、ねえ、持ってみてもいい？」
ハリーはなぜかそのネズミのことが気になった。好き、というわけでも嫌い、というわけでもない。ただ興味があった。
灰色の冴えない色の毛並みのネズミを、ハリーは恐る恐る手の上に乗せた。
「このネズミ、指が欠けてるよ」
「あー１２年も生きてる老ネズミだからね。たぶんフレッドかジョージあたりが引きちぎったんじゃないかな」

「こわっ！」
「まあさすがにあの人たちでもそんなことしないかな。たぶんドアに挟んだとかそんな感じだよ」
ネズミの指なんて些細な事なので、ロンは気にしていない様子だった。
「へーそうなんだ……」
それからロンとハリーは魔法界のお菓子を食べたりして楽しんだ。
あとドラコ・マルフォイと名乗る男の子が訪問してきた。その子は、高飛車で傲慢で嫌な感じの子だった。だがこういう人達は今までも周りにたくさんいたので、すんなりとかわす術をハリーは身につけていた。
ホグワーツに着く頃には日はすっかり沈んでいた。
暗闇に沈むホームに降りると夜の冷たい空気が頬に触れた。
「イッチ年生！イッチ年生はこっち！」
前方でランプの灯りがゆらめいた。ハグリッドだ。
ここで映画を撮ったら綺麗になるだろうなぁとハリーはぼんやり考えた。
木が鬱蒼と生い茂った険しくて暗い小道を抜けると、ホグワーツ城が見えた。広大な黒い湖の向こう岸にそびえ立つ壮大な城だ。窓からこぼれる光が星のようにキラキラと光っている。
「うわー綺麗だ……」
「おったまげー」
あの城で父さんと母さんは7年間を過ごしたのだ。2人が入学する時も、きっと今のような風景を見たことだろう。そう考えると心が温かくなってくる。
ハリーはこの光景をじっと目に焼き付けた。

5話　組み分け帽子

ボートを降りた新入生達は、厳格そうな老魔女マクゴナガルに引き連れられて、小部屋に押し込められた。
「皆さん入学おめでとう。さて、新入生の歓迎会がまもなく始まりますが、大広間の席に着く前に皆さんが入る寮を決めなくてはなりません」
ホグワーツには四つの寮がある。
勇気と行動力を重んじるグリフィンドール、狡猾さと純血性を重んじるスリザリン、努力と忠誠心を重んじるハッフルパフ、機知と賢明さを重んじるレイブンクロー。
「どの寮にも深い歴史があり、素晴らしい人物を輩出してきました。ホグワーツにおいて寮とは家であり、同じ寮の生徒達は家族のようなものです。良い行いをすれば寮に加点され、悪い行いをすれば減点となります。一番得点が高い寮には、学年末に名誉ある寮杯が与えられますから、皆さん努力するように」
マクゴナガルが鋭い瞳で新入生達を見た。まるで子役オーディションの時の厳しい審査員だ。
「ねえロン、君の家族は全員グリフィンドールだったんだよね」
「そうだよ。あーあ、スリザリンに入ったらどうしよう。勘当されちゃうよ……」
スリザリンは闇の魔法使いを多く輩出した寮で、ヴォルデモート卿もこの寮出身らしいとハグリッドが言っていた。世間からもスリザリンは悪い寮だと思われているらしい。
なぜそのような寮を残しておくのか甚だ疑問である。
「そういえばどうやって組分けするのか知ってる？」
「フレッドはトロールと腕相撲するって言ってた」
「トロール？　それに腕相撲だって？　どういうこと？」
「トロール大きくて馬鹿な怪物なんだ。怪力の持ち主なんだよ」
ロンは小声で言った。
「怪力？　なら僕達みんな組分けされる前に死んじゃうよ！」

「え！　トロールと戦うの？　もう駄目だ僕……」
ハリー達のやりとりを聞いていた気の弱そうな丸顔の男の子がへなへなと座り込んだ。
「大丈夫だよ。入学早々新入生を殺したりしないよ、たぶんね」
ハリーはその子に手を差し出して起き上がらせた。
「さあ、そこ、静かになさい。まもなく入場ですよ」

数分後、ハリーたち1年生はマクゴナガルに連れられて大広間に入場した。
大広間は壮観だった。天井には星空が広がり、幾千ものロウソクが宙に浮かんでいる。
４つの長テーブルには上級生たちが寮ごとに座り、興味津々に新入生達を見ている。テーブルの上には美しい金色の皿が並べられ、爛々と輝いている。
そして壁に繊細に彫られたホグワーツの校章の動物達は、まるで生きているかのように力強い眼差しをしている。
「あれは吹き抜けじゃなくて、魔法で星空を映しているのよ」
得意げな女の子――恐らくハーマイオニー・グレンジャーの声が後方から聞こえてきた。
「すごい……」
ハリーは大広間に見惚れた。
今まで色々な場所を訪れたことがあるが、こんなに美しい場所は見たことがない。
魔法ってなんて素敵なんだろうとハリーは思った。
ここを映画のロケ地にすれば、どんなB級映画でも感動の大作に変わるに違いない。
「ねえハリー。あのオンボロ帽子は何なんだと思う？」
前方を見ると、教職員テーブルの前に置かれた三脚椅子の上に古びた帽子が置かれていた。軽く１０００年ぐらいは洗われていなそうだ。
場違いな存在だが、上級生や先生達は全くそう思っていないようで

ある。
　すると突然、帽子のつばの部分が口のように開き、歌を唄い出した。
「私は綺麗じゃないけれど　人は見かけによらぬもの
　私をしのぐ賢い帽子　あるなら私は身を引こう
　山高帽子は真っ黒だ　シルクハットはスラリと高い
　私はホグワーツの組み分け帽子　私は彼らの上をいく
　君の頭に隠れたものを　組み分け帽子はお見通し
　被れば君に教えよう　君の行くべき寮の名を
　グリフィンドールに行くならば
　勇気のあるものが住まう寮
　勇猛果敢な騎士道で
　他とは違うグリフィンドール
　ハッフルパフに行くならば
　君は正しく忠実で
　忍耐強く真実で
　苦労を苦労と思わない
　古き賢きレイブンクロー
　君に意欲があるならば
　機知と学びの友人を
　ここで必ず得るだろう
　スリザリンではもしかして
　君はまことの友を得る
　どんな手段を使っても
　目的遂げる狡猾さ
　被ってごらん、恐れずに！　興奮せずに、お任せを！
　君を私の手に委ね
　だって私は考える帽子！」
　歌が終わると自然と拍手が生まれた。ハリーも拍手した。
「ねえロン、僕の父さんと母さんはどの寮だったと思う？」
　ハリーは何気ない感じで聞いた。
「どうだろ……スリザリンじゃないのは確かだ。『例のあの人』と戦っ

たってことはきっと滅茶苦茶勇気に溢れた人達だったろうから、グリフィンドールじゃないかなぁ？」
「ハリーのパパとママならグリフィンドールだよ。彼らはグリフィンドールの誇りだって、ばあちゃんがいっつも言ってたもん」
さっきの丸顔の男の子が言った。
グリフィンドール最高、とハリーは思った。グリフィンドールのテーブルに座っている上級生達が輝いて見える。
「さて、今からＡＢＣ順に名前を呼びますから、呼ばれたら前に出て帽子をかぶって下さい」
マクゴナガルが長い羊皮紙を広げた。
「アボット、ハンナ！」
金髪のお下げ髪の少女が出てきた。
「……ハッフルパフ！」
少女は帽子を置いて、逃げるようにハッフルパフのテーブルに走った。ハッフルパフの生徒達から大きな拍手が起きた。
次々に組分けは進んだ。
「グレンジャー、ハーマイオニー！」
あの高飛車な女の子が前に出てきて帽子を被った。
帽子はなかなか叫ばない。
「長くない？」
ロンは頷いた。
人によって寮が決まるまでの時間に違いがあることにハリーは気づいていた。
「グリフィンドール　!!!」
ハーマイオニーは嬉しそうにした。ロンは呻いた。
「ポッター、ハリー！」
何人か後にハリーの番がきた。
名前が呼ばれた瞬間、大広間はシーンとなった。そしてヒソヒソとみんな囁き出した。
やはり子役の時とはみんなの反応が違う。子役の時は、みんな「可愛いー！」という感じだが、魔法界では伝説の英雄のような扱いだ。

ハリーはスタスタ前に出ると、帽子を被る前にみんなに向かってにっこり微笑んだ。生徒達から感嘆の溜息が漏れた。
帽子の中は真っ暗だった。
「ふむ……勇敢で、努力家でもある。そして優しく、自分の力を試したいという思いもある……これは難しい」
「そんな……過大評価です」
そこまで褒められると恥ずかしかった。
「こんなに難しい人は稀じゃ。腕がなる……おや、スリザリンは嫌かな？」
「なぜスリザリン寮は潰されないんですか？」
ハリーは質問した。
「はっはっは！　わたしに質問するとは珍しい。では答えよう」
「ありがとうございます」
「この組分け帽子には、偉大なるホグワーツの創設者４人の知性が込められている。その後がどうであれ、サラザール・スリザリンが居なければこの学校は存在して居なかったのだ。彼が作った寮を潰すというのは余りに冷酷ではないかな？」
「……」
「確かにスリザリンの中の黒い評判は長年絶えることなく続いている。闇の魔術を好む性質がその原因の一つになっていることは確かだ。しかしそれだけ悪名高い人物を輩出したということは、それだけ世間への影響力がある人物が多いということだ」
オリバンダーさんと同じようなことを言ってる、とハリーは思った。
「どの寮でも、良い人も悪い人もいる。例えばかのマーリンはスリザリンだ。スリザリンは常に勝利し、頂点に立つことを目指している生徒が多い故、歴史に名を残す者が多い。それは史上最悪の闇の魔法使いだったり、史上最高の偉大な魔法使いだったりする」
「スリザリンの悪人は悪も悪の悪人だけど、善人は魔法界を素晴らしく良くする力を持っているってことですか」
「そうだ。あの寮は極端だ。この数十年が後々あの寮にとって闇の時

代となることをわたしは望んでおる」
「なるほど」
ハリーは納得した。
「それで、どの寮に分けようか……スリザリンに行けば君は偉大になれる。闇が渦巻くスリザリンをも変える力を持っている」
「……」
ハリーは困った。両親を殺した人と同じ寮には入りたくない。しかし……自分は何を望んでいるのだろうか。
「ヒントをあげよう。真のスリザリン生は、他の三寮全ての資質を備えている。グリフィンドール生、ハッフルパフ生、レイブンクロー生も同様だ。大切なのは何を選ぶのか、だ」
「僕は両親のようになりたい」
ハリーは頭の中で組分け帽子に言った。
「よろしい。ならば…グリフィンドール!!!」
グリフィンドールから大歓声が起きた。
マクゴナガルも微笑んでいるし、ハグリッドも嬉しそうに手を叩いている。
みんなから熱烈な歓迎を受けながら、ハリーは席に座った。
澄ました笑顔のハーマイオニーとも握手する。
しばらく組み分けが続いた。そしていよいよロンの番になった。
ロンは青ざめた顔で椅子に座った。グリフィンドールのテーブルに座る赤毛の双子（恐らくロンの兄に違いない）がロンを指差して吹き出していた。
一瞬の沈黙――帽子はすぐに「グリフィンドール!」と叫んだ。
やった!
ハリーは大きな拍手をした。ロンは満面の笑みだった。
ああよかったよかった。
組み分けが終わると、校長ダンブルドアが教壇に立った。長くてたっぷりした顎髭を蓄え、嬉しそうに顔のシワをくしゃくしゃにして生徒たちを見つめている。
この人がこの大広間の中で最強だ。ハリーは一目見て察した。

ダンブルドアからは大御所俳優のオーラが漂っていた。
「ホグワーツの新入生おめでとう！　上級生たちはおかえりなさい！　歓迎会を始める前に二言、三言、言わせていただきたい。ではいきますぞ。そーれ！　わっしょい！　こらしょい！　どっこらしょい！　以上！」
ハハハハ！とハリーは笑った。
プラットホームで出会ったディーン・トーマス（グリフィンドールに組分けされた）は怪訝そうな顔でハリーとダンブルドアを交互に見て、呟く。
「ダンブルドア先生って変わってるね」
「たしかに、少し常人のセンスと懸け離れた所はあるかもしれない。でもあの人は天才だよ！　あ、僕は監督生のパーシー・ウィーズリー。これから1年間よろしく頼むよ」
パーシーは丸眼鏡をかけたいかにも優等生、という感じの青年だった。
「ロンのお兄さんですか？」
ハリーは尋ねた。
「そうだよ。あと、あそこにいる2人もロンの兄だ。いつも悪戯ばかりで手を焼くよ」
「でもフレッドとジョージって最高だぜ」
ロンがチキンを頬張りながら言った。
「ハリーもチキン食べたら？」
ミートパイばかり食べたいたハリーにロンが勧めた。
「ううん、平気」
「嫌いなの？」
「いや、チキンは一番好きな食べ物だよ。だからこそ、ここぞという一番大事な時にしか食べないことにしてるんだ」
ハリーは大真面目だった。
「君ちょっぴり変わってるって言われない？」
「そうかなあ」
ハリーにとってチキンは神聖なものなので、こんな気楽に食べては

いけないのである。
「僕のママはマグルなんだ。だから僕が魔法使いだって知った時は失神しそうになってたよ」
　これは黒人のディーン・トーマスである。
「僕のばあちゃんは僕のことスクイブだって思ってたから、ホグワーツに入学できるって分かった時は泣いて喜んでたなぁ」
「スクイブって？」
「魔法使いのパパとママの元に生まれたのに、魔法が使えない人のことだよ。僕、昔からドジばっかりだし、魔法なんて全然使えなかったから……」
　ネビルが言った。みんな笑った。
「へー、僕のパパとママは魔法使いだよ。いっつも休みにはクィディッチの試合に連れて行ってくれるんだ」
　シェーマス・フィネガンは自慢げだ。
　ハーマイオニー・グレンジャーはパーシーと学業についての話しで盛り上がっていた。
　呪文学のアレが楽しみだとか、魔法薬学がどうこうとか、ハリーにはさっぱり分からない。
　正直なところ、ハリーはあまり勉強が得意ではない――というか、好きではない。
　それでも人並み以上には出来るが、それは『子役の仕事ばかり優先して学業を疎かにしてはいけない』という恩師（ある映画監督だ）の言葉を今まで忠実に守ってきたからに過ぎない。
「ロン。君のお兄さんとハーマイオニーが話してること、わかる？」
「さーあね。ちんぷんかんぷんだ」
　ロンは呑気にポテトをパクパク食べている。
　それを聞いてハリーは予習しないことに決めた。
　この時はまだ、ホグワーツの宿題地獄の恐ろしさを知らなかったのである。
　デザートまで一通り食べたところで、食事は突然消えてしまった。
「あー、糖蜜パイもう一つ食べたかったのに！」

ロンが頭を抱えた。
ダンブルドアが再び前に立ち、いくつかの注意事項を話した。
廊下で魔法を使ってはいけない。
黒い森に立ち入ってはいけない。
死にたくなければ四階の廊下に足を踏み入れるな、などである。
最後の一つが不穏だ。
学校に死の危険があるなんて、さすが世界一の魔法学校！
ハリーは感激した。
それから、意味不明な歌詞の校歌を皆バラバラに好きなメロディで歌うという奇妙な体験をして、歓迎パーティーはお開きとなった。
ホグワーツの廊下はファンタスティックでアメイジングだった。
半透明のゴーストたちがふわふわと宙を漂っていて、ゴーストの体をすり抜けるとひんやりした。
階段は気まぐれに動くので、ネビルとネズミのスキャバース置いてきぼり事件なんかも発生した。
壁にかかる肖像画はリアルに動き、喋っていた。今年の新入生は当たりか外れか、というのが専らの話の話題だ。
「今年の新入生はいまいちパッとしない顔が多いねぇ」なんて、本人たちの前で言うべきではないとハリーは思った。
「よし、ここがグリフィンドールの談話室だ！　合言葉はカプート・ドラコニス！」
太った婦人の絵（これも勿論動く）が番人で、その人に合言葉を言うことで、絵の裏にある隠された入り口が出てくる仕組みになっている、とパーシーは説明した。
談話室は大広間に負けず劣らず最高の場所だった。
全体的に赤色で統一されていて、大きな暖炉ではパチパチと火が焚かれている。
ふかふかのソファーとテーブルがあちこち無造作に置かれ、安らぎの空間が演出されている。
ハリーの両親もグリフィンドールだったということは、このソファーのどこかに座っていたことがあるということだ。

ハリーは感動した。
ここが自分の本当の家だ、という感じがした。
「ねえロン、暖炉があるよ！」
「うん、すごい豪華だ」
「ほら見て！　椅子もある！　テーブルも！　赤いカーペットも！　絵も！　壁紙も！　羊皮紙も貼られてる！　灯りもあるよ！　あのソファー気持ち良さそうだね！　それに天井もある！　ねえ見てよ！　すごい!!」
「ハリー、僕にもちゃんと見えてるよ。それとも僕を盲者か何かだと思ってるの？」
はしゃいでソファーからソファーへポンポン跳ね回るハリーに対して、ロンは呆れた様子だ。
「ごめん！　でも僕、とっても嬉しいんだ！　わーい！　すごいよ！　すごいよロン！」
ハリーは嬉しさのあまり飛び上がりそうだった。
「さあ、明日から授業が始まる！　今日は早く寝て体を休めるんだ！」
パーシーが言ったので、ハリー達は素直に寝室に行った。
ホグワーツ初めての夜はとても素敵で心地よかった。
初めて、心の底から安心して居られる場所ができたような気がした。

6話　初授業と天文学

ホグワーツ魔法魔術学校は伝統ある魔法学校だ。
伝統校ということは、よく言えば古き良き慣習、悪く言えば無駄な過去の遺産が残っているということである。
ホグワーツ城が建築されてから１０００年も経つのに改築工事をしないのは絶対におかしいとハリーは思った。
複雑な作りのせいで授業を行う教室まで辿り着けなかったのだ。
数々のギミックに加え、肖像画や階段などありとあらゆるものが動くので目印に出来るものがないため、新入生は絶対に迷うのである。
この学校は生徒達に勉強させる気がないらしい。
子役時代お世話になった映画監督の中にはスパルタ人間もいた。突然難解な質問をされて答えられないと叱られたり、不意打ちのアドリブを振られたり、極寒の中で役作りをさせられたりしたものだ。しかしこんな意味不明な罠の数々が仕掛けられたりはしていなかった。
「この学校って、スパイを育てるための機関なの？」
「んーどういうことだい？　それより早く助けてくれない？」
ロンは階段中腹の落とし穴に足を取られていた。
「だってこんなに変な仕掛けばっかりなんだよ。潜入調査員を育てたいとしか思えないよ」
ハリーはロンを引っ張り上げた。
結局、２人は初回の授業に開始時間ギリギリで滑り込んだ。
グリフィンドール生の中で悠々と教室に入れたのはハーマイオニー・グレンジャーただ一人だった。

＊

ホグワーツの授業は個性的だった。
薬草学では魔法植物を育てた。小学校でやったアサガオの観察なんかよりずっと難しくて、楽しかった。スプラウト先生はハッフルパフの寮監らしく温厚で良い先生だった。

魔法史はゴーストのビンズ先生が教える科目だが、とてつもなく退屈だった。掃除機のようにブイーンと一本調子で講義するだけなのだ。聞いているのはハーマイオニーだけである。

だからハリーは授業中ずっとハーマイオニーを観察していた。「へー素晴らしいわ！」という顔だったり、「そんなことならもう私本で読みました！」という顔だったり、「もっと聞かせてください！」という顔だったり、横顔からは色々なことが読み取れた。

闇の魔術に対する防衛術も同じような感じだったので、ハリーはハーマイオニーを観察していた。

クィレル先生は極度の臆病らしく、どもりが酷くて何も聞き取れないのだから仕方ない。

この授業は教科書を読み上げているだけだ、ということをハリーは理解した。

なぜならハーマイオニーはクィレル先生の話を不満そうに聞きながら、何度もあからさまに教科書を音を立ててめくっていたからだ。教科書などとっくに読み込んだ彼女にとって、クィレル先生程度の授業は物足りないに違いない。

呪文学は楽しかった。フリットウィック先生は小さな先生だった。『チャーリーとチョコレート工場』のウンパッパ役の人達ぐらいの小ささだった。どうやらゴブリンとの混血らしい。

一番難しかったのは変身術だ。マッチ棒を針に変えるという、マクゴナガル先生曰く一番簡単なことをやったのだが、出来そうだという感じさえしなかった。

まず、黒板にびっしり書かれた理論が難しすぎて、１０回ぐらい読まないと理解できない。そして理解できたとしてもそれを使えるかどうかは別問題だ。

しかしハーマイオニー・グレンジャーだけは出来ていた。きっと１０００時間ぐらい予習してきたのだろう。ハリーは彼女をミス・パーフェクトと呼ぶことにした。

印象的なのは魔法薬学の授業だった。

担当のスネイプ先生は黒いマントを翻して教室に入ってきた。そ

れはまるで育ちすぎたコウモリのような印象を見る者に与えた。
そして、出席簿を机にバシンと置き、出欠を取り始めた。ハリー・ポッターの名前が呼ばれた時――ハリーはゾッとした。
スネイプは憎しみの篭った瞳でハリーを睨んでいる。
今までも子役を毛嫌いしている人は居たし、そういう人から嫌悪感たっぷりに見られたことはある。
しかしスネイプは嫌悪を通り越して憎悪しているようだった。
これは恐らく、ハリーの行動ではなく存在そのものを嫌っているに違いない。
こういう人は気にしないのが一番だとハリーは学んでいたので、出来る限り気にしないように振る舞った。しかしスネイプは何度もハリーをいびってきた。
まあこんな先生も1人ぐらい居るよなぁ、とハリーは思った。
「あの先生ひどいわ。あなた、マクゴナガル先生に訴えるべきよ。いいえ、私と訴えに行きましょう！」
授業後、ハーマイオニーがハリーに話しかけてきた。彼女は完璧な薬の調合をしたのに、スネイプに加点してもらえなくて怒っていた。
「フレッドとジョージが言ってたけど、スネイプってスリザリン贔屓なんだってさ。訴えても無駄だよ。まったく糞野郎だ」
ロンは下品なジェスチャーをした。ハーマイオニーは咎めるような目でロンを見た。
「ああいう人はどこにでもいるから、気にしないようにするしかないよ！　それよりハーマイオニー、今度魔法薬学教えてくれない？　ちょっとでもあの授業が楽しくなるように」
ハリーはお願いした。ハーマイオニーは笑顔になった。
「もちろんよ。教えて差し上げるわ」
「やった！　ねえ、ロンもやろうよ。そうだ、ネビルも誘っていい？」
「いいわよ」
「わーい！　じゃあ早速誘ってみるよ」
ハリーは喜んだが、ロンは終始しかめっ面だった。

「あの目立ちたがりに教わるだって？　ハリー、正気か？」
ハーマイオニーがいなくなってからロンが言った。
「でもミス・パーフェクトが一番勉強できるんだ。教わらない手はないよ。それにあの子いい子だよ。ちょっと新しい生活に緊張してるだけで」
「ミス・パーフェクト？」
「ハーマイオニーのことだよ」
ハリーが「当然だろ」という感じで返すと、ロンは苦笑いした。
「わかった。じゃあ一回だけだぞ。一回だけ教わってみるよ、僕」
「そうこなくっちゃロン！」
ハリーは指をパチンと鳴らした。

＊

なんといっても最高だったのが天文学だ。
水曜日の深夜、新入生達はノートと羽根ペンを片手に談話室の入り口近くに集まっていた。
女の子達はお風呂上がりなようで、温風呪文を使って互いの髪を乾かしあっていた。
「ふわーあ。眠いよ」
ロンは大欠伸をした。
しかしハリーはピンピンしていた。ハリーは深夜にテンションが上がるタイプだ。
「魔法史以上に眠くなるって上級生が言ってたよ」
ディーンが言った。
「魔法史以上だって？　それならもはや寝る前の読み聞かせだよ！」
シェーマス・フィネガンがやれやれと首を振った。
「キャー！」
その時、ラベンダー・ブラウンが悲鳴をあげた。パーバティ・パチルが杖から炎を吐き出して、それが髪の毛に引火したようだ。
「わー！　燃えてる燃えてる！」

「ごめんなさいラベンダー！　どうすればいいのかしら!?」
「火事だ火事だ！」
「うわー、ぼ、僕は逃げる！」
「ハゲはいやよ～！　わたし繊細な乙女なのよ！」
　新入生はパニックになった。
「あら大変！」
　その時、近くにいた上級生が飛んできて、魔法で水をかけてあっという間に消火した。そして水を乾かし、髪を伸ばす呪文をかけて、焦げた部分を切り落として消失させた。
「はい、これで大丈夫」
　上級生は仕上げに綺麗に魔法で髪を結った。
　ショートパンツを履いた黒人のセクシーな女生徒だ。
「ありがとううございます!!」
「よくあることだから気にしないで。あたしはアンジェリーナ・ジョンソン。クィディッチのチェイサーやってるの。困ったことあったらまた声かけてね」
　アンジェリーナはウインクした。その場にいた全員が恋に落ちた。

　そんなひと騒動があってから、ようやくシニストラ先生が迎えにきた。外出禁止時間に行われるので、先生の付き添いで天文台まで向かうのだ。
　夜のがっこうはひっそりとしていて、神秘的だった。
　いつもはうるさい肖像画も寝ているようだ。
「今日は初回の授業だから、難しいことはしない。夜空と自らの魂を一体化させるのが、今回の目標じゃ」
　天文台の塔に入る前に、シニストラ先生がしゃがれた声で呼びかけた。
　天文学的な数字で歳を取っているのではないかと思うほど年老いた先生だ。顔は皺くちゃ、白髪はダンブルドアのように長く伸びているが、明らかに彼より生気がない。
「チュートリアルが終われば、天文学ではひたすら星座や星の名前、動

きを覚えることになる。よって天文学はただの暗記科目だと思われていることが多い……」
シニストラの先生は不思議とよく響いた。
「しかし天文学の本質は星の名前を覚えることではない。大宇宙という巨大なるものの流れを感じ、その中に存在する自らの唯一性について熟考する機会を天文学は与えているのだ」
シニストラ先生の話は不思議と引き込まれるものがあった。
「宇宙には億や兆ではとても数え切れないほどのものが存在している。我々が住む地球でさえ、太陽系でさえ全宇宙からすれば塵芥に等しく見えるだろう。しかし一つとして同じものは存在しない。同じ種族でも、構造でも、その一つはそれだけだ」
彼の紫の瞳は宇宙を凝縮したように深い。
「わたしが話すより、実際に見た方が千倍伝わるだろう。ではドアを開ける。暗いから落ちないように気をつけろ」
シニストラ先生は石のドアを魔法で解錠して、開いた。生徒たちは一斉に外に飛び出した。冷たい夜風が肌にしみる。
空には無数の星が煌めいていた。暗闇の中で様々な大きさ、色、明るさの星がそれぞれ美しく輝いていた。
この夜空にこのまま吸い込まれてしまいたいとハリーは思った。
「よーし、広がって仰向けになってみろ」
シニストラ先生の声を遠くに聞き、ハリーはその場で仰向けになった。ハリーは息を呑んだ。まるで自分と暗闇がいったいになっているような錯覚を覚えた。自分が星空の一部であるような気がした。
途中からシニストラ先生が解説を始めたが、ハリーの耳には入らなかった。
気がつくと授業は終わっていた。
ハリーはずっとこの場に居たいぐらいだった。
天文台の塔から降りても、しばらくハリーの頭はぼんやりしていた。
「ふー途中で寝ちゃったよ」
ロンが頭をかいた。

「ほんとに？　僕は最高だったけどな」
ハリーはぼんやり返した。

しかし驚くべきことに、翌週の授業からは怒涛の星座の名前覚えテストと大量の宿題が生徒たちを襲ってきた。
初回の授業はまさに流れ星のように儚くどこかに消え去ってしまった。

7話　飛行訓練

しばらく経った日の朝、談話室に行くと、掲示板付近に一年生が群がって盛り上がっていた。
「どうしたの、ロン？」
ハリーはぴょんぴょん飛び跳ねて掲示板を見ようとしているロンに聞いた。
「えーっとね――今日の４時間目に――飛行訓練の授業が――あるんだって！」
ロンは嬉しそうに言った。
飛行訓練は箒に乗って空を飛ぶ授業だ。マグルの小学校で言う体育のようなもので、生徒達にとても人気がある科目であるらしい。
しかしマグル育ちのハリーにとって、飛行訓練の何が楽しいのかいまいち分かっていなかった。
朝食の時間、箒に乗って飛ぶことが魔法使い達の間でどんなに人気なのかハリーは実感した。
「僕は田舎の空を箒で飛び回ってたんだ。兄貴たちとリンゴをボールがわりにクィディッチだってしたことある。猛スピード出しすぎてママに怒られたんだ。パラグライダーにぶつかりそうになったこともある」
右に座るロンの言葉だ。
「僕は箒に乗ってただ飛ぶだけじゃなくて連続で宙返りできるんだ！　クィディッチのプロリーグに何回も連れてって貰ったことあるよ。いやーあの迫力はすごいよね！」
目の前に座るシェーマス。
「僕は地面に足付けてても危ないから箒に乗るなんて許されてなかったな……。でもすっごく高級な箒なら家に飾ってあったよ！　枝の一本一本まで綺麗に手入れされててカッコよかったなぁ」
左のネビル。
合同授業を行うスリザリンのテーブルでも、プラチナブロンドの髪のドラコ・マルフォイがしきりに自慢していた。

「実家の上空でヘリコプターに衝突しそうになったんだけどね、間一髪で避けたんだよ！　あーあ、一年生がクィディッチチームに入れないのが悲しいね！　僕が入れば絶対にスリザリンを優勝に導けたのに！」

マルフォイみたいなマグルを馬鹿にする魔法使いもマグルの近くに住んでいるんだな、とハリーは驚いた。

嘆かわしいことだが、マグル界と同じように魔法界にもある大きな差別的思想が存在している。

それは〝純血主義〟というものだ。

魔法使いの血筋を尊び、魔法族はマグルと関わるべきではないという思想を持つ人の中でも、特に過激な人々をそう呼ぶらしい。彼らはマグルを両親に持つ魔法使い、つまりマグル生まれの者を「穢れた血」と呼んで差別するのだ。

自分ではどうにもならないことで偏見を持たれたら堪らない。その辛さをハリーはよく知っていた。

それは置いといて、生粋のマグル育ちのハリーがクィディッチの話題についていけるはずもない。そこでハリーはマグル生まれのディーンと話していた。

「クィディッチって何が楽しいのかな？　名前からして変なのに。僕は絶対サッカーの方が好きだよ！」

ディーンは昨日、寝室でサッカーの良さを熱弁したのに誰も共感してくれなくてふて腐れていた。

「そういえばハリー、サッカーの映画か何かに出てたよね？」

ハリーは8歳の頃、ある伝説のサッカー選手のドキュメンタリー映画に、幼少期役で出たことがある。

「うん、サッカーを上手そうに見せるテクニックだけは学べたよ。実際には全然できないけどね」

ハリーはそんなに運動神経が良い方ではなかった。

「でもいいなー。だってあの超大物選手と話せたんだろ？　一度でいいから話してみたいよ」

「うん、オーラがすごかったよ。スターって感じがした。夢みたいな

時間だったなあ」
「僕にとってはハリーと話せてるのだって夢みたいだよ。君だって国中の人気者だ！」
「恥ずかしいからそんなこと言わないでよ。たまたま運が良かっただけなんだ。あ、ミス・パーフェクトが本読んでる。ディーン行こう！」
ハーマイオニー・グレンジャーはコップに本を立てかけて読みながらご飯を食べていた。
「ハーマイオニーなに読んでるの？」
「……飛行に関する本よ」
「すごいよ。僕にも読ませてくれる？」
「うん、いいわよ」
ハリーはハーマイオニーを尊敬していた。あんなに勤勉な人はそういない。
「僕にも教えてよ。ふつう箒になんて乗ったことないはずじゃないか。それよりサッカーの方が千倍楽しい！」
「私も箒に乗ったことないわ。ここに入学する前からこういうことがあるだろうと覚悟はしていたわ、もちろん。でももっと覚悟が必要だったみたい」
ハーマイオニーはカリカリしていた。飛行訓練ばかりは知識だけではどうにもならないからだろう。
「魔法界育ちとマグル育ちじゃ、全然常識が違うもんね。子供の頃に読んだ本も、遊びも、勉強も、生活スタイルも、驚くことばっかりだよ」
ハリーはしみじみ言った。ハーマイオニーは本から目を離さずに頷いた。
ディーンはしばらくハーマイオニーの本を熱心に読んでいたが、5分後、諦めたように手を挙げて降参のポーズをした。
「もう僕諦めるよ。ねえハリー、失敗するときは一緒だ」
「もちろん。ハーマイオニーも一緒に授業受けようよ。マグル生まれ同士、固まろう」
「あなたはマグル生まれじゃなくてマグルに囲まれて育っただけよ。

あなたの御両親は偉大な魔法使いと魔女だもの」
ハーマイオニーはイライラと訂正した。
マルフォイがマグル生まれのハーマイオニーを軽くからかっていたから、それがショックだったのだろうかとハリーは思った。
「両親が魔法使いかどうかなんて関係ないよ。血筋の自慢ばっかりする人は、それしか自慢できることがない可哀想な人なんだから気にしない方がいいよ。だって、もし僕の両親がマグルだって伝えられてたら、僕そう信じてたもん」
ハリーは真剣な瞳でハーマイオニーを見た。
「ご親切にアドバイスありがとう。でもそんなことおっしゃって頂かなくても分かってるわ」
ハーマイオニーはツンツンして言った。
子役の頃、ハリーは自分の身の上のことで辛い思いをしたことがあるから、ハーマイオニーの気持ちがよく分かった。こういう時はあまり深入りしてほしくないものだ。
それから三人はマグル界で流行っていた遊びや、勉強のことで盛り上がった。
みんなが知らないことを話すのは、秘密を共有しているみたいで楽しかった。

＊

いよいよ飛行訓練の時間になった。
ハリーは朝話した二人と一緒に校庭に向かっていた。その日はポカポカしていて、外の風が気持ちよかった。
「地上に足を付けてプレイするスポーツは魔法界にないのかな？」
ディーンが言った。
「少なくともイギリスの魔法界では圧倒的にクィディッチが人気で、それ以外のスポーツは絶滅寸前らしいわ」
「へーそうなんだ！」
「一種類しかスポーツがないなんて！　バスケもサッカーもホッケー

もアメフトも選べないっていうの？」
「魔法使いはマグルよりデンジャラスで刺激的なものを求めるのよ」
「デンジャラスで刺激的。確かにそうだね！　僕、前に魔法界の映画を調べたんだけど、魔法界に映画はないんだって。わざわざお金払って動く画面を何時間も見つめるなんて性に合わないらしいんだ。ラジオはあるけど」
「テレビが恋しいよ」
　ディーンはお気に入りのバラエティー番組について話し出した。
　その時、反対側の廊下からスリザリン生達がやって来るのが見えた。
　またマルフォイはハーマイオニーをからかうに違いない。
　ハリーはさりげなくハーマイオニーをスリザリン生から遠ざけた。
「ほーら穢れた血どもが怯えてるよ。箒に乗って空を飛んだことなんてないんだろうね」
　マルフォイは腰巾着を引き連れて威張っていた。
　ディーンは怒り狂ってマルフォイの方に向かおうとしたが、ハリーは止めた。
「早く校庭まで行こう。先生の近くじゃあいつも変なこと言えないはずだ」
「はやくあいつをやっつけたいよ」
「こういうときは毅然と振舞った方がいいよ。そういえばハーマイオニー、次の呪文学は何をするんだっけ？」
　ハリーは早歩きしながらあからさまに話題を変えた。
「『ルーモス』の続きよ。明るさを調節する方法を習うの。フリットウィック先生が前の授業の最後におっしゃってたわ」
「あ、そういえば宿題出てたかな？」
「前の授業でルーモスの光を5秒以上保てなかった人は、レポートを書いて練習してくるのよ」
「うわー忘れてた」
　ディーンが落ち込んだ。
　マルフォイはハリー達を追いかけるように急ぎ足になっていた。

「ハーマイオニー、落とし穴を掘る呪文とか存在しない？」
ハリーは小声で聞いた。
「呪文を組み合わせて落とし穴を作ることはできるわ。『ディフォディオ』って発音するわ。そんなに難しくないレベルの呪文よ。この呪文を地面にかけた上で、魔法で透明な壁を作ってその上に土でも被せれば落とし穴になるんじゃないかしら」
「そっかー難しいな」
「……あ！　そんな難しいことしなくても、落とし穴呪文っていうのがあったわ！　呪文はたしか……ディフォディセンプラ」
「ほーそうなんだ。――それにしても今日はいい天気だね。ほら、見て。綺麗な青空が広がってるよ！」
ハリーは大きな声でそう言いながら、懐から杖を取り出した。
そして素早く自分の背後の地面に呪文をかけた。
まもなく――マルフォイの叫び声が聞こえた。
振り返ると、マルフォイが穴にはまってヒンヒン泣いていた。
にやけそうになるのを堪えて、3人はすぐに何事もなかったように前を向いて歩いた。
そしてしばらく離れたところで、ハリーとディーンは大笑いした。
「最高だよ、ハリー」
ハーマイオニーは嬉しいのと、規則を破ったことを咎めるのとで複雑な表情だった。
「生徒を攻撃する魔法かけちゃいけないのよ」
「マルフォイが勝手に落とし穴に落ちただけだよ」
ハリーは言った。
「直接魔法をかけたわけじゃない、ね？」
ハリーの言葉にも、ハーマイオニーはなお迷っているようだ。
「あなたの行為は控えめに言って――最高だったわ。でもそれとこれとは訳が違うのよ」
「あれは絶対に最高だったよ！　それにほら、着いたよ」
ディーンが、地面に並べられた箒を指差した。
ここで授業を行うのだろう。

「ハリー！　遅かったけどどうしたんだい？」
やる気十分のロン、シェーマスは既に着いていた。
「君たちが早すぎるだけだよ！　魔法史が終わるなり全力疾走で校庭に向かってたじゃないか！」
「そうだっけ？」
「それにしてもこの箒大丈夫なのかしら。ここに並べられてる箒、すぐ修理に出すべきだって本に書かれてた状態のものばかりだわ」
「この学校の箒は古いから、正直最悪ね」
やる気ある組ラベンダー・ブラウンが言った。
その時、マダム・フーチが来た。短い白髪に鷹のような黄色い目をしていて、スポーティーなローブを着ている。
「何をボヤボヤしているんですか！　皆箒のそばに立って。さあ早く！」
マダム・フーチは開口一番生徒たちを怒鳴りつけた。
皆は急いで箒の隣に立った。
ハリーの箒は古ぼけていて、小枝が何本かひん曲がっていた。空を飛ぶところか、床を掃くことさえ満足にできなそうだ。
「右手を前に突き出して『上がれ！』と言う」
ハリーは念を込めて「上がれ！」と大きな声で言った。すると、箒はふわりと浮かび上がってハリーの手に収まった。
「ハリー!?　抜けがけはずるいぞ」
横のディーンの箒はピクピク動くだけで、浮き上がる気配は全くない。
ハーマイオニーは躍起になって「上がれ！　あーがーれ！　もうあがれったら！」と言っている。
周りを見ると、一発で成功している人は、ハリーの他にマルフォイぐらいしか居なかった。
15分後、何とかほとんどの人が箒を浮かび上がらせることに成功した。ネビルやその他数人はどうしても出来なかったので、マダム・フーチは仕方なく手で箒を持ち上げるように言った。
皆が箒に跨ったところでマダム・フーチが再び指示を出す。

「さあ、私が笛を吹いたら地面を強く蹴ってください。箒はグラつかないように押さえ、2メートルくらい浮上したら少し前屈みになってすぐに降りてきて下さい」
突然飛ぶのか、とハリーは驚いた。もしそのまま宇宙の彼方まで上がってしまったらどうしよう。蹴る強さ加減などもっと詳しく知りたいなぁと思っていると、近くのネビルが怯えて震えているのが見えた。
「大丈夫、ネビル？」
「う、うん……でも僕、高所恐怖症なんだ」
「無理しないでね。僕も箒で浮かぶ感覚がよくわからないんだ。ちょっとみんなの様子を見てから飛ぼうと思ってる」
「そっかあ……僕もそうしようかな……」
「ほんと？　よかった！」
ハリーは手を叩いた。
「では笛を吹きますよ。1、2の――3！」
一斉にみな飛び上がろうとした。5メートルぐらい上がってパニックになる人、全く浮かばず、ピョンピョン地面で跳んでいる人、そしてごく一部の成功させている人。
「……ホグワーツの授業ってすごいね！」
ハリーは度肝を抜かれた。マグル界ではこんな危険なことできない。
「じゃあ僕もやってみようかな、見ててくれるネビル？」
「う、うん」
ハリーは地面を蹴った――ふわりと箒が浮かび上がる。清々しい気持ちだ。少し箒を内側に傾けると、くるりとターンできた。すごい！
ハリーはまるで息をするように箒を操作できた。
「あっ！」
その瞬間、ひん曲がった枝のせいで箒が急に揺れだした。ハリーは思いっきり箒を自分の体に近づけた。
気がつくとハリーは箒に乗って縦に一回転していた。

「わーお！　すごいよ!!」
　地上のネビルがパチパチ拍手している。ハリーはスッと地面に降りた。
「ネビル！　空を飛ぶってとても楽しいよ！」
「そうかな。でも僕、絶対に失敗するよ」
「なら一緒に乗る？」
「そうしてくれる？」
「もちろん」
　ハリーはネビルの後ろに座った。
「まず、ちょっと１０センチぐらいジャンプする時の感覚で地面を蹴るんだ。そしてその場に止まりたい時は背筋を伸ばして重心を真ん中にしておく。前に進みたければ、体を前屈みにしながら箒の柄を自分の方にちょっと引き寄せる感じ。降りたければ普通に前屈みになる。そうすると上手くいくよ」
「わ、わかった。よ、よし。やってみるよ」
　ネビルは緊張していた。
「うん、じゃあせーの！」
　ハリーとネビルはポンと地面を蹴った。
「ひえーすごいよ。で、でも早く降りよ？」
　ネビルはヘナヘナだった。
「降りたい時は前屈みになるんだ。せーの……」
　ハリーとネビルは前屈みになって、ゆっくり地面に着地した。
「素晴らしい教え方でしたよ、ミスター・ポッター。グリフィンドールに5点あげましょう。ミスター・ロングボトムもよく恐怖を乗り越えて飛べましたね。１点あげます」
　ハリーとネビルは驚いて顔を見合わせた。
「ありがとうございます！　僕も箒に乗るのが初めてで怖かったのでネビルが居てよかったんです」
「僕だってハリーが居てよかったよ！　アルジー叔父さんに自慢しよ。叔父さん、僕なんかが上手く箒に乗れるわけないっていっつも言ってきたんだ」

ネビルは初めて加点してもらえてニコニコしていた。
「教え合える仲間は素晴らしいものです。ハリー、あなたのお父さんは素晴らしいクィディッチプレイヤーでした。2年生になったら是非加入を検討してほしいものです」
これはクィディッチをやるしかない！
ハリーはウキウキした。
「クィディッチって、1年生でも練習を見に行くことならできますか？」
「ええ、もちろん。グリフィンドールは5年生のオリバー・ウッドがキャプテンですから、聞いてみなさい」
「ありがとうございます！」
そういえば、ハリーはホグワーツに入学できると知ってから、ずっと両親について調べたいと思っていたのに、宿題に追われて何もしていなかった。
クィディッチの練習の見学と、両親に関する調査。これをまずしよう、とハリーは心の中に留めた。
マルフォイは落とし穴にはまったのがショックだったのか、少なくとも授業の間はハリーやハーマイオニーにちょっかいをかけてこなかった。
ディーンは予想以上にハリーの飛行が上手かったのでふて腐れていたが、夕飯の時にディーンの好物のヨークシャープディングをあげることで仲直りした。
心配していた飛行訓練の授業は最高のものとなった。

8話　ハグリッドの家

「ロンー、ロンー、起きないと朝ごはん食べ損ねるよー」
「にゃんだいハリー。僕はねむいんだ」
「僕だって眠いよ」
　飛行訓練から数日後の朝、ハリーは眠い目をこすってロンを揺すり起こしていた。しかしロンは全く起きようとしない。
　ハリーだって寝不足なのに頑張っているのだからロンだって頑張るべきだ。「にゃんだい」なんてぬかしてる場合ではない。
　男子寮に活気がない理由、それはシェーマス・フィネガンにある。
　――昨日の放課後、ハリー達は満を持してクィディッチの練習の見学に向かった。ロン、シェーマス、ディーン、そしてラベンダーとパドマも一緒である。ハーマイオニーは誘ったけれど来てくれなくてハリーは悲しかった。
「こんなに沢山の一年生が見学に来てくれるとは感激だ!!　……まさかスパイはいないな?」
　キャプテンのオリバー・ウッドは感動で涙を拭ったかと思えば、急に疑り深い目でハリー達を見た。
「いません!　みんな純粋にクィディッチが好きで見たいと思ったから来ました!」
　ハリーが言うと、オリバーは満足げに頷いた。
「ならいい!　是非あの観覧席から見ておいてくれ!」
「はい!」
　一年生達は元気よく返事した。
　その時、一人の制服姿の黒人の女生徒が走ってきた。
「おい!　どうしたジョンソン!　遅刻だぞ!　それにどうしたんだその格好は!」
「ごめんオリバー、スリザリンのヘミングスと口論になっちゃったのよ。クィディッチのローブにも臭液かけられたから、制服でもいい?」
「……仕方ない!　今日だけは許そう!　よし、早速練習だ!」

一斉に選手達が飛び立った。
「おっ愛しの弟君も来てるじゃないか！」
「ロナルド様がいらっしゃってるなんて腕がなるな！」
上空から赤毛の双子がロンをからかった。ロンは顔を赤くして拳を振り回した。
ハリーが微笑ましくその様子を見ていたら、それに気づいたロンがますます顔を赤くした。
はじめにウォーミングアップに空中の選手達は多角形に広がって、パス回しを始めた。その速さといったら目が回るほどだ。（ロンにそう言ったら、「チャドリー・キャノンズのパス回しはこんなどころじゃいぜ！　ボールが回りすぎて溶けてバターになっちゃいそうだよ！」と言われた）
「あの制服のスカートの人って、前にラベンダーの髪を消火したイカした先輩だよね」
ロンが囁いた。そういえば彼女はアンジェリーナ・ジョンソンと名乗っていたな、とハリーは思い出した。
それから選手達は3対3に分かれて、模擬試合を始めた。
フレッドとジョージの見事なナマケモノ・ロールに、オリバーの見事なセーブ、しかし何より目を引くのはアンジェリーナのスカートだった。
急カーブしたり急発進する度にスカートはひらりと舞い上がった。その度に露わになる太もも。
ハリーは天才子役であると同時に普通の11歳の少年である。
あと数ミリ、あとほんの少しめくれ上がれば……。
――もうちょっと風が吹いてくれたらなぁ
ハリーはそう思った。
結局あと少しの所で駄目だったのでハリーは落胆した。
しかし練習後にロンの兄ジョージの箒に乗せてもらうことができた。
学校の古い箒と違い、とても滑らかで飛びやすかった。
それにオリバーはハリーの飛びっぷりに感服して、来年のクィ

ディッチメンバーに絶対入れると約束してくれた。

「今日わかったんだ。箒に乗っている時の女の子は一番隙がある」
その日の夜、シェーマスは真剣な目つきで言った。
クィディッチの練習を見に来ていなかったネビルは不思議そうに首を傾げている。
「いいか、よく聞いてくれ。来週からの飛行訓練で僕達には為さねばならぬ使命がある」
シェーマスの言葉に、ロンは「まさか君……」と呟いた。
シェーマスはロンを見て頷く。
「パンツだ。女の子のパンツを見る絶好の機会だ。工夫さえすれば、飛行訓練はパンチラの宝庫になる」
「おーーー!」
ロンとディーンとネビルが拍手した。
「作戦はこうだ。僕達はおかしくない程度に低空飛行する。そしてハリー。君の飛びっぷりは最高だ。だから――」
「君が何気なく女の子の隣を猛スピードで飛んでくれたら、その風圧でスカートが捲れる! おったまげー最高だぜ!」
期待のこもった目で見つめられてハリーは困った。
「無理だよ。だって僕、子役だから純真純白なイメージを保たないと」
「子役? ここは魔法界だよ! それに誰も外に漏らしたりしない」
ネビルがウキウキ言う。
「うん、でもやっぱり……」
「どうしたんだいハリー? 言いたいことがあるなら言った方がいいよ」
ロンがベッドから身を乗り出した。
「いや……だって」
「だって?」
シェーマスもハリーの方によってくる。
ハリーは意を決した。

「……だって、だってその方法だと僕はパンツ見られないじゃん！」
誰だってハーマイオニーのパンツを見たいに決まってる。
みんなは呻いた。
「でもハリー、さっき「子役だから純真純白なイメージを保たないと」とか言ってなかった？」
ロンの声真似は相変わらずそっくりで鼻に付く。
「純白なイメージとか別にどうでもいいよ！　そんなのホグワーツじゃ関係ないもん！」
「ウワーオ」
ネビルが驚いた。
それから厳正なる議論の結果、一人ずつ順番に女の子の側を通り過ぎることになった。
しかしそれからが本当の戦いの始まりだった。
どのような順番でその役割をするのか。あまり露骨にやると先生に怒られるだろうが、どの程度の低空飛行までは許されるのか。捗る妄想。高まる期待。
議論は白熱し、いつのまにかハリーは寝落ちしていた。

夜に何があろうといつも通り時間は流れていく。
朝食を食べている時、ハリーのところにフクロウが手紙を運んできた。
この時間には何百羽ものフクロウが大広間になだれ込んできて、テーブルの上を旋回して目当ての人の所に手紙や小包を落としていくのだ。マルフォイはいつも家から送られてくる高級菓子を自慢しているが、ハリーに手紙が送られてくることはほとんどなかったので、心がはずんだ。
「ハグリッドからだ！」
ハリーは急いで封を開けた。

親愛なるハリー

ホグワーツは楽しいですか。よかったら今日の午後、お茶に来ませんか。
いろいろ聞きたいです。
ハグリッドより

「やったあ！」
ハリーはすぐさま返事を書いて、フクロウのヘドウィグに持たせた。ヘドウィグはホーと一回鳴いて、飛び立った。
「どうしたんだい？」
「ハグリッドから手紙が来たんだ！」
「へー」
眠そうなロンはトーストにジャムではなくフクロウの糞を塗っていた。ハリーは面白そうなので放置することにした。
「おはよう。ねえ、ちょっといいかな。僕は5年生のフレディ・レイコック。一緒に朝食どう？」
突然、ハリーはレイブンクロー生に声をかけられた。
振り返ると、スマートな高身長の青年が立っていた。
「何ですか？」
「僕、将来、魔法とマグルのＣＧの技術を融合させて作品を作ることが夢なんだ。君は僕のイメージにぴったりの役者なんだ！　あ、僕はマグル生まれだから、勿論君のことは小さい頃から見てきたよ。特に『星のカラクリ』なんか最高だったよ！」
「ありがとうございます！」
魔法とＣＧの融合……難しそうだけど楽しそうだ。
ハリーはレイブンクローのテーブルに移動した。
「僕のプランとしてはホグワーツの雄大な自然を舞台に一本、映画を撮りたいと思っているんだ。ストーリーも大事だけど、もっと生命の輝きとか自然の脅威とか魔法の美しさとかを押し出したいと思ってる。例えば――」
フレディは自らの計画を熱弁した。
「いいですね、それ！　ぜひ参加させて下さい！」

ここのところ子役の仕事がなくて手持ち無沙汰だったのだ。
それにマグルと魔法を織り交ぜた作品というのも興味が湧く。
「よかった！　ハリーなら分かってくれると思ってたよ、ありがとう！」
フレディとハリーは熱烈な握手をした。
「でも、準備とか許可を取ったりとか人集めとかでもう少し時間がかかりそうなんだ。進捗状況を伝えるよ」
「ありがとう！」
今後の楽しみができた。ハリーはとても楽しみだった。

その日の午後、ハリーはひとりでハグリッドの小屋に向かっていた。
ロンとハーマイオニーを誘ってもよかったのだが、ひとりで来たのには理由がある。
両親について聞きたかったからだ。なんとなく友達の前では聞きたくない気分だった。
ハリーは禁じられた森の端にある木の小屋に着いた。ここにハグリッドが住んでいるはずだ。
ノックすると、中から犬が戸を引っ掻く音と吠える声が何度も聞こえてくる。
「退がれ、ファング！　落ち着いちょれ」
ハグリッドの大声が響く。
そして少しして、ハグリッドが現れた。
「おおハリー！　いらっしゃい。おい、待て、ファング！」
ハグリッドは巨大なボアーハウンド犬を抑えながら、ハリーを部屋の中に案内した。
ハグリッドの部屋はちょっと獣くさかったが、温かみがあった。天井からハムやきじ鳥がぶら下がり、銅のヤカンが焚き火にかけられている。
家具は全部巨大で、ハリーはなんとかソファによじ登って座った。

「くつろいでくれや」
ハグリッドはロックケーキと紅茶をハリーに差し出した。
「ホグワーツはどうだ？　楽しんどるか？」
「うん、すごく楽しいよ。昨日はクィディッチの練習の見学に行ったんだ。それに授業も毎日がファンタジー映画みたいで、まだ自分が魔法使いだって信じられないよ」
「おお、おお、そりゃよかった。困ってることはないか？」
ハリーはしっかりしている子だ。
入学して間も無くのこの時期にホグワーツの生活について聞くと、大抵の子供達は口を開くなり管理人のフィルチやスネイプ先生の悪口を言うが、ハリーは何も言わなかった。
だからこそハグリッドはハリーのことが心配になった。
ハリーはちょっと顔を曇らせた。
「僕は何も困ってないんだけど……ハーマイオニーが」
「そりゃ新入生の女の子か？」
「うん、マルフォイにからかわれてるんだ。それにスネイプ先生も、ハーマイオニーが完璧に魔法薬を調合しても、それ以下のマルフォイとかスリザリン生にしか加点しないんだ。ハグリッド、どうして先生まで差別を叱らないの？」
ハリーは静かに話していたが、怒りが伝わってきた。
「スネイプ先生は昔っからスリザリン贔屓でな、別にハーマイオニーが純血じゃないから加点しないっちゅうわけじゃない」
「でも周りからはそう見えるし、ハーマイオニーがそのせいで傷ついてるんだ」
「わかった。スネイプ先生には後で話しとく。そのハーマイオニーには、もしよかったら俺の小屋に来いって言っといてくれ」
「ありがとうハグリッド！」
ハリーは嬉しそうに笑った。
「おまえさんは優しいな。母さんにそっくりだ」
ハグリッドは懐かしそうにハリーの緑色の瞳を見つめた。
「僕、性格は母さんに似てるのかなぁ。そういえば、僕の父さんはクィ

ディッチプレイヤーだって聞いたんだけど本当なの？」
「そーうだそうだ」
ハグリッドは遠くを見つめた。
「超人気の優秀なチェイサーだった。クィディッチだけじゃなく、なーんでも良くできた。神さまはいい人を手元に置いておきたがるっちゅうのは本当かもしれんなぁ」
ハリーはソファの上で上下にモフモフ浮き沈みしながら聞いていた。
「……ハグリッド、あの卵なに？」
ハリーは暖炉の横に置かれている黒い卵を指差した。
「ん、なんだ。ああ、あれは秘密だ。時が来るまで冬眠させなきゃあならん」
ハグリッドは幸せそうだ。
その時、ドカーンという音と共に小屋がグラグラっと揺れた。
何か大きな動物が小屋に体当たりしている。
ハリーはソファから滑り落ちた。
「おお大変だ！　エルンペントとクィンタペッドのハーフが暴れてる。待っちょれハリー」
ハグリッドはドタバタと小屋を出て行った。ファングもそれに続く。
間も無く、2度目の揺れが襲った。ハリーは必死にソファの足を掴んだ。棚が揺れて、中の羊皮紙やら何やらが音を立てて床に巻き散らかった。テーブルの上の物も落ちた。
「大変だ！」
揺れが収まると、ハリーは急いで落ちた物――日刊預言者新聞やらを拾った。その中で一枚の写真を手に取った時、ハリーは手を止めた。
「……ん？」
写真に写るのはハリーによく似た少年だった。2年生ぐらいだろうか。グリフィンドールの暖炉の前で、3人の少年達と共に笑顔で手を振っている。魔法界の写真は動くのだ。

「あ、これも」
今度のは7年生ぐらいに見えた。首席バッチを付けた赤毛の女性と丸眼鏡の黒髪の青年が、嬉しそうに見つめ合っている。
女性のグリーンの瞳はハリーにそっくりだった。
……ハリーの両親だった。
ハリーは初めて両親の顔を知った。
ハリーは穴が空くほどじっと写真を見つめた。
父親と共に写る3人の男性――そのうち長身の少年はとてもハンサムで高慢ちきな顔をしている。鳶色の髪の男の子は大人っぽい雰囲気だ。それから背の低い男の子は一番無邪気にニコニコ笑っているように見える。
「ふう、やれやれ……こりゃどうしたハリー？」
いつのまにかハグリッドが戻ってきた。
「ごめんなさい。あの揺れで棚から物が落ちて……」
ハグリッドはすぐ合点がいった。
「なるほど。ほんとはアルバムにしてから渡すつもりだったんだが、見つかっちまったら仕方ねえ」
「ごめん。ハグリッド、この3人は父さんの親友？」
「ん、ああ、クラスメイトと言ったところか……その写真より、いい写真がある。えっとどこかに……」
ハグリッドはハリーから写真を取り上げ、床の写真を探った。
「これだ！」
家の前で若い男女が幸せそうに肩を並べていた。女性の腕には赤ん坊が抱かれている。
「これが……僕？」
ハグリッドは頷いた。ハリーは感激して言葉が出なかった。
「あげるよ、ハリー」
ハグリッドが優しく言った。

ハリーは写真を大切にローブの内側にしまうと小屋を出て、禁じられた森の近くの人気の無い場所にある岩に腰掛けた。

両親が亡くなったハリーにとって、写真は唯一、両親が生きている時の姿を確認できる術だった。

日が暮れるまでハリーは写真を眺め続けた。

9話　ノルウェー・ドラゴン

ハグリッドから貰った写真をトランクにしまう。
ハリーは大きく息を吐いた。
幼い頃から天才子役として持て囃されて、魔法界に来てからも〝生き残った男の子〟として勝手に英雄視されてきた。
もし神様と取引できるなら、そんな名誉や人気なんか全部捨ててもいいから、両親を取り戻したい。
……考えてもどうしようもないことだ。
そんなことよりハーマイオニーのパンツのことを考えよう！
うまくいけば、次の飛行訓練の授業で見えるはずだ。それと、大広間の長椅子を跨ぐ時もなかなか際どい瞬間がある。
そうだ、身の回りには幸せなことが沢山あるじゃないか！
「ハリー、いつのまに帰ってたんだい？」
ロンは中々帰ってこないハリーを心配していた。
「今帰ってきたところだよ。それより、ちょっと気になることがあるんだ」
ハリーはハグリッドの小屋にあった黒い卵について話した。
「うーんなんだろう。ドラゴンの一部はそんな卵だった気がするけど……」
「ドラゴンを飼育できるの!?」
「違法行為だけどね。１７０９年のワーロック法でドラゴン飼育は禁止になったんだ。みんな知ってる。だって、もし家の裏庭でドラゴン飼ってたら、どうしたってマグルに気づかれるだろ」
「よく知ってるね」
「チャーリーがルーマニアでドラゴンの研究してるんだ」
チャーリーはウィーズリー家の次男だ。
「なら、ハグリッドは法律違反しようとしてるってこと？」
「その卵がドラゴンならね」
ハリーは心配になった。
ハグリッドは猛獣であればあるほど大好きだ。ドラゴンを飼おう

と思っていても不思議ではない。

次の日、ハリーはハーマイオニーに質問した。
ドラゴンの卵について知りたいと言ったのだ。
「どうしてそんなことが知りたいの？」
階段を早足で登りながらハーマイオニーが尋ねる。
「だってドラゴンだよ！　男のロマンだよ！」
「私にはよく分からないわ。そういえばあなた、子役の時もそういうファンタジックな映画には一回も出てなかったわよね。『はてしない物語』の主人公は絶対にあなたになると思ってたわ」
「そのオファーきたよ！　叔母さんと叔父さんが断ったんだ。魔法とかをあまり好まない方々だから」
「そうだったのね」
2人は図書館に到着した。
ハーマイオニーは迷いなく歩いていく。
「場所を暗記してるの？」
「そうね、大まかには」
ハーマイオニーの勤勉さには驚かされる。
「ほら、ここよ。ドラゴンに関する本がたくさんあるわ。『ドラゴンビジュアル図鑑』とかどうかしら？」
ハーマイオニーは分厚い本を取り出した。
「ウワーオ」
美しいドラゴンの写真がページいっぱいに貼られていた。卵や巣窟の写真もある。ドラゴンは時々口から火を吹いてハリー達を驚かせた。
「あ、この卵……」
ハリーはノルウェー・リッジバック種のページで手を止めた。
「どうしたの？」
ハーマイオニーは訝しんだ。
「何でもない。ただ、この卵だけ真っ黒だから何でだろうなあって」
「それは3年生から選択授業で魔法生物飼育学を取れば教えてもらえ

るわ。それかこの辺の本を読むことね」
「なーるほど」
ハリーは適当に本を取った。
「じゃあこれを借りてみるよ」
「あなたが勉強を始めてくれるなんてとっても嬉しいわ」
ハーマイオニーは満足げだった。
せっかく色々アドバイスしてくれたのに、読むふりだけするのは申し訳ない。めんどくさいが、この本はきちんと読むことにしよう。ハリーは決めた。

その夜、ハリーはどうしようか悩んでいた。
ハグリッドは違法行為をしようとしている。ハリーはハグリッドが好きだった。
友だちなら、止めなければならない。
「ねえロン。ドラゴンを育ててるってバレたらどれぐらいの罰が下されるの？」
「育てようと思ってるの!?　やめたほうがいいよ！　アズカバン行きになる！」
「アズカバン？」
「魔法使いの牢獄だ。吸魂鬼っていう魔法生物がいて、囚人たちの幸せを吸い取るんだ。一回パパが視察でアズカバンに行ったんだけど、帰ってきた時には死人みたいな顔してた。1日行っただけで！」
なんて非人道的な施設なんだ！
魔法界では一度道を誤ったら最後、社会復帰や更生などは全く考えられていない場所に追いやられてしまうのだ！
ハリーは震え上がった。
今すぐにでもハグリッドを止めないと！
「どうしたんだいハリー、顔が青ざめてるよ」
ハリーは寝室を見回した。ハリーとロン、ねずみのスキャバース以外には誰もいないし、入ってくる気配もない。

「……ハグリッドがドラゴンの卵を持ってるんだ」
「なんだって!?」
「卵が孵る前にどうにかしたいんだ。どうすればいいと思う?」
「……うーん……卵を壊すとか?」
「多分、それをしたらハグリッドはとても怒って二度とお茶会に呼んでくれなくなるよ」
「そうかー」
「……そういえば、君のお兄さんはドラゴンの研究してるんだよね?」
「そうだ! チャーリーに預ければいい! すぐ手紙書くよ!」
ロンはフクロウ小屋に走っていった。

3日後、ハリーはハグリッドのところに向かっていた。足取りは重かった。
ハグリッドはドラゴンを育てるのが夢だと言っていたから、きっとドラゴンを他の人に預けることに反対するに違いない。
しかしハリーはチャーリーからの手紙を持っていた。ハグリッドに読ませろ、と書かれていたものだ。
ドアをノックすると、ハグリッドはすぐに出てきた。ファングは寝ていた。黒い卵は相変わらず暖炉の横に置かれている。
「ハグリッド、言いたいことがあるんだ」
ロックケーキを噛みちぎり、一通りの世間話を終えたところでハリーは本題に入った。
「なんだ?」
ハグリッドはユニコーンのたてがみの手入れをしている。
「あの黒い卵、ドラゴンの卵だよね?」
「声を潜めとくれ。そうだ、ドラゴンの卵だ。ちょいと前にパブで賭けに勝ってもらったんだ。孵化させるには季節がよくないから、ああやって眠らせとるんだ」
「ハグリッド、ワーロック法って知ってる?」
「んー、まあなんだ、聞いたことはあるな」
「ドラゴンを飼うのは法律で禁止されてるんだ。見つかったら捕まっ

てアズカバン送りにされるよ。それに何より、ドラゴンだってこんな狭い場所より自然の中で悠々と育ちたいと思うな。ドラゴンの成長スピードはすごく早いし、特にこの種類のドラゴンは火を吐き始める時期が早いんだ。ハグリッドがドラゴンを飼いたいっていう気持ちはよく分かるけど、ドラゴンのことを考えると専門家に育ててもらったほうがいいんじゃないかな」

ハリーは真剣に説得した。ハグリッドは目をそらした。

「でもドラゴンを育てるのは俺のちっちゃい頃からの夢だったんだ。それに俺なら見つからんよう大事に育てられる」

ハグリッドは胸を張った。

「ハグリッドは魔法生物に詳しいけど、物理的にドラゴンを隠すのは無理だと思うよ」

「でも、やってみんと分からんだろうが？」

「……ハグリッド。実はもうチャーリーにこのドラゴンのことを話したんだ。そしたら引き取ってくれるって」

ハリーはチャーリーからの手紙を渡した。

ハグリッドは見るからに不機嫌になった。

「ごめんなさいハグリッド。でもハグリッドとドラゴンのためなんだ」

「俺だって自分がどれぐらい出来るかの判断はある。無断でこんなこたぁして欲しくない」

ハグリッドは手紙を握りつぶした。巨体なだけに怒ると怖かった。

ハリーは一歩一歩下がりながらも、懸命にハグリッドを説得しようとした。

「何も言わずにしちゃったのは本当にごめんなさい。でも言えば、反対されると思ったんだ。ここは学校の敷地の一部だしドラゴンの飼育には向いてないよ。チャーリーに預けて、時々見に行ったり手紙とか写真で成長度合いを確認したりした方がみんなのためになると思ったんだ」

ハリーはビビりながらも必死に話した。ハグリッドはハリーを見た。

一瞬の沈黙の後、ハグリッドはワナワナ震えて頭を抱えて座り込んだ。
「すまねえハリー。おまえさんが全部正しいっちゅうのはわかっとる。俺とドラゴンのことを深ーく考えてくれてるのも伝わっとる。でも、ドラゴンを俺の手で育てるのは夢だったんだ」
ハグリッドはすすり泣いた。
その時、ドアをノックする音が聞こえた。
ハリーは口を押さえた。
「ちょっと待っといてくれ」
ハリーはソファの陰に隠れた。
ハグリッドはドアを開けた。
白髭の魔法使いが微笑み顔で立っていた。
「だ、ダンブルドア先生様……」
「たまたま国際魔法使い連盟会議の打ち上げで最高級のロックケーキを頂いての。ハグリッドの好物だと思ったのじゃが、どうかね？」
「ありがとうございます！　どうぞおあがりください」
ハグリッドは袖で涙と鼻水を拭い、キッチンの方に行った。
「おやハリー。こんにちは」
「こんにちは、ダンブルドア校長先生」
ハリーは初めて校長先生と話した。
ダンブルドアのオーラはどんな大御所俳優にも勝るとハリーは感じた。
ハグリッドがロックケーキを切って、３枚の皿に乗せた。
食べてみると、ハグリッドのお手製ロックケーキよりずっとずっと美味しかった。
「いやはや此処はいい家じゃ。そういえば、ニュートがホグワーツの黒い森を冒険したいと言っておった。近々来るかもしれんから、その時の案内はきみに頼んでもいいかね？」
「へい、もちろんです！　そんな光栄な役割……ありがとうございます！」
「ニュートって、ニュート・スキャマンダーのことですか？　あの３年

生から使う教科書を書いた？」
「その通りじゃ。よく知っとるの」
「パーシーに見せてもらったんです」
「ふむ、彼は優秀な監督生じゃ」
ダンブルドアはハグリッドの口にロックケーキを運んだ。ハグリッドは恥ずかしそうに食べた。
毛むくじゃらのおっさんとお爺さんがあーんしている。
これが魔法界か!!
ハリーは衝撃を受けた。
そんなハリーに対しダンブルドアは悪戯っ子のような瞳で微笑みかけ、それから再びハグリッドの方を向いた。
「きみには昔から本当によく働いてもらっておる。ホグワーツの安全が保たれているのはきみの豊富な魔法生物への知識と愛が大きく貢献しているじゃろう」
「そんな……それほどじゃあございません」
「ここらで一度休みを取ってみてはどうかな？　例えばルーマニアの雄大な自然などは最高じゃ。特に冬から春にかけては見応えがあるらしい」
冬から春というのはドラゴンの卵を孵すのにちょうどいい時期だ。
それにルーマニアは、チャーリーがいる場所である。
ダンブルドアはハグリッドがドラゴンを育てたいと思っていることを悟って、合法にそうできるようにしてあげているのだとハリーは気づいた。
流石は偉大な魔法使い！
そして無事、ハグリッドはクリスマス休暇から2ヶ月の休みを取ってルーマニアに行き、チャーリーと共にドラゴンの成長を見守ることになった。
ハグリッドがホグワーツから居なくなるのは悲しいけれど、アズカバンに行ってしまうよりはずっといい。
嬉しそうにニコニコするハグリッドを、ハリーは心の底から祝福した。

１０話　ハロウィン

ハグリッドのドラゴン騒動もひと段落つき、ホグワーツの宿題量にも慣れてきた頃、ハロウィンがやってきた。
城中の鎧が仮装して、大広間にはハグリッドが育てた巨大カボチャが飾られ、キッチンからはパンプキンパイのいい香りが漂ってくる。
子役の時にハロウィンのイベントで仮装したことはあるけれど、ここまで素晴らしく豪華なハロウィンは迎えたことがない。
その日の呪文学の授業では、とうとう物を飛ばす呪文を習う事になった。
フリットウィック先生がネビルのペットのヒキガエルをブンブン飛び回らせるのを見てから、皆やりたくて堪らなかった呪文だ。
二人一組でやることになり、ハリーはネビルと組んだ。シェーマスはディーン、ロンはハーマイオニーだ。
「さあ、しなやかな手首の動かし方を思い出して下さいね、皆さん」
小柄なフリットウィック先生は積み重ねた本の上に立って、キーキー声で言った。
「いいですか、ビューン、ヒョイ、ですよ。正確な発音を意識しないとマヌケな魔法使いバルッフィオのようにバッファローが胸の上に乗ることになります。さあ、ビューン、ヒョイ」
簡単そうに見えてそれは非常に難しかった。杖を持つと、体が思うように動かなくなるのだ。棒切れなら楽々「ビューン、ヒョイ!」と出来るのに、杖に持ち替えると腕が重くなる。
「ヴァンガビリョービンビン・レビオサーンポスト!」
ネビルは支離滅裂な呪文を唱えていた。
「ネビル、ウィンガーディアム・レビオーサだよ」
ハリーは杖を持たない状態でゆっくり発音した。
「ウィ、ウィンガディーアム・レビなんだっけ?」
「レビオーサ」
「ヴォンガードリアム・レピオータン!」
浮かび上がらせるはずの羽はどんどん縮こまって、しまいには消え

てしまった。ネビルは肩をすくめる。
次はハリーの番だ。
「ウィンガーディアーム・レビオーサー」
何も起きない。
「えっとね、ウィ、ウィ……あの呪文」
ネビルは黒板を指差した。
「なるほど。よし……ウォンガーディアム・レビオーサ！」
羽はコサックダンスを始めた。
なんてこったい。
周りを見ると、どこも同じような悲惨さだった。
ディーンとシェーマスのペアは羽を大爆発させていたし、ロンとハーマイオニーのペアは揉めていた。
「ウィンガーディアム・レビオサー！」
「だから、ウィンガーディアム・レビオーサ、よ。あなたのはレビオサー」
「ふん。なら君がやってみろよ」
「ウィンガーディアム・レビオーサ！」
ハーマイオニーの羽はふわふわ浮かび上がった。ハリーは思わず拍手した。ロンはしかめっ面してる。
「ミス・グレンジャー。素晴らしいです。グリフィンドールに１０点！」
「ウワーオ！」
ハリーとネビルは喜んだ。
「僕だってあれぐらい出来るさ。ウィンガーディアム・レビオサー！」
ロンは杖をめちゃくちゃに振り回した。すると羽ではなくハーマイオニーのスカートがめくれ――ちらりと白いパンツが見えた。
マーリンの髭!!
ハリーは子役としての力を最大限に発揮して、何事も無かったかのように装った。ネビルはキャッと言って顔を背けた。
ロンはびっくりしてすぐに杖を下げた。
「ごめんハーマイオニー！　そんなつもりじゃなかったんだ！」

「……ロンのバカ！」
ハーマイオニーはロンをグーパンチした。ロンはうめいて椅子から吹っ飛ばされた。
それを見てフリットウィック先生は即座に状況を把握した。
「ミスター・ウィーズリー、5点減点！　しっかり集中しないからそうなるんですよ。ペアを変えましょう。ミスター・ウィーズリーはミスター・フィネガンと組んで下さい」
ハーマイオニーはパドマと組むことになった。
なんとなくドギマギしたまま、呪文学の授業は終わった。

「1ヶ月分の幸せが一気にやってきたみたいだ」
「うん僕も」
「最高だよね？　呪文学って」
「最高さ」
放課後、寝室でロンはうっとりしていた。
「あのアングル、マジでヤバい」
「いいなぁ」
「でも彼女怒ってたよね。なんかしてあげた方がいいかな？」
「優しくしてあげたら？」
「そうだね、もう僕、彼女のことバカにしたりしないよ絶対に！」
できれば自分だけが見たかったのにとハリーは思っていた。
夕食はお待ちかねのハロウィンパーティーだ。
大広間からはパンプキンのいい香りが漂っていて、よだれが出そうだ。大勢の人が大広間に向かっているので、廊下は非常に混雑していた。そりゃそうだ。この香りを嗅いだら、よっぽどの用事がない限り皆ハロウィンパーティーに向かうだろう。
「ごめんロン！　急用ができたんだ。一人で先にパーティーに行ってもらえる？」
「どうしたんだい？」
「ちょっと用事が！」
ハリーは人の波に逆らって、今来たばかりの道を引き返した。

「おや、ハリー・ポッターさん。パーティーには行かないのですか？」
グリフィンドールのゴーストであるほとんど首なしニックが話しかけてきた。
「うん、用事があるんだ」
ハリーは足がもつれないようにしながら急いで歩いていた。いくつもの階段を上り、フレッドとジョージから教えてもらった抜け道を通り、ハリーは図書館に到着した。
扉を開けて中に入ると、案の定生徒はほとんどいなかった。
これなら誰にも邪魔されずに両親のことを調べられる。
どこに両親のことは書いてあるだろうかと思ったハリーは手始めに時事コーナーに向かった。
『よくわかる魔法界時事１００年』というつまらなそうな本をめくると、年表のページがあった。
父さんと母さんが死んだのは自分が一歳の時――つまり１９８１年だ。
年表の背景はその年の幸福度に合わせて色が変えられていて、１９７０年代は黒々とした墨汁のような液体が渦巻いていた。
『１９７９年――例のあの人によって起こされたと思われる襲撃事件が年に５００件を超す。アズカバン周辺の吸魂鬼の数を増やすが時すでに遅し。』
『１９８０年――ミリセント・バグノールが魔法大臣に就任。例のあの人の勢力はますます強くなる。８月１５日、呪文学者研究大会を狙ったテロにより呪文学の権威ホラ・ユークリットを始めとする研究者達が亡くなる』などなど。
年表に広がるのは暗い出来事ばかりだ。ページをめくるにつれてますます闇は増している。
ハリーはあるページをめくって、手を止めた。
どす黒い暗闇が、ある一線を隔てて明るく金色に光っていた。境目こそ歴史が変わった時――両親が死んだ時に違いない。ハリーの予想は当たっていた。
『１９８１年１０月３１日――生き残った男の子ハリー・ポッターが

『例のあの人』を打ち破る。魔法界に平和が訪れる。』
ちょうど１０年前だ。父さんと母さんは１０年前のハロウィンに死んだのだ。１０年か……長いような短いような期間だ。そもそも物心ついた時から両親は居なかったのだから、何年経っていようと変わらないのかもしれない。
ハリーは本を片付け、過去の新聞が置かれた場所に行った。
１９８１年の１０月３１日から１１月５日ぐらいまでの新聞をまとめて取り、誰もいないテーブルに座って、ハリーは新聞を読み始めた。
１０月３１日の朝刊にハリーのことは書かれていなかった。だが号外を取ると載っていた。一面だ。
『闇の帝王破れる！　倒したのは一歳の赤ん坊！』という表題がでかでかと書かれている。
ざっと目を通す限り、各地でお祝いパーティーが開かれただとか、魔法で流れ星を一気に落としたせいでマグルを驚かせてしまっただとか、浮き足立った感じの明るいニュースが並んでいる。
そして最後の方のほんの一、二文に両親の訃報は載っていた。
両親はヴォルデモート卿によって殺された最後の犠牲者だったのだと、ハリーは初めて実感した。
複雑な気分で新聞をめくっていくと、2日3日経った頃から徐々にヴォルデモートの犠牲者に対する追悼文や手紙が載せられるようになった。両親に対するものもたくさん載せられていた。
同級生、下級生、上級生、闇払い、それに司書のマダム・ピンズも書いていた。
ハリーは一つ一つの記事を丁寧に読んだ。両親の痕跡を一つでも多く拾い集めたい一心だった。読むたびにハリーの心は温かくなった。
１１月3日の夕刊の記事でハリーは思わず手を止めた。見覚えのある顔を見つけたのだ。
『シリウス・ブラック逮捕！　爆発で１３人死亡』
看守に両腕を掴まれ、狂ったように高笑いするハンサムな青年の写

真が大きく貼られている。
彼はハグリッドの小屋にあった写真で父親と共に写っていた青年とそっくり――恐らく同一人物だった。
しかしあの時の優雅で少し高慢ちきな笑みはなく、正気を失っているように見えた。
ハリーは暫くじっとその写真の青年を見て、それから記事に目を移した。
『11月1日の真昼間に魔法による爆発事件が発生し、魔法使い1名を含む計13名が亡くなった。この件でシリウス・ブラックが逮捕された。彼は一年程前から死喰い人になってスパイとして情報を密告しており、ポッター夫妻の居場所を密告して死亡させたのも彼であるという。魔法使いたちの怒りたるや激しく、シリウス・ブラックは直ちに終身刑に処された。国内では死刑制度を設けるべきだとの署名運動も活発化している。(ブラックとポッター夫妻の関係の詳細は12面参照)』
12面にはその詳細が載っていた。
『いま明かされる酷い裏切りの真実！　ブラックとポッター夫妻は親友だった！
「シリウス・ブラックとジェームズ・ポッターは親友で、いつも一緒にほっつき歩いてました。2人とも優秀で、人気者でした。あの二人が出会えたのは奇跡だと思います」懐かしそうに語るのは学生時代のクラスメイトである。
しかしその奇跡は最悪の方向へと向かう。
シリウス・ブラックは「例のあの人」への抵抗軍に所属していながら、一年程前から密通していたのだ。
ある日ポッター一家は自らが例のあの人に狙われていると知り、身を潜めることにした。そして自らの居住地を〝親友の〟ブラックだけに伝えた。その厚い信頼を非情にも裏切り、ブラックは即座にその情報を主人に密告し、ポッター夫妻を死に追いやった。
さらに悲劇は重なる。彼らにはもう一人の親友ピーター・ペティグリューがいた。

「学生時代はいつもふたりにくっついてる子でした。ふたりの悪戯を一番喜ぶのはピーターで、いつもニコニコ笑ってました。細かな魔法はうまかったです」と同級生。

ブラックの裏切りをいち早く知ったペティグリュー氏は、ブラックを一人で追った。マグル世界の配管工まで追い詰めたところでブラックは逆上し、パイプや周りの歩行者諸々と共にペティグリュー氏を吹き飛ばした。残された遺体は左手の小指だけであった。

彼にはその勇気を称して勲一等マーリン勲章の授与が検討されている。

自らの犠牲も厭わず平和の為に尽力した三人に哀悼の意を示すとともに、ふたりの親友とその妻を死に導いたブラックへの厳罰を望むところである。』

読み終わってしばらくハリーは動けなかった。

頭の中にハグリッドの小屋で見た写真が浮かんだ。ジェームズ・ポッターとシリウス・ブラックはどの写真でも一緒に写っていた。とても幸福そうな笑顔だった。あれは偽りだったというのか。

ハリーは気分が悪くなっているのを感じながら新聞を閉じて、一面のブラックの写真を見た。

もしこいつが居なかったら自分はどんな風に暮らしてただろう。

誕生日のケーキを作ってくれたのは母さんだったかもしれない。

休みの日には父さんと一緒に箒に乗って空を飛び回ってたかもしれない。

ホグワーツ特急に乗る前に母さんがハグとキスしてくれたかもしれない。

その全てがこの男によって奪われたのだ。

その時、入り口から虹色の不死鳥の守護霊が飛んできて、司書の前で止まった。ハリーは不思議なほど強くその鳥に心を惹かれた。

『地下にトロールが出現した。図書室に生徒が居れば、安全が確保されるまでそこで待機させておくように』

ダンブルドアの声だった。

マダム・ピンスは素早く立ち上がると、普段からは考えられない大きな声を出した。
「生徒達！　今すぐこちらに集まりなさい！　緊急事態です！」
ハリーは新聞から目を離して、取り憑かれたように司書のカウンターの近くに――不死鳥の近くに寄った。
しかし触ろうとした所で、不死鳥は消えてしまった。どっと黒々とした気持ちが戻ってきた。
ハリーは落胆しながらも緊急事態が起きて良かったと思った。あのままブラックの写真を見続けていたら、心がめちゃくちゃになってしまったかもしれない。ハリーは何回も深呼吸して、何とか心を落ち着けようとした。
ハロウィンパーティー中に図書室にいるのはハリーの他に3人しか居なかった。みんな7年生で、勉学に切羽詰まっている生徒達だ。
マダム・ピンスはハリーを見て驚いた。ゴースト並みに青ざめた顔をしていた。
「大丈夫ですか、ポッター？」
「あ、はい。ごめんなさいちょっと驚いて……」
「トロールは地下に出たようですから、ここは安全でしょう」
「はい」
ハリーはなんとか首を動かして頷いた。
しばらく待機していると再び不死鳥が飛んできた。
『トロールは倒された。生徒達は直ちに寮の談話室に戻るように。以後、外出禁止とする。おやすみなさい』
7年生たちはホッと息をついた。
「では皆さん、早く寮に帰りなさい！」
「はーい」
7年生たちは勉強道具を片付けて図書館から出ていった。
「ミスター・ポッター、体調が悪いのですか？　トロールはもう倒されましたから、安心して談話室に戻って下さい。それとも医務室に連れて行きましょうか？」
ハリーがずっとしゃがみこんだままだったので、マダム・ピンスは

心配になって声をかけた。
その時になって初めてハリーは皆が居なくなっていることに気づいた。
「ん、あれ、トロールは……」
「もうとっくに倒されましたよ」
「ああ、それはよかったです……」
ハリーの声は上ずっていた。よろよろした足取りで図書館を出ていく後ろ姿をマダム・ピンスは大丈夫かしらと思いながら見ていた。
「私も早く職員室に戻りましょう」
マダム・ピンスは一人で呟き、閉館前の図書館のチェックを始めた。本を指定された場所に戻していないことが稀にあるのだ。そういう時は触った痕跡を魔法で調べて誰の仕業か特定して、しっかりと罰を与えている。
「あらまあこんな大胆に……!」
机の上に広げられた新聞を見て、マダム・ピンスは目を細めた。しかし老眼鏡をかけて記事を軽く読んだ後、彼女の怒りは消えていた。
「……これは」
マダム・ピンスは心を痛め、奥のテーブルを懐かしそうに眺めた――ジェームズとリリーがよく一緒に座って勉強していた場所だ。
「大変だわ!」
マダム・ピンスは図書館を飛び出て廊下を見回した。しかしハリーの姿は既に無く、ただパンプキンパイの香りだけが残っていた。

11話　クィディッチ観戦

ハリーは猛烈に胸がムカムカして気分が悪かった。パンプキンパイの甘い香りは吐き気を助長させた。
考えないようにしてもシリウス・ブラックの顔が頭に浮かんできてしまう。両親と写っていた幸せそうな笑顔、看守に連行されている途中の狂気じみた乾いた笑い……。
「合言葉は？」
グリフィンドールの談話室の肖像画、太ったレディが尋ねる。
「パンプキンパイ・イン・かぼちゃジュース」
「大正解。顔色が悪いけど大丈夫？」
「うん……」
肖像画の裏の抜け穴に何とかよじ登って、ハリーは談話室に着いた。
そこは城内にトロールが入ったニュースで興奮する生徒たちでごった返していた。
「ハリー！　どうしてたんだい？　ずっと居なくて心配したよ」
手前の方でフレッド達と話していたロンはハリーの姿をいち早く見つけて駆け寄ってきた。
「ああ、ううん平気。ちょっと用事が長引いて」
「でも顔色が悪いよハリー？」
そこにハーマイオニー・グレンジャーもやってきた。
「私、あなたのためにドラゴンの本を色々借りてきたの。パーティーの時に渡そうと思ったらいなくてどうしたのかと思ったわ……ハリー、あなた大丈夫？　唇が真っ青よ」
「ちょっと冷えたのかも。心配しないで。僕、ちょっと先に寝室に行ってるよ」
ハリーはハーマイオニーから本を受け取りながら答えた。
「ついてこうか？」
「ううん、大丈夫。少し休むだけだから」
「でも心配だよ」

「ぜーんぜん心配しないで。大したことないから」
ロンは未だに心配そうだったが、ハリーの気持ちを汲み取ったのかそれ以上しつこくは言ってこなかった。
「あ、そうだ。ハリーのためにミートパイとポテトを取ってきたんだけど、食べるかい？」
「うん、ありがとうロン」
寝室に上がる階段の前でハリーはロンから食べ物が包まれたナプキンを受け取った。
「もうここでいいよ。ありがとう、ロン、それにハーマイオニーも」
「……ゆっくり寝てろよハリー」
「お大事にね、ハリー」
「うん」
ふたりはハリーが階段を上りきるまで心配そうに見ていたが、上がってはこなかった。
一人にしてくれてありがたかった。
ハリーは寝室に行くと、真っ先にトランクを開けて、両親の写真を取り出した。
ハグリッドが両親と〝親友〟が共に写っている写真をさりげなく取り上げて、代わりにくれた写真だ。
今思えばあの時のハグリッドの言動は少し不自然だった。
別のことを考えようと考えようと思ってもブラックの事が頭をよぎる。アズカバンは恐ろしいところだと魔法界の皆が口を揃えて言っていた。とてもとても苦しい目に遭っていればいい。両親が裏切られたと悟った時の苦しみの何倍も苦しんでいてほしい。
経験したことのない激しい憎しみがハリーの体中に駆け回っていた。
映画の一コマを見せてくれているかのように、シリウス・ブラックが両親を裏切った時の様子が脳裏に浮かんだ。
「やりました、帝王……ポッター夫妻が私に居場所を教えました！あの馬鹿な夫婦めが！」
美しく整ったハンサムな顔は悪役そのものの狡猾で悪どい笑みを

浮かべている……。理不尽なことに映画の中ではこういう悪役は案外人気なものだ。
今頃はアズカバンにいて、何を考えているのだろう？　立場を露わにした瞬間に主人が消滅するとは思っていなかったに違いない。何年も牢獄に閉じ込められるなんて思いもしてなかっただろう……。
ハリーは写真をしまってカーテンを引き、ベッドに入った。とても頭が重かった。本当に風邪をひいたかもしれない。
やがてロン達が帰ってくる音がした。
「大丈夫かい、ハリー？　寝てる？」
カーテン越しにロンのささやきが聞こえた。ハリーは寝ているふりをして無視した。
パーティーで疲れていたこともあってか、すぐに皆は寝付いた。最後にスキャバースの鳴き声が寝室に響いた。

それからの日々をハリーはあまり覚えていない。ただいつも両親とブラックのことが頭に浮かんでは消え、その度に寂しさと憎しみ、空虚さが押し寄せては引いてを繰り返していたのは覚えている。
ハリーはこれまで自分の感情のコントロール能力には自信があった。でもそれはコントロール出来ないほどの激しい感情に駆られたことがなかったからなのだと気付かされた。
考えても無駄だと分かっていても、ハリーはどうしても両親のことを考えてしまった。ブラックがより苦しむ方法は無いかと考えてしまった。なぜ自分の両親は死んでいるのにブラックは――例えアズカバンに幽閉されていたとしても――生きられているのか。
全てが過去に終わったことで、取り返しのつかないことだとは知っていても、考えていないと気が収まらなかった。
少しでも長い間両親を想い、ブラックを憎むことが仇討ちになるような気がした。
不思議なのは、あれ以来ハリーは突然加点されることが多くなったということだ。
魔法薬学のレポートを書く為にロンとハーマイオニーと一緒に図

書館に行った時になぜかマダム・ピンスが突然グリフィンドールに10点を与えてくれたのを筆頭に、様々な先生がちょっとしたことでハリーに加点してくれるのだ。
ハーマイオニーがそのことで文句を言っていた気がするが、ハリーはあまり覚えていなかった。

＊

「……あらまあイルマ。あなたがこんなに早く職員室に集まるなんて珍しいですわね」
時は少し遡りハロウィンの夜、職員室には先生方が集まり始めていた。
司書のマダム・ピンスはいつもはギリギリまで図書館で本を読んでいるのだが、今日だけはすぐに職員室に来ていた。話し相手はグリフィンドールの寮監マクゴナガル先生だ。
「おたくの寮の生徒のことで話したいことがありまして」
「まあ、何か悪さでもしたのですか？　本を片手で掴んだとか？」
マグゴナガルはマダム・ピンスの本に対する異常な愛情には飽き飽きしていた。
「いえ、ただ話しておいた方がいいかとおもいまして。ハリー・ポッターのことですわ」
「ハリー？　あの子は素晴らしい！　名前だけ有名なお坊ちゃんかと思ったら、ずっとしっかりしてるし優秀な子ですよ！」
レポートの採点をしていたレイブンクロー寮監のフリットウィック先生も寄ってきた。
「ハロウィンパーティーで彼は図書館に来ていたのです。そして……あの子のご両親は非常に不幸な亡くなり方をされたでしょう？」
「まったくあれは未だに信じられん！　まさに兄弟！　一心同体！あんな酷い裏切りが出来るとは！」
フリットウィックは怒りを見せた。
マグゴナガルは静かに頷いた。

マグゴナガルにとってポッター夫妻が亡くなった事は、ヴォルデモートによる数多くの犠牲者の中でも、実の弟やかつて愛したマグルの男性と並んで特に悲しい知らせだった。
「彼が図書館から出て行った後、新聞がテーブルに置きっぱなしになっていました。開かれていたのはシリウス・ブラック逮捕の記事でした」
「……まさか！　あの子が、まだ11歳の男の子が、あの恐ろしい事実を知ってしまったというのです？」
マグゴナガルは顔を青くした。
マダム・ピンスは頷いた。
「彼は真っ青な顔をしていました……唇も青ざめていて……あの時はただ体調が悪いのかと思ったのです」
フリットウィック先生は信じられないという様子で頭を振っていた。
「私達でも受け止めきれなかったというのに……なんて事でしょう」
マグゴナガルは、寮監としてどうするべきか必死に考えた。
何気なく呼び出して一緒に話をするか？　それともいつも通りに振る舞うか？　いや、それはない。何かフォローしてあげなければ、到底一人で受け止められる問題ではない……。
その時、マグゴナガルは後ろから人が近づいてくる気配を感じた。
振り返るとダンブルドアがいつもの優しい微笑みで立っていた。
「どうしたのかねみなさん？」
「ダンブルドア先生！　それが――」
マダム・ピンスが全てを説明した。
ダンブルドアは眉をひそめ、時折首を傾げたり、目を閉じたりしながら話を聞いていた。
「よく話してくれたの、イルマ。それにミネルバにフィリウスも思い出すのは辛いことだろう」
ダンブルドアは一息ついてから、口を開いた。
「……わしが思うに、悲しむことはとても大切じゃ。立ち止まり悲しみに沈む時間は前に進む糧になる」

「悲しい時ほど誰かに相談したいとは思いませんか？　私たちが相談相手になるべきでしょうか？」
　途中からやってきた薬草学のポモーナ・スプラウトが言った。
「……教員から声をかける必要はないじゃろう。最終的にはひとりで解決しなければならない問題じゃからの。しかし彼が悩みを打ち明けた時には真摯に対応してほしい」
　ダンブルドアはお願いした。
　先生方は真剣な顔で頷いた。スネイプは無表情で立ち尽くしていた。

＊

「ハリー！　ねえハリー？　ハリーったら！」
「あっどうしたのハーマイオニー？」
「あなたひと月前からずーっと同じページ読んでるわ。気づいてる？」
「たまたまだよ」
　12月が近づきかなり寒さが増してきた頃、ホグワーツはクィディッチシーズンに突入した。
　グリフィンドールは去年名シーカーのチャーリーが卒業して、その後釜が見つからずヤキモキしていた。
　そんな中、ハリーはいつものように暖炉の前のソファに座って本を読むふりをしていた。そしたらハーマイオニーに声をかけられたというわけだ。
「ハリー、最近ずーっとボーッとしてるわ。今日はグリフィンドール対スリザリンの試合よ！　応援しに行きましょう！」
　ふと周りを見ると、みんな頬にグリフィンドールのペイントをしたり、グリフィンドールカラーの赤と金の旗を振り回したりしていた。
「ほら、このマフラーを巻いて、旗を持って」
　ハーマイオニーはハリーの首にマフラーを巻きつけ、旗を押し付けた。

「あとペインティングもね！」
ディーンがやってきて、瞬く間にハリーの頬に金のライオンを描いた。彼は絵が得意だ。
「歌は覚えたかい？　ゴー・ゴー・グリフィンドール！」
ロンはソファーの上に立って拳を突き上げた。
「オーケー」
ハリーは笑った。ロンの陽気さを見ていると一時的にだが元気になれる。

＊

吐く息が白くなるような寒い日だったが、クィディッチ競技場は熱気に満ち溢れていた。
グリフィンドールの観客席は真紅に染まっている。
「ウワーオ」
ロンが驚いた。
人混みを抜けてグリフィンドールの応援席の最上階に行くと、そこから見える景色は圧巻だった。クィディッチ競技場を囲むように赤と緑が鮮やかに並んでいる。
「結局、グリフィンドールのシーカーは誰になったんだっけ？」
ネビルが寒さに手を擦りながら尋ねた。
「7年生のヘンリー・ピット。3、4年生の時にチェイサーをやってた人だってさ。それなりにシーカーとしての素質もあるらしいよ」
ロンは説明した。
「あ、マダム・フーチがいらっしゃったわ！」
審判のマダム・フーチの呼びかけで、両キャプテンが握手する。互いに相手の手をひねり潰しそうな力が込められている。
『さあいよいよ試合開始です！　解説はリー・ジョーダンでお送りします！　さてクアッフルはたちまちアンジェリーナ・ジョンソンの手に！　なんて素晴らしいチェイサーでしょう！　その上かなり魅力的です――アイタッ！　すみませんマクゴナガル先生』

リーはマクゴナガル先生に叩かれた。
『さあ、クアッフルはアンジェリーナからアシリアへ――おっとここでフェイントだ！　ケイティ選手、スリザリンの野郎どもを吹っ飛ばしてゴールへと猛突進！』
「うおおおおおおおおおおお！」
応援席は盛り上がる。ハリーも一生懸命旗を振った。

『が、しかし、おっそれは酷いぞ！　モンタギューの奴、何もしていないアシリアに向かって後ろからブラッジャーを当てやがった！　おい、反則だ！』
今度はスリザリンが盛り上がり、グリフィンドールはブーイングした。応援席が一体感に包まれる。
ちょっと野蛮だけど、クィディッチはやはり面白いとハリーは思った。
『さあ、アシリア選手が復帰して、ゲームは再開されました。あの胸糞悪い悪質なプレーのあと――』
『ジョーダン！』
『――あれは誰が見ても悪意に満ち溢れたラフプレーでした』
『誰かに解説の座を譲りたいのですか？』
『はいはい、すみません――モンタギュー選手の反則は誰にでも良くあるようなミスですね、きっと。さあ、そしてクアッフルを持ったのはアンジェリーナ！　ウィーズリー兄弟が盾となり、突き進んでいきます――おー！　ゴール!!　グリフィンドール、先取点を獲得しました！　みたかモンタギュー！』
「いえーーーーーい!!」
「うおーーーーーー!!」
グリフィンドールはみんなでハイタッチしたり雄叫びをあげて喜び合った。
ふとスリザリンの方を見ると、彼らは苦虫を噛み潰したような顔をしていた――こういう大規模なスポーツ大会で、どちらかのチームに所属する生徒が解説をするのは良くないのかもしれない。

それからグリフィンドールは続けて３得点した。最強のシーカーがいなくなったのでチェイサー達がいつも以上に頑張りをみせた。
しかしそこから徐々に下降し始めた。
健闘虚しく、グリフィンドールは１００対１７０で大敗した。
「このルール……シーカーへの負担が大きすぎるわ」
ハーマイオニーが呟いた。皆は無言で頷くだけだった。
シーカーはスニッチを取れば１５０点取って試合を終了させられるので非常に重要なポジションだ。ヘンリー・ピットはチェイサーとしての経験はあるがシーカーは初めてだった。
「まあでも頑張ったよ。スリザリンが一番の強敵なんだ。次は行けるはずさ、うん」
ロンが死にかけのドクシーのような声で励ました。
負けてしまったのは悔しいけど、いい試合を見れたとハリーは思った。

12話　みぞの鏡

魔法界にもクリスマスは存在している。つまりクリスマス休暇も存在する。大多数の生徒は家に帰るということで、ハリーも帰る気満々だった。

超優しくて素敵な愛しのダーズリー一家の皆さんに会いたかったし、長いこと子役の仕事から離れてきて、もう復帰したくて堪らなくなっていた。それに子役としてお仕事している間はシリウス・ブラックのことを忘れられる気がした。

だがしかし、その予定はすぐに崩れた。

ある日、ペチュニア叔母さんから手紙が届き、「たまには邪魔者抜きで家族だけのクリスマスを楽しみたい」と言われてしまったのだ！

5分ぐらい、ハリーはしょんぼりした。

でもきっとホグワーツでのクリスマスも楽しいに違いないとハリーはすぐに思い直した。

嬉しいことにロンたちウィーズリー兄弟は親の事情で残るのだ！

だからハリーはロンと遊ぶ気満々だった。

雪合戦やスケートで思う存分はっちゃけようと、すっかりその気になっていた。

「あ……エロールだ」

しかしクリスマス休暇の2日前の朝食の時間、ロンの元に老いたフクロウが飛んできた。羽に雪が積もって凍えている。

「このフクロウ、おじいさんなんだ。いつ死んでもおかしくないよ」

ロンはフクロウから雪を払いながら言った。

ロンの家はあまりお金がないので、新しいフクロウを買えないらしい。

「誰からの手紙？」

ハリーはソーセージをパンに挟みながら尋ねた。

「えっと……あれ、パパからだ。珍しいよ」

丸っこい字はロンに似ている。

ロンのパパはマグル好きで、コンセント集めが趣味だとハリーは聞

いていた。
ロンは丸まって冷たくなった手紙を広げた。魔法のインクで書いているから、字は滲んでいなかった。
手紙を読み進むにつれて、ロンの顔は険しくなった。
「……おいロン、もう読んだか？」
そこにフレッドとジョージがやってきた。二人もそれぞれの手に手紙を握りしめていた。深刻そうな顔だ。
「うん……知らなかったよ、そんなことがあったなんて！」
「弟よ、ことは昨日の夕方に起こったのだ。これでも最速で届けてくれたに違いない」
ジョージは険しい顔で手紙を読みながら言った。
「それより今日の１０時に特別にホグワーツ特急を動かしてくれるらしいからな。早く準備しないと。寝室に悪戯グッズが散らかってる」
「僕も急いで荷物をまとめるよ……ハリー、ごめん。僕たち、クリスマス休暇に残れなくなっちゃった」
「どうしたの？」
「……チャーリーが大怪我したんだ。ドラゴンが急に暴れ出して……押しつぶされたんだ。それで、魔法病院に運ばれたけど意識不明で……」
ロンは不安を口にしたくなくて、それ以上言わなかった。

昼食の時間、ハリーはマントを羽織って待っていた。ウィーズリー兄弟を見送るためだ。出発する前に、フレッドとジョージがハリーを呼び出した。
「ハリーごめんな、せっかくのクリスマスに一人にさせて」
「全然気にしないでよ。僕にはヘドウィグがいるから」
「お詫びと言ってはなんだが、ある物を渡したいんだ」
ジョージは白紙の羊皮紙を取り出した。ハリーは首を傾げた。
「これでマグゴナガル先生のレポートを書けばいいんですか？」
「ところがそれが違うんだ。見てろよ――」

「我、ここに誓う。我、よからぬことを企むものなり」
二人は杖を羊皮紙に当てて言った。すると羊皮紙の上に複雑なインクの線が浮かび上がってきた。
「これ、ホグワーツの地図だ！」
「その通り。しかも人の動きも分かるんだ」
フレッドは一階の小部屋を指差した。フレッド・ウィーズリー、ジョージ・ウィーズリー、ハリー・ポッターと書かれた点が集まっていた。
「裏道とかも書き込まれてて、非常に便利な品物だ。まあちょっと楽しんでくれよ」
「ありがとう」
ハリーはとても嬉しかった。

それからクリスマス休暇を待たずにウィーズリー兄弟は帰ってしまった。トランクを持って暗い表情でホグワーツ特急に乗る四人をハリーはただ見送ることしかできなかった。

ハリーは空き教室でハーマイオニーと話していた。とても寒かったが、ハーマイオニーが作ってくれた〝持ち運べる炎〟は暖をとるのに役に立った。
「……でも私、魔法界の癒者はとっても腕がいいって聞いたことがあるわ。スクイブの女の子がトラックに轢かれて体がめちゃくちゃになったんだけど、お癒者さんの力で治ったんですって」
「……トラックはマグルの機械だけど、ドラゴンは魔法動物なんだ」
「でも心配してててもどうにもならないわ――あれ、ハグリッドだわ。隣にいるのは誰かしら？」
ハーマイオニーは唐突に窓の外を指差した。カチカチに凍った湖の周りを歩く二つの人影があった。深い雪に覆われた地面に足跡が綺麗に残っている。
「そういえばニュート・スキャマンダーさんがホグワーツに来るって言ってたよ」

「まあ、あの教科書を書いた？　そういえばハリー、前に借りてた本は読み終わった？　あれもドラゴンの本だったわよね」
「うん、読んだ読んだ」
　ブラックから意識を切り離すために読んだだけなので内容は殆ど頭に入っていなかったが、しっかり最初から最後まで目だけは通した。
「それにしてもスキャマンダーさんがいらっしゃるなんてすごいことよ。彼、魔法生物飼育学会では有名な方なの。彼の功績は絶滅しかけていた世界中の魔法生物をたくさん保護したことよ。特にニフラーは相棒みたいな存在だったんですって。もちろん他にも魔法生物概論を執筆したり、色々な功績を残しているわ」
「きみ、その会に入ってるの？」
「いいえ。でも一般常識よ」
　ハーマイオニーの一般は、きっと知能指数が上位1パーセントぐらいの人を指しているのだろう。
「……チャーリー、無事だといいなあ」
　ハリーは呟いた。

＊

　ハーマイオニーが帰ってしまうと、ハリーは本格的に一人ぼっちになった。ハグリッドもあのドラゴンを育てにルーマニアに行ってしまった。
　ハリーは退屈を紛らわせるためにフクロウ通販で様々な魔法グッズを爆買いした。重い荷物を運んでくれたヘドウィグはぐったりしていて、少し申し訳ない気分になった。
　それから誰もいない談話室で荒ぶってみたり、コサックダンスしたり、スネイプ先生のモノマネをしたり、思いつく限りの暇つぶしをした。
「ふぅ……」
　ハリーはすっかり飽きて、黒い長マントを放り出した。談話室はい

つまで経っても談話室だ。
ロン達が残らなくなったのは仕方ないことだし責めちゃいけないとは分かっているけれど、やっぱり一人は寂しい。
その時、ハリーはあの地図の存在を思い出した。フレッドの真似をして杖を羊皮紙に当てて合言葉を言うと、さっきのように地図が現れ、てっぺんに文字が浮かび上がった。
『ムーニー、ワームテール　、パッドフット、プロングズ　われら「魔法いたずら仕掛け人」のご用達商人がお届けする自慢の品――忍びの地図――』
ムーニーとかいうのはあだ名に違いない。この四人はとても優秀で面白い人たちだったのだろうとハリーは微笑ましくなった。ハリーはまだ魔法界に来て日が浅いが、この地図を作るのがどれだけ高度で大変なことなのか予想はつく。
ハリーはしばらく地図上の動く点を見つめていた。校内には数人の生徒しかいなくて、あとはみんな先生方だ。ホグワーツの教授の既婚率は低いことをハリーは発見した。
暇で暇でやることがなくなったハリーは地図をポケットにいれて談話室を出ることにした。
廊下はすきま風で氷のように冷たかった。
ブラックも学生時代、この廊下を父さんと一緒にほっつき歩いたのだろうか。寒さはハリーをどんよりした気持ちにさせた。
「るんるんるん」
ハリーは気持ちを明るくするためにマグル界のクリスマスソングを口ずさんだ。
廊下に置かれた甲冑はサンタの帽子を被っていて、クリスマスを祝う準備万端だった。
どうせならお城を隅々まで見て回ろう！
ハリーはスキップした。
「ららら〜ららん♪　ハッピークリスマース♪……あ、スネイプ先生こんにちは」
スネイプは怪訝な目でルンルンとスキップしていたハリーを見た。

「我輩には理解しかねぬ世界が君の周りには広がっているようだ。もし我輩が君の寮監ならば直ちに聖マンゴの精神科に連れて行く所だが」
スネイプは皮肉じみて言った。
「……でもスキップをするのは楽しいです」
スネイプ先生も一緒にいかがですか、とまでは言わなかった。言ったら１００点ぐらい減点される予感がしたからだ。
スネイプは蔑むように舌打ちして過ぎ去っていった。
「あーあ……変なところ見られちゃった」
ハリーはとぼとぼ歩いた。
あてもなく歩いていると、ハリーは扉が半開きになっている教室を見つけた。暖炉で火がパチパチ燃えていて、暖かそうだ。ついさっきまで人が居たような感じがする。なんとなしにハリーは入ってみることにした。
部屋の真ん中に古い大きな金の鏡が置かれていた。ハリーは純粋な好奇心で鏡に近づいた。
上の方には文字が彫られている。
〝Ｅｒｉｓｅｄ　ｓｔｒａ　ｅｈｒｕ　ｏｙｔ　ｕｂｅ　ｃａｆ　ｒｕ　ｏｙｔ　ｏｎ　ｗｏｈｓｉ〟
ラテン語か何かだろうか。
ハリーは鏡の前に立った。
驚愕した現実のハリーとは反対に、鏡像のハリーはニコニコ微笑んでいた。その後ろにはハリーによく似た黒髪の男性と、赤毛で美しい緑色の瞳の女性がいた。ふたりはハリーの肩に手をまわして、優しく見つめている。
ハリーは後ろを振り返った――しかし誰もいない。
「パパ……？」
男性が小さく頷いた。
「ママ……？」
女性がにっこり笑った。ハリーにそっくりなアーモンド形の瞳だった。

ふたりの後ろにはたくさんの人がいた。きっとハリーの祖先たちだ。みんな楽しそうに笑っている。
ハリーは鏡に手を付けた。このまま中に入り込みたかった。

翌日もハリーはその教室を訪れた。探すのに1時間近くかかってしまった。暖炉の火は消えていて、とても寒かった。
鏡を覗き込むと、昨日と同じように父さんと母さんが微笑みかけてくれた。
そこに、背の低い丸顔の青年が現れて、父さんの肩をおずおずと突いた。父さんはウインクして彼の背中を叩いた。
「ピーター……」
新聞で読んだ。父さんの親友だ。ブラックに殺された人だ。
そこに鳶色の髪の大人っぽくて、くたびれた感じの青年がやってきた。そして枠の外に向かって人を呼ぶ仕草をする――しばらくして、長身でとてもハンサムな青年が優雅に歩いてきた。
父さんは今までで一番の笑顔でその青年を迎えた。そして楽しそうにハリーに向かって手を振った。鏡のハリーもふたりと一緒に手を振っている。
ハリーはセーターの袖で涙を拭った。幸せなのに悲しくて虚しくて憎かった。
「またここに来たのかね?」
ハリーは驚いて部屋の隅を見た。いつのまにかダンブルドア先生が立っていた。
「君だけではない。今までに何人もの人がこの『みぞの鏡』のとりこになった……。この鏡が何を見せてくれるのか、もう分かっているじゃろう」
「欲しいものを……その人が強く願っているものを見せてくれるのですか?」
「ほとんど正解じゃ。この鏡は人の奥深くにある一番深いのぞみを写す。それだけじゃ」

「なんでこんな鏡があるのですか？」
「きっとこれを作った人は遊び心で作ったのじゃろう。それが無邪気なものか悪意に満ちたものかは分からないがね」
　ダンブルドアは悪戯っぽく言った。
「昔からホグワーツの先生方は旅先で興味深い品を見つけては学校に持ち帰ってくる。これもきっとその類のものじゃろう……別の部屋で分厚い埃を被っていたのをわしが発見して、整理のためにこの部屋に置いておいたのじゃ」
「先生、絶対に叶わないことを望むのは悪いことですか……？」
　ハリーは聞いた。
「いいや、人ならば誰でもそういう経験をする。しかし、あまりにもその望みに取り憑かれて生きることを忘れてしまうのは良くないじゃろう」
　ハリーは無言で考え込んだ。
「君のご両親について、あんな方法で真実を知らせてしまったことは申し訳なかった。誰かの口から教えてほしかったことじゃろう」
「いいえ、いいんです。僕が勝手に調べて知ってしまっただけだから……。先生、でもなぜブラックは僕の両親を裏切ったのですか？」
　ハリーは聞いた。どうしても理由を知りたかった。ダンブルドアは遠い目をした。
「それはわしにも分からぬ。君のお父様とシリウス・ブラックは兄弟のように仲が良かった。しかし何か恐ろしいものがブラックを狂わせたのじゃろう」
「……あのせいで両親とピーター・ペティグリューは死んだし、ブラック自身もアズカバン行きになって……結局誰も幸せになってないんです。もちろんブラックだけが人生をエンジョイしてるのは絶対に許せません。でも、でも……」
　鏡に写った青年たちはとても幸せそうだった。あの幸福を壊してまでブラックは裏切りを選び――親友と共に自らの破滅を招いた。
「きみの気持ちはよく分かる。時として人は最悪のものを選びたがることがあるようじゃ……。きみのお父様とお母様が亡くなったのは

ほんとうに悲しかった。わしが気づいておればよかったと今でも考える……」
　ダンブルドアは一筋涙を流した。
「父と母をご存知なんですか？」
「きみのご両親は人生を賭けてヴォルデモート卿を倒すことに全力を尽くしてくれた。わしもその一人だった。覚えておいてほしい。きみの両親は親友の裏切りによって死んだが、そもそもヴォルデモート卿に狙われるようになったのは、彼にとって脅威だと思われるほど偉大な存在じゃったからじゃ。もちろん一歳のきみを残して死んでしまうのは無念じゃったろうが、それ以外の悔いは無かったと思っておる。きみのお父様は親友が裏切ったからといってそれを恨むような人物では無かった……むしろ庇うのではないかと思うほど、友情に熱かった」
　父さんならそうするに違いない。鏡の中の父さんとブラックは無二の親友だった。父さんならブラックのことを許しただろう。
　だからこそハリーの中でブラックに対する憎しみがより深くから湧いてきた。
「先生、アズカバンに行くことはできませんか。ブラックの今の姿を見ておきたいんです」
　ハリーは言った。ダンブルドアは驚いてハリーを見た。
「それはきみにとって辛いことになるじゃろう」
「でも、知りたいんです。そして聞きたいんです。ブラックの気持ちを」
「きみは勇敢な子じゃ……わかった、魔法省に申請してみよう」
　ダンブルドアは感涙した。
「ありがとうございます」
　ハリーは言った。
「先生、僕の父さんはブラックとピーターと、あともう一人仲のいい人がいませんでしたか？」
「ああ、リーマス・ルーピンじゃ。最後の年にわしが監督生に任命した生徒じゃ」

「彼はまだ生きてますか？」
「長いこと連絡を取っていないが、きっと生きておるじゃろう」
「彼に会うことはできますか？」
「会って何をしたいのじゃ？」
「父と母について聞きたいんです。多分、よく知っている人だから……」
「ふむ。しかしもう長いことやり取りをしていなくての。もしかすると会えないかもしれん」
　というよりも、彼がハリーと会ってジェームズについて話すことを了承してくれるかが問題だとダンブルドアは思っていた。
　ハリーは申し訳なさそうにした。
「ごめんなさい、無理言ってしまって。校長先生だからお忙しいはずなのに」
「心配するでない、ハリー。自分で言うのも何だがわしは大魔法使いじゃ。それに、きみに費やす時間は何だか楽しく感じるのじゃ」
　ダンブルドアはちょっと首を傾けて悪戯っぽく眉を動かした。
「では、そろそろ寝室に帰る時間じゃ」
「はい。おやすみなさい」
　ハリーはにっこり笑って部屋を出た。

　ダンブルドアは一人部屋に残り、鏡の枠に書かれた文字を逆から読んだ。
　〝I show not your face but your heart’s desire〟
　――わたしはあなたの顔ではなく心ののぞみを写す。
　のぞみ、か。
　クリスマス休暇が終わったらこの鏡はすぐに元の場所に戻そう。
　ダンブルドアは鏡を一瞥して、部屋を後にした。

13話　アズカバンのクリスマス

アズカバンは北海に存在する魔法使いの監獄である。
歴史は古く、15世紀になる頃から島の砦としてアズカバンは存在している。初めは監獄ではなく闇の魔法使いエクリズディスの住処であった。
孤島で一人きりだった狂人エクリズディスはマグルの船乗りたちをおびき寄せては己の快楽の為に拷問して殺していたという。
この島の全貌が明らかになったのは、彼が死んで隠蔽の呪文が解除された後のことだ。
魔法省から派遣された調査団はあまりのおぞましさに言葉を失った。
島には吸魂鬼が溢れていたが、それは彼らが目撃したものの中で一番恐ろしくないものだった。
しばらくアズカバンは放置された。
しかし1718年に魔法大臣に就任したダモクレス・ロウルが吸魂鬼を使えば『時間、トラブル、コスト』の削減に繋がると考えたことから、アズカバンを監獄として使う計画が推し進められ、実現された。
エルドリッチ・ディゴリーを初めとする何人かの魔法大臣はアズカバンの廃止を求めたが、〝脱獄者ゼロ〟という完璧な実績によりアズカバンの非人道性は無視された。
こうして最悪の監獄アズカバンは現在にまで残り、運用されているのである。
アズカバンにはクリスマスもイースターもない。
吸魂鬼がイースターのエッグをマントの中に隠したりサンタの赤い帽子を被ったりしてくれたら、ここでの生活はもう少し楽しくなるかもしれないが、そんなアズカバンはもはやアズカバンと言えないだろう。
ここではただ春には少しばかり寒さが和らぎ、冬には凍えるような寒さが孤島を支配するだけだ。建物の壁という壁には不幸と苦痛が染み付いていて、夜には狂った囚人たちの叫び声が聞こえてくる。

叫び声も慣れれば鳥のさえずりのように感じられるものだ。
アズカバンの最上階に閉じ込められたシリウス・ブラックはそんなことを考えていた。
ここでは時間の感覚も定かではなくなる。しかし無為な長い月日が流れたことだけは確信できる。
初めはまともだった人が段々と狂い、絶望の内に死にゆく姿を何度も見た。きっといずれは自分もそうなるのだろう。
結局のところ、彼が死んでしまった以上、何をしようと、全て手遅れなのだ。

＊

「らーららーらー♪　こーのよーるー♪」
ハリーは寝室で朝日を眺めながらクリスマスソングを歌っていた。子役にとって可愛らしく歌を歌うのは朝飯前だ。
明日はいよいよクリスマス。ハリーはクリスマスのご馳走が楽しみだった。
それだけではない。ロンから、チャーリーが助かったとの報せが届いたのだ。だからハリーは上機嫌だった。
それからハリーは庭に出て、ひとりで雪だるま作りをした。
「やあハリー！　ぼくスノーマン！」
「ハロースノーマン！　寒くないの？」
「ぼくのからだはゆきでできてるんだ。だからさむくないんだよ！」
「へー！　そりゃすごいや！」
ハリーはしばらく一人二役雪だるまごっこをしていたが、アホらしくなってやめた。
そんな日の午後、ハリーの元に手紙が送られてきた。ダンブルドア先生からだった。夜の7時に校長室に来て欲しいという言葉とともに校長室の合言葉が書かれていた。

五分前にハリーは校長室の前に着き、そして時間ぴったりにドアをノックした。ダンブルドアはすぐに開けてくれた。
「よく来てくれた、ハリー」

校長室は巨大な望遠鏡のような物や、銀細工の模型で溢れていた。壁には歴代の校長の肖像画も掛けられている。
「突然じゃが、明日の午後3時からシリウス・ブラックとの面談が許可された」
ハリーが席に着いたところで、ダンブルドアが出し抜けに言った。
「……ありがとうございます」
「しかし話すことはできん」
「どういうことですか？」
「鉄格子越しに対面するだけということじゃ。何度も説得を試みたのじゃが、ファッジ大臣は予想以上に頑固での」
「……いえ、わざわざありがとうございます。こんなに早くして下さって」
「うむ。明日の昼はクリスマスパーティーじゃから、それが終わったら再び校長室に来て欲しい。いいかね？」
「はい」
「それと、きみに渡したいものがある……」
ダンブルドアは引き出しを開けて、銀色の布を取り出した。
「これは透明マントという品じゃ。きみのお父様が亡くなる前にわしに預けてくれたのじゃが、ついに返せなくなってしもうた。しかし息子であるきみに返す時が来たようじゃ」
「これ、父さんの持ち物だったのですか？」
「そうじゃ」
ハリーはマントを受け取った。水のようにサラサラしている。羽織ってみると体が完全に透明になった。
「うわぁ……すごいです！　ありがとうございます、ダンブルドア先生！」
ハリーは感動した。ダンブルドアは嬉しそうに頷いた。
＊
一方その頃、ロンはルーマニアの魔法病院にいた。天井付近にしゃぼん玉のような見た目の灯りがたくさん浮かんでいて、リラックスできる空間が広がっている。

ベッドで寝ているのは兄のチャーリーだ。
「寒くない？　お腹は空いてる？　喉は乾いてないかしら？　痛いところはある？」
母のモリーはチャーリーの額を撫でながら尋ねる。
「3分ごとに聞かなくても大丈夫だよ、ママ」
包帯でぐるぐる巻きのチャーリーは笑顔で言った。
チャーリーは去年ホグワーツを卒業し、ルーマニアに渡ってドラゴンを研究していた。
しかし先日、特殊な檻の中に入ってドラゴンの営巣地を観察していた時に、予兆なく檻が壊れてしまい、そこにたまたま帰ってきたドラゴンに踏まれ、炎を浴びせられたのだ。
色々な不運によって起こった事故のせいで、チャーリーは一時生死をさまよった。
「怪我が治るまでずっとこの病院にいるの？」
ロンは聞いた。
「うーん迷ってるんだ。ひとまず今はまだ傷が全然塞がってなくて歩くこともできないからこの病院にいるつもりだよ。それにドラゴンの治療はルーマニアの方が進んでるからね」
「でもあたし心配だわ。ポートキーで聖マンゴに行けないの？」
末っ子のジニーがチャーリーのベッドの端に腰かけた。
「ポートキーはぐるんぐるん振り回されるから危険なんだ。小型船を出してもらって魔法で海を渡ることはできるけど、手続きが大変な上にコストが高いんだ」
チャーリーは首だけ動かしてジニーの方を見た。
「それより、ドラゴンキーパーがこんな危ない仕事だなんて聞いてなかったぞ」
フレッドが怒った。フレッドは奔放な兄のチャーリーが大好きだった。
「そりゃ野生の魔法生物を相手にするから、多少の危険はあるよ」
チャーリーはあっけらかんに笑い、イタッと悲鳴をあげた。骨に響くらしい。

「多少ですって!? こんな大怪我するなんて、き、聞いてないわ！」
モリーはわっとチャーリーの腕に抱きついた。
「ごめんねママ、心配かけて」
「もう、お願いだから危険なことはしないでちょうだい。わたしの心臓が持たないわ。あなたが危険な状態だと知って、どんなに心配したことか……」
「退院したらどうするつもり？」
長髪ポニーテールのイケてる長男ビルが聞いた。
「んー、そうだな。もちろんドラゴンキーパーの仕事に戻るよ」
「え!?!?」
「これぐらいの怪我なんてことないさ。むしろ、ドラゴンの炎を浴びて、ますますドラゴンのことが好きになった気がするよ！ あの全てを焼くような熱い炎、やっぱドラゴンは最高だ！」
この日、ルーマニアの病院の一室に悲鳴が響いた。

＊

クリスマスの朝、目を覚ましたハリーは驚いた。足元に沢山のプレゼントが置かれていた。クリスマスプレゼントだ！
「やったーやったー！」
ハリーは片っ端からプレゼントを開けた。ロンからはルーマニアの魔法のポット（足が生えていて歩ける）、ハーマイオニーからは大きなカエルチョコレート、そしてダーズリー一家からは子役ハリー宛のプレゼントの一部がそのまま送られてきた。
その日のクリスマスパーティーは最高だった。大広間には飾り付けられた巨大なもみの木があって、滅多に見ないご馳走がテーブルに並んでいた。
クラッカーには魔法グッズが入っていて、ハリーはとんがり帽子と魔法のチェス、破裂しない光る風船、〝簡単！イボつくりキット〟をゲットした。
ハッフルパフの少年としばらく談笑してから、ハリーは戦利品を置きに寝室に戻った。

午後三時少し前、ハリーはホグワーツの制服を着て、マントを羽織って談話室を出た。私服で行くことも考えたが、もしかしたら魔法省の偉い人に会うかもしれないし、しっかりした格好の方がいいかなと考えたのだ。

校長室ではダンブルドア先生が待っていた。灰色の長いローブを着ている。

「アズカバンには吸魂鬼という魔法生物がいて、人間の最悪の記憶を呼び起こさせてくる。何体もの守護霊が君を守ってくれるが、もしものためにチョコレートを持って行った方がいいじゃろう」

ダンブルドアは金色の包み紙のチョコを渡した。

「はい」

ハリーはそれをローブのポケットに入れた。

「これからの予定じゃが、まず始めに魔法省の法執行部に向かう。アズカバンを管理している省じゃ。そこでアズカバンに行った際の注意事項などをお話しして頂けるじゃろう。それから、魔法がかけられた船に乗ってアズカバンに向かう。恐らく３０分ほどで着くとのことじゃ」

「船で行くんですか？」

「脱走防止の為に姿くらましや移動キーなどの瞬間移動系の魔法が全て使えないようになっておるのじゃ――さて、そろそろ行こうか、ハリー」

「はい」

ダンブルドアは暖炉に近づき、嗅ぎタバコ入れのような銀色の箱を手に持った。

「これはブルーパウダーというものじゃ。暖炉の火にこの粉を振りかけて、炎の中に入って行き先を行くとそこの暖炉に瞬時に移動できる。灰を吸い込まないように暖炉の外でしっかりと息を吸ってから、滑舌よく行き場――『魔法省！』と言うのがコツじゃ」

「はい、わかりました」

ダンブルドアはハリーに箱を差し出した。ハリーは粉をひとつまみ取って、暖炉に入れた。ボッと火が燃えて、緑色の炎になった。

「熱くないですか？」
「暖かくて心地よい炎じゃ」
ハリーは息を大きく吸ってから恐る恐る炎に足を踏み入れた。
暖かい炎が全身をくすぐった。
「魔法省！」
ハリーは子役のレッスンで鍛えた完璧な滑舌で発音した。
まるでブラックホールに吸い込まれて行くような感覚だった。高速で回転していて、耳が聞こえなくなりそうな轟音が鳴り響く。
水の中にいるような感じがしたかと思えば、冷たい風が頬を打つ感覚に変わった。
その感覚は不意に終わった。
ハリーが目を開けると、豪華なホールが広がっていた。ここが魔法省なのだろうか。
ハリーはとりあえず暖炉から出た。
ピーコックブルーの天井には金色に輝く記号が並んでいて、それらは絶え間なく動き変化していた。
両側の壁は黒い木で覆われていて、ピカピカに磨き上げられている。
そしてホールの中央には大きく荘厳な噴水があって、その真ん中に黄金の立像が並んでいた。魔法使いの像を囲むように魔女、ケンタウルス、ゴブリン、気持ち悪い小人の妖精の像が立っていて、魔法使いと魔女を崇めるように見上げている。
「その像が気になったのかね？」
いつのまにかダンブルドアが隣に立っていた。
「あの像はなんですか？」
「あれは屋敷しもべ妖精じゃ。魔法使いの家に仕えて、身の回りの家事をしてくれる魔法生物じゃな。ホグワーツの料理を作っているのも彼らじゃ」
「そうだったんですか。知らなかったです」
それからハリーとダンブルドアは二階の魔法法執行部の闇払い本部に向かった。

闇払い本部に行くと、すぐに背の高い黒人の魔法使いがやってきた。
「ああ、待っておりました。ダンブルドア先生に、ポッターさん」
ハリーはその人と握手した。大きな温かい手だった。
「わたしが今回闇払いとして護衛させてもらうことになったキングズリー・シャックルボルトです。これ以外にも警察部隊から何人か護衛を出して万全の守りをしますので、安心してください」
「ありがとうございます、僕のためにそこまでしてくださるなんて」
「生き残った男の子がアズカバンで事故に遭ったら大変ですからね。それにしてもあなたは勇敢な少年です、本当に……」
それから魔法大臣まで現れ、ハリーに賞賛の言葉をかけてくれた。そういえば自分は魔法界でも有名だったのだとハリーは思い出した。

ハリーはボートに乗って冷たい海を北上していた。ボートは凄まじいスピードで水の上を滑るように走っていたが、風はキングズリーの魔法で遮られていて感じなかった。
ハリーは前にキングズリー、後ろにダンブルドアとがっちりガードされている。
北に行くにつれて寒さが増し、ハリーはマントをきつく握りしめた。
「あれは……」
巨大な灰色の監獄が海上にそびえ立っていた。その周りには黒い頭巾を被った不気味な吸魂鬼が無数に漂っていた。
「大丈夫じゃ、守護霊がいるから攻撃してくることはない」
ダンブルドアが優しく囁いた。
ハリーは衝撃を受けた。あの光景は絶望と凋落そのものだった。あんな所で生きていられる気がしない。
あの監獄に収監されている人がいるということをハリーは信じられなかった。
監獄に近づくにつれて恐怖は増した。ダンブルドアはそっとハリーの肩に手を当ててくれた。

ボートを岸につけ、アズカバンに到達した所で、一人の吸魂鬼がこちらに向かって滑るように向かってきた。
ハリーはダンブルドアにくっついた。
「我々はシリウス・ブラックと面会に来た。希望者はハリー・ポッター。責任者は闇払いのキングズリー・シャックルボルトだ」
キングズリーが堂々と言って、ローブから金色の紋章のようなものを見せると、吸魂鬼はスルスル下がっていった。
「あの紋章にはユニコーンの魂が込められていましてね。随分昔に作られたものだろうとされているけど、まったく劣化する気配がない」
キングズリーは説明する。
「よし、わたしが初めに行って面会者が来ることを伝えてきますね」
キングズリーはヤマネコの守護霊を引き連れて囚人たちが収監されているゾーンへと歩いていった。
しばらくしてキングズリーが戻ってきた。
「さて、準備はできました。ポッターさん、もうダンブルドア先生からお聞きになったかもしれませんが、今回の面会は少々特殊です。ブラックの声はポッターさんには聞こえません。ただポッターさんの声はブラックに聞こえます。面会は鉄格子を挟んで対面する形で行われます。よろしいですか?」
「ブラックは僕が面会に来ていることを知っているのですか?」
「いえ、まだ誰が来ているのかは言っていませんよ」
「僕が姿を見せれば分かるものですか……僕がどんな立場なのか」
つまりジェームズとリリーの息子だと分かるのかということだ。
「ええ、分かると思いますよ……あなたはお父様によく似ていますから」
キングズリーが答えた。
沢山の守護霊に囲まれて、ハリーは歩いていた。左右の監獄にいる囚人たちは生気なくげっそりしている者が多くて、時折守護霊に気づいて亡者のように手を伸ばしてきた。
階が高くなるにつれてより罪の重い人たちになるらしい。独房が立ち並ぶ階になった所で、不意にダンブルドアが立ち止まった。

ダンブルドアが見ていたのは一番手前の監獄だった。金髪の５０代ぐらいの男性が薄い毛布の上で横たわっていて、目は虚ろだった。
「……彼は『例のあの人』が失脚した時に捕まった死喰い人の一人ですね。スナイドです……どうなされました？」
キングズリーが心配そうに聞いた。
「ああ、すまなかった。アズカバンに来たのは久々だから少し昔のことを思い出したのじゃ」
ハリー達は再び歩き出した。
ブラックの独房は最上階の一番守りが強固な場所にあった。
「手前から４つ目がブラックの監獄です」
キングズリーが説明した。
そこは今までより一段と寒くて冷え冷えとしていた。凶悪な顔の囚人たちの視線がハリーに集まっていた。ハリーは一歩一歩監獄に近づいた。
ハリーは死に際の両親の思いを考えた。
ブラックさえいなければ両親はもっと生きてられたのだ。親の仇に対する怒りと憎しみが湧き出て、心臓が強く鼓動を打った。
自分と両親の運命を大きく狂わせる元凶となった人と再会するのは、とても勇気がいることだった。
ハリーは独房の前まで来て、顔を上げた。
ブラックは監獄の壁にもたれかかっていた。痩せ細った身体をしていて、目は落ち窪み、頬はげっそりやつれていた。髪も髭もボサボサで、往時の美貌は見る影もない。
「……ジェームズ…？」
監獄の外の少年の姿を目に捉え、ブラックは掠れた声で呟き、汚れた服の袖で目をこすった。
見慣れたくしゃくしゃの黒髪に丸眼鏡、独房の外には１０年間ずっと会いたいと望んできた人物がいた。それは奇跡に思えた。
ブラックは信じられない思いで鉄格子の近くまで這いずり寄った。
――しかし少年は慄いて独房から一歩離れた。彼の瞳は綺麗な緑

色だった。
「……ああ、ハリー、か。まだあの頃は赤ん坊だったのに、こんなに大きくなったのか……」
ブラックはほんの少しの失望を感じながらも、感慨深く愛おしそうにハリーを見た。

ハリーは立ちすくんだ。ブラックは口を動かして何か言っていた。
ハリーからは聞こえなかったけれど、それは罵っているようには見えなかったし、謝罪しているようでもなかった。ただ何かをぶつぶつ呟いていた。
彼が両親の仇だとは信じられなかった。ブラックはやつれ果てた姿で、どこか懐かしそうに、死んだ親友の写真を眺めるようにハリーを見つめていた。
この独房の中でブラックは孤独に死を迎える。
これが、自分の両親を裏切った男の末路だ。１０年間の監獄生活はブラックから全てを奪い取った。
帰りのボートでハリーは一言も発さなかった。

１４話　ムーニーとワームテール

アズカバンから帰ってきたダンブルドアは、レモンキャンディーを口の中で噛んでいた。
普段、飴を噛むことはダンブルドアの美学として絶対にやらないようにしているので、これはかなり珍しいことだった。
アズカバンのセキュリティーは厳重で、普通の人ならばそうやすやすと面会に行ける場所ではない。
アズカバン行きの船が出るのは魔法省と特別なコネを持った人が面会の権利を勝ち取った時か、囚人が死んで家族が遺体を引き取りに行く時だけだ。
一世紀近く経った今でも、あの光景は脳裏に焼き付いている。
独房棟の一番手前の部屋で白い布を被せられて父親は死んでいた。
ホグワーツの2年生の夏休みのことだった。
あの日、父親の遺骸を抱え、母と共にアズカバンから離れて行く時の肌を焼き尽くすような太陽の明るさと、母の一筋の涙は子供心に強く残った。母は血が出るほど強く唇を噛んでいた。
ダンブルドアはレモンキャンディーの中の柔らかい部分を歯から剥がして口の中で転がした。
次に探すのはリーマス・ルーピン……彼を入学させることにした時、他の先生方は強く反対した。
それは彼が狼人間だったからだ。
しかし入学してみれば、彼は非常に謙虚で礼儀正しくて面白い優秀な生徒だった。
だから最後の年にダンブルドアは彼を監督生に任命した。
しかし彼を保護できたのはホグワーツを卒業するまでだ。魔法界での狼人間の扱いは酷く、職を得ることすらまともにできない。
だからきっと細々とした仕事でどうにか食いつないでいる状況だろう。ダンブルドアはそう目星を付けて、探し出した。
１週間ほどでリーマスの居場所は判明した。

リヴァプールの小さな魔法工場で、『隠れん防止機』に装飾のシールを貼る仕事をしているらしい。彼の能力よりはるかに劣る単純な仕事だ。

年明け、ダンブルドアはリーマスの家付近に姿くらましした。汚い路地に建つ朽ちかけた廃墟のような家の二階にリーマスは住んでいた。

ドアをノックすると、しばらくしてリーマスが出てきた。貧相なボロボロのローブを着ていたが、瞳はダンブルドアに会えた驚きと喜びで輝いていた。

「ダンブルドア先生！　どうなさったのですか？」

リーマスはずっと一人ぼっちで暮らしてきたので、ダンブルドアと話せるのが嬉しかった。

「たまたまこの辺に用事があっての。そこで君がここらに住んでいると聞いたから、来てみたのじゃ。どうかね、最近の暮らしは？」

「そりゃもうご覧の通り夜な夜なパーティー開いてガリオン風呂に浸かって豪遊していますよ。夢の中で」

リーマスは古びたローブをつまんで朗らかに笑った。

「フォッフォッフォ。夢の中の世界は素晴らしい。わしは一度、信号機になる夢を見たことがある。何色だったのか忘れてしまったのは痛恨のミスじゃった……。ところでリーマス。今年の秋からハリーが入学してきたのじゃ」

リーマスは驚いた表情をした。

「あのジェームズの息子の？」

「そう、ハリー・ポッターじゃ。笑ってしまうほどジェームズにそっくりの見た目じゃが、彼ならば絶対取らなかったようなタイプの奇抜な行動をとることがあって楽しい子じゃ」

奇抜な行動というのは主に突然コサックダンスを踊りだしたり、一人で雪だるまと会話してたりすることだ。

「もうそんなに時が経ったんですか……」

リーマスは懐かしそうに目を細めた。学生時代はリーマスにとって一番輝かしい日々だった。

狼人間であるがために幼少期からずっと孤独な生活だったリーマスにとって、親友と過ごしたあの日々はかけがえのない思い出だった。
「ハリーはわしが想像するよりずっと好奇心旺盛な子供じゃった。そして前のクリスマスにわしは彼とともにアズカバンに行ったのじゃ」
「……どういうことですか？」
「ハリーは彼のご両親の死の経緯を新聞で読んでしまったのじゃ……本当に酷な経験をさせてしもうた」
リーマスは瞬きした。しばらくしてリーマスは口を開いた。
「それで、奴に会いに行ったのですか？」
「うむ。シリウス・ブラックはハリーを――言うならば、もう会えないと思っていた大親友に何十年ぶりかに再会したかのような瞳で見ておった。わしは驚いた」
リーマスは表情を変えず、無意識でローブのほつれた部分を指で弄っていた。
ダンブルドアは次の言葉を切り出した。
「ハリーはジェームズとリリーについて知りたがっている。そして君に会いたいと望んでいるのじゃが……どうかね？」
「そんなことできません！」
リーマスは強く否定した。
「……私にそんな権利は、ない……！」
リーマスは、ブラックの裏切りに気が付けずにジェームズとリリーを死なせてしまったことを今でも深く後悔していた。
「何より、ハリー・ポッターをブラックに会わせるなんて……なぜ許したのですか？」
リーマスは責めるように言った。
「彼はとても賢明な子じゃ。そして勇敢じゃ。わしも迷いに迷ったが、現実を見て受け入れる力が彼にあると判断して面会させることにしたのじゃ」
リーマスは自分を責められている気がした。
自分はブラックに会うなんてまだ到底できない。それほど心の整

理が付いていない。
「それで、ハリーは大丈夫なのですか？　傷ついていないのですか？」
「彼は笑顔で振舞っておるが、内心は深く傷ついていることじゃろう……君と会って話せたら嬉しいはずじゃ」
「より失望させるだけです、ダンブルドア先生」
リーマスは断固としてハリーに会うことを拒否した。
「お願いです、どうかダンブルドア先生がハリーを慰めてやってください」
リーマスは強くお願いした。

＊

クリスマス休暇最終日、ハリーは透明マントを被って地図を片手に城内を散策していた。別に今は真っ昼間で立ち入り禁止区域を歩いているわけではないので透明マントを被る必要はないのだが、スパイ気分を味わうために被っている。
今日の午後には家に帰っていたみんなが帰ってくる。
ダーズリー家の皆さんは楽しいクリスマスを過ごせただろうか。そうだったら良いな、とハリーは思った。
向こう側から薬草学のスプラウト先生がやってきた。楽しそうにセレスティナ・ワーベックの歌を鼻歌で歌っている。手に持っているのはハートの形の木だ。誰かにプレゼントするのかな、とハリーは考えた。
次にすれ違ったのは魔法生物飼育学のケトルバーン先生だ。右手には何かの台本を握りしめている。ハリーは気になったが、左手に掴んでいる火花を撒き散らすカニが怖かったので話しかけないことにした。
アズカバンに行ってから、ハリーはなるべくブラックと両親のことを考えないようにしていた。
色々考えたところで結局どうしようもないのだ。自分が怒り、復讐することで両親が生き返るなら話は別だけれど、そんなことは起こり

得ない。
でも、夜の寝る前だけはどうしても悶々と悩んでしまう。
はやくロンやハーマイオニーが帰ってきてほしいとハリーは思っていた。二人と話して気を紛らわせたかった。
午後、ようやく待ち望んだ時がやってきた。ホグワーツ特急が沢山の生徒を乗せてホグワーツに帰ってきたのだ。
数週間離れていただけなのにロンの燃えるような赤毛が懐かしく思えた。
「ロン、お兄さんの様子はどうだった？」
ハリーは寝室でロンの荷物を一緒に整理してあげながら尋ねた。
ネズミのスキャバースは長旅で疲れたのかすやすやとベッドの隅で眠っていた。
「よかったよ。たしかに包帯でグルグル巻きにされててミイラみたいだったけど、でもチャーリーはやっぱチャーリーだった」
「ふうん、よかったー」
荷物の整理をひと段落したところで、ハリーは忍びの地図を取り出した。
「なんだいそれ？」
「君のお兄さんから借りたんだ。ホグワーツの地図だよ」
「おったまげー！　なんで弟の僕には言ってくれなかったんだよ！」
ハリーは例の合言葉を唱えながら地図を杖で叩いた。
羊皮紙の上にホグワーツ城内の地図が現れた。
「ウワー、これ、人の場所まで分かるよ！」
「すごいでしょ？」
ハリーはグリフィンドールの寝室に目を移した。
ハリー・ポッター、ロン・ウィーズリーと書かれた点と重なるように――ピーター・ペティグリューと書かれた点がある。
ハリーはおったまげた。
「ねえ、ロン……」
「なんだい？」
ハリーは一息飲んでから尋ねた。

「君……もしかしてペティグリューの家の生まれだったりする？」
「……はあ？」
ロンは口をあんぐり開けて、大丈夫かというようにハリーを見た。
しかしハリーは追及の手を緩めなかった。
「単刀直入に聞くよ。君は本当にウィーズリー家の子供なの？」
ハリーは低い声で尋ねた。
「僕はそう思って１２年間過ごして来たぜ。だって僕、赤毛だし、頬はそばかすだらけだし、ママが僕を生むところをたーくさんの人が見てるし、性格だってちょっびりママに似てるって大叔母さんに言われたことあるし、それに……うん、多分、パパとママのの子だと思うけど……」
ハリーの瞳があまりに真剣だったので、ロンは心配になってきた。
「ロン、一度この部屋から出て行ってくれない？」
「ほんとにウィーズリー家の子なのか疑われたと思ったら、今度は部屋を出なきゃいけないのかい？」
「お願い。君の出生の秘密が関わってるんだ！」
「まあ、別にいいけど……」
ロンは不満げに寝室を出た。
ハリーは再び忍びの地図に目を落とした――ピーター・ペティグリューはいる。
ハリーはピーターの点に近づいた。そこはロンのベッドの枕元だった。
誰もいる様子はない――ただネズミが丸まって眠っているだけだ。
ハリーは地図を置き、ネズミを抱え上げてネビルのベッドに移した。
それから再び地図を見ると――点はネビルのベッドに移っていた。

15話　さよならスキャバース

ハリーは愕然とした。
まさかピーター・ペティグリューがネズミになって生きていたとは……。
でも、待てよ。生きていたならなぜネズミになって隠れる必要があったんだ？
ハリーは考えた。
浮かんできたのはアズカバンにいるブラックの瞳だった。
あの懐かしそうな瞳は、裏切って殺した親友の息子に向けるものではない。
もしや、とんでもない真実が隠されているのではないか……！
「おーいハリー？　僕はいつになったら戻っていいんだい？」
その時、外からロンの声が聞こえてきた。
ハリーは慌ててドアを開けた。
「ごめんロン。君の血統は証明された。君は確実にウィーズリー家の子供だよ」
ハリーはロンの手を握りしめた。ロンは訳がわからないという顔をしていた。
「というか、いつのまに僕はあんなチンケな奥様向け魔法ラジオみたいな展開に巻き込まれたんだい？」
ハリーは聞いていなかった。
「ロン、僕ちょっと図書館に行ってくる！」
「え？　まだ学校は始まってないっていうのにどうしたんだい？　おーい！」
ロンはネズミのスキャバースと2人きりで寝室に取り残された。

＊

ハリーは図書館に走った。
学校に来て早々、なぜかハーマイオニーも図書館に来ていた。

「ハーマイオニー！　何してるの？」
「闇の魔術に対する防衛術の予習よ。私、スキーに行った雪山でスノーマンを見た気がするの。だからクィレル先生にレポートを書いて提出しようと思ってるのよ」
「ねえ、確かマクゴナガル先生が初回の授業で猫になってたよね？」
「ええ、先生は動物もどきなのよ」
「動物もどき？」
「そうよ。変身術の集大成と言われてる魔法で、とてつもない忍耐と技術が必要なの。動物もどきになると理性を保ったまま動物になれるから、魔女狩りが横行していた時代には隠れるためと――あとちょっぴりマグルをからかうために、沢山の人が動物もどきになろうとしたらしいわ」
「動物もどきのままずーっと過ごすのって可能なのかな？」
「論理的には可能だと思うわ。そんな生活をしたい人がいるかどうかは別としてね」
「わかった。ありがとう」
ハリーは頭を巡らせた。
みぞの鏡での幸せそうな父とブラックの笑顔が頭に浮かぶ。ピーターは遠慮がちに2人の後ろで小さく微笑んでいた。
〝みぞの〟鏡……逆から読むと〝のぞみ〟……もし、両親に関する一連の騒動が全て逆に起こっていたとしたらどうだろうか？
ピーターがスパイだったなら。密告したのはピーターだったなら。マグル街で追い詰められたのは、ブラックではなくピーターならば……！
ピーターは隠れるに違いない。
裏切りを明確にした瞬間、闇の帝王が姿を消したのだ。
死喰い人からは、ピーターの密告によって闇の帝王が敗れたように思われ、抵抗軍からは裏切り者として追放される。ピーターの立場はどこにも無くなる。
だからブラックに罪を擦りつけ、そして自分は死んだことにして姿をくらましたのだ！　左手の小指だけを切り落として――！

そうでなければ、ピーターがネズミとして生きている理由がない。
もし本当にブラックが裏切り者ならば、ピーターは普通に生きていればいいのだ。
そう出来なかったのは、彼自身が闇の帝王のしもべであり、彼の密告のせいで結果的に闇の帝王が消えてしまった為、死喰い人から粛清されることを恐れたのだ。

ハリーは真実に辿り着いた。
子役の経験がハリーの想像力を豊かにさせ、隠された真相を明かすことができたのだ。
しかしまだ油断はできない。
どうすればこれを証明できるかハリーは考えた。
下手なことをすると逃げられるかもしれない。
ハリーはハーマイオニーの席に走った。
「ハーマイオニー、小動物を生け捕りにして閉じ込めておける魔法ってない？」
「あると思うわ。ビンにそういう魔法をかけるのよ」
「教えてくれない？」
「いいわよ。でもどうして？」
「よくわからないけど、急にその魔法を使いたい気持ちに襲われたんだ」
ハーマイオニーは首をひねった。
「あなたって変わった人だったのね。子役としてテレビ越しに見てる時は全くそう感じなかったわ」
「子役は好感度命だから、下手なこと出来ないよ……あ、今の発言聞かなかったことにして！　打算的だって叩かれて好感度下がっちゃう！」
ハリーはもはや体面など気にしていなかった。
人生最大の発見をしたハリーは人生最大級に興奮していた。

図書館で魔法を練習するとマダム・ピンスに怒られそうなので、

ハーマイオニーとハリーは近くの空き教室に移動して、魔法を練習した。
ハリーの調子はいつにも増して良かった。
「ハリー、あなた、いつもそれぐらい真剣なら、もっと寮の得点を得ることに貢献できると思うわ」
「だって授業って聞くだけで反射的に眠くなっちゃって……頑張ってるよ！　もちろん！」
「なら魔法史のノートを見せてもらえるかしら？」
ハリーの魔法史のノートはピッカピカの新品だ。
あの子守唄のような講義には敵わない。
ハーマイオニーにお小言を言われつつ、ハリーはその魔法を習得した。
「ありがとうハーマイオニー。このお礼はいつか必ずするよ」
特別な魔法がかかったビンをロープの内側にしまい、ハリーは最高の笑顔でハーマイオニーに感謝の言葉を述べた。

＊

まさかネズミが両親の宿敵だったとは……ハリーは興奮冷めやらぬまま大股で歩いた。
自分の手で敵を暴くことが出来た。両親の無念を晴らすことができた。
監獄にいるシリウス・ブラックの為にも、一刻も早くロンのネズミを捕まえなければならない。
ハリーは寝室に戻った。ロンはディーンとチェスをしていた。ロンが圧倒的優勢で、ディーンのクイーンはロンのキングと不倫していた。
スキャバースは相変わらずベッドで寝ている。
「ハリー、おかえり！　さっきは一体全体どうしたんだい？」
「ああ、心配させてごめん。ちょっと用事を思い出しただけなんだ」
ハリーは爽やかに言うと、ロンのベッドに座り、寝そべって肘をつ

いて、幸せそうに頭をリズムに乗って揺らした。
「うわあ可愛い！　尻尾が長くて、毛並みは灰色。いいなぁ、僕もこんなネズミが飼いたいよ」
　ハリーはニコニコとスキャバースを見つめた。
「授業に連れていけたらいいのになぁ。あ、これ、君のペットのネズミだったよね？」
「うん、ずっと前から知ってるじゃないか」
「確認だよ。ロン、ちょっとだけこのネズミ借りてもいい？　一緒にお散歩してみたいなぁ」
「怪しいことする気じゃないよね、ハリー？」
「もちろんだよ」
　ハリーは寝ているスキャバースを優しく抱き上げた。
　そしてロンから死角になるように背中を向け、ハリーはローブの内側のビンを取り出した。
　――が、そこでスキャバースは目を覚ました。
　少しトロロンとした目で周りを見て、ハリーが掴んでいるビンに気づいた瞬間、何かを察したのか、スキャバースはハリーの手から逃げ出そうとした。
「だめだ！　これからきみは僕と散歩するんだ！」
　ハリーは万力を込めて左手でスキャバースを握りしめ、右手でビンの蓋を開けた。
「ねえ、僕のネズミに乱暴しないでよ!?」
「大丈夫だロン。ちょっと――戯れて――いるだけだから！」
　ハリーはジッタンバッタンとベッドの上で格闘しながら言った。
　ディーンは目を丸くして2人を見ていた。
　なんとかしてハリーはネズミをビンに閉じ込めた。バキッとネズミの骨が何本か折れた気がするが気にしない。
　ネズミはなんとかビンから出ようともがいていた。
「ハリー！　僕のネズミにいったいどうする気なんだ！　そんな狭い所に閉じ込めるな！　やめろ！」
　ロンはハリーからビンを奪い取ろうとしたが、ハリーは断固として

抵抗した。
「ロン、これは君にとっても大事なことなんだ！　大丈夫、変なことはしない。ただ校長室にお散歩に行くお供になってもらうだけだ」
ハリーは有無を言わせない口調で言った。
しかしロンはここに来て謎のグリフィンドール精神を発揮してしまった。
「はやくスキャバースをビンから出せ！　動物愛護団体に抗議されるぞ！　もしそうならないなら、僕が抗議してやる！　友達のペットを突然ビンに閉じ込めるなんて！」
「……なら一緒に行こう。校長室まで。そしたら僕がネズミに対して何もしないことが分かるはずだ」
「なんでそんなに校長室に行きたいんだ!?」
「ロン、君が素直に校長室に行くことを許してくれれば、このネズミはすぐにビンから出されるんだ。数分間だけだ。お願い」
ハリーは頼み込んだ。
押し問答の末、ようやくロンはハリーの頼みを受けた（後にロンはこの選択を深く後悔することになる）。
「……わかったよ。なら行くよ。そしたら、絶対にスキャバースを返してくれよ」
「君が返して欲しい気持ちだったらね」
ハリーはビンを両手にしっかり持って、ロンと共に談話室を出た。

＊

ハリーは校長室に着いた。しかしガーゴイルの銅像が立ち塞がった。合言葉を言わないと上がれないのだ。
前の合言葉は『杖型甘草雨』だった。
「なら……ゴキブリゴソゴソ板豆！」
ハリーが適当に思いついたお菓子の名前を言うと、ガーゴイルは道を開けた。
ロンは唖然としていた。

「校長室に自由に行けるなんて……君、いったい何者だい？」
「こういう時の運は良いんだ」
　ハリーは銅像の裏にある螺旋階段に足を乗せた。
「ほら、ロンも来てよ」
　ロンは畏れ多いという様子でそっと一歩踏み出した。２人を乗せた階段はゆっくり上に上がりながら回り出した。

　校長室のドアを叩くと、ダンブルドアは驚いた様子で２人を見ていた。
「どうしたのかね？」
「ダンブルドア先生。ピーターが生きていたんです。ピーター・ペティグリューが」
　ハリーはネズミが入ったビンを堂々と掲げた。
　ダンブルドアは首を傾げた。
「どういうことかね？」
「両親を裏切ったのはシリウス・ブラックではありません。ピーター・ペティグリューです。ピーターが秘密の守人だったんです！」
「この閉じ込められておるネズミがピーターだと言うのかね？」
「はい、そうです」
「どういうことだよ、ハリー……」
　ロンは校長室の隅っこで訳が分からないという顔をしていた。
　ダンブルドアは興味深くネズミを観察していた。ネズミはさらに激しくビンの中で暴れまわった。
「なるほど、このネズミは指が欠けておる……しかし、それだけでは証拠に欠けるような気がするのじゃが」
「この地図を見てください」
　ハリーは忍びの地図を差し出した。
　ダンブルドアは半月形の眼鏡をくいと上げ、青い瞳でじっと地図を見た。
「ふむ……確かに偶然の一致にしてはおかしな所が多々あるように思えるの。ハリー、そしてロナルド君。少し離れてはくれんかね？」

「はい」
ハリーはロンの腕を掴んで、後ろに下がった。ロンは完全に事態に付いて行けず取り残されていた。
「ロナルド君、わしは今から君のネズミに魔法をかけようと思う。失敗しても害は全くない魔法じゃ。許してくれるかね？」
ダンブルドアは優しげに、しかし強い眼差しでロンに尋ねた。
「え、あ、はい……」
ロンはダンブルドア校長に話しかけられて呆然としていた。ダンブルドアはロンの答えを聞いて満足げに頷いた。
「すぐに了承してくれてありがたい限りじゃ。では――いち、にの」
ダンブルドアは左手でビンを持ち、右手で杖を可憐に一振りした。
眩い白い光が辺りに広がり、ビンの中でポンと煙が上がった。
ハリーが目を開けると、そこには、禿げた頭の小太りな小男が現れていた。

16話　秘密の守り人

校長室は静まり返っていた。
ダンブルドア、ハリー、ロン、肖像画の歴代校長、皆が小太りの男を見ていた。男は小柄で、尖った鼻や小さな目がどこか鼠っぽかった。
男はあたりを確認し、そして一目散に出口のドア目掛けて走り出した。
「待つのじゃ、ピーター」
ダンブルドアは杖の一振りで男を床に這いつくばらせた。
男は惨めに何か喚いていたが、それもダンブルドアが黙らせた。
ハリーは男を冷静に見ていた。
「……ハリー！　ちょっと散歩するだけだって言ったじゃないか！　僕のスキャバースはいつ返してくれるんだい？」
ロンがついに声をあげた。
「あの人がお好みなら連れて帰ったら？」
ハリーはさらりと言った。その間も男からは目を離さない。
この薄汚い男こそ、両親を死に導いた魔法使いなのだ。
「……そんなの嘘だ！　だってスキャバースは可愛いネズミだったんだ！」
「残念ながら君のネズミは動物もどきだったようじゃの」
ダンブルドアが言った。
ロンはへなへなと座り込んだ。
「さて、ピーター。久しぶりじゃの」
ダンブルドアの声は優しげだったが、言いようのない恐ろしさがあった。
「もし君が無実であるなら、わしの質問に素直に答えられるはずじゃ。さて、君はなぜ今までネズミとして姿を隠していたのかな？」
ピーター・ペティグリューはガタガタ震えていたが、必死に口を動かした。
「……ブラックに、ブラックに殺されると思ったんです！　あいつは

私を逆恨みしています！」
「しかしブラックが逮捕されたことはすぐにわかったはずじゃ。パーシー・ウィーズリー殿が、このネズミは幼い時から家にいると言っておった。あの名家に居れば、魔法界の大ニュースを聞き流すことは無いように思うのじゃがのう」
　ロンはしゃがみこんで両手で顔を覆い、指の隙間から恐る恐るピーターを見ていた。
「……そ、そんなニュースは聞いていなかったんだ！」
「ふむ。この１０年間一度もそのような話を聞かず、ずっとネズミとして過ごすことを受け入れていたということかね？」
「ブラックに狙われない為にはそうするしかなかった！」
「……なるほど。たしかに君はそうするしかなかったじゃろう。君が生きていてくれたのは本当に喜ばしいことじゃ。しかし世間では君は死んでいることになっているからのう……魔法省に行って再び戸籍を復活させる必要がありそうじゃの。もしかすると戸籍を作り直す際に真実薬を使うことがあるかもしれん。何せ、死んだはずの人が生きていたと言われても殆どの人が信じられないからの。さて、ではわしと共に魔法省に行かんかね？」
　ダンブルドアはピーターに手を差し伸べた。
　ピーターはますます震え、浅く、早い息遣いをしていた。
　ダンブルドアの前で嘘をつくことは困難だとハリーは悟った。あの青色の瞳で見られると、真実を話さなくてはいけないという気持ちにさせられる。
　きっとピーターもそうなのだろう。しかしピーターは簡単には諦めなかった。
「……わたしは怖かったんだ！　生きていると分かればまたブラックに狙われる！　そして殺される！」
　ピーターはどこか逃げ道はないかと目をキョロキョロさせ、ハリーと目があった。
　ハリーは緑色の瞳でじっとピーターを見た。
「僕の両親は親友に裏切られてヴォルデモートに殺されたんだ」

ピーターはハリーを見て固まった。
「ハリーの両親が裏切られたって、いったいどういうことだい……？」
ロンは小声で呟いて頭を傾げた。
ピーターはロンに向かって縋るように叫んだ。
「ああ、君！　君なら分かってくれるね、私が善良な無実の魔法使いだと！」
「ひえっ！　話しかけないで！　僕、スキャバースがおっさんだったなんてまだ信じたくないんだ」
ロンは腰を抜かして悲鳴をあげた。
せっかく真犯人を追い詰めている良い場面なのに、ロンの存在のせいでイマイチ緊張感が足りないとハリーは心の片隅で思った。撮影現場なら確実にＮＧが出る。しかしそんなの些細な問題だ。
「わしは君がハリーのご両親を裏切ったと決めつけている訳ではない。ただ、君の行動に不可解な部分が多くあるように思うから、真実を知りたいだけなのじゃ。きちんと納得のいく話をしてもらえれば真実薬を使う必要はないのじゃから、話してはくれんかね？」
ピーターは支離滅裂になっていた。
ダンブルドアはしばらく待っていたが、観念したように首を振った。
「君はどうやらまともな話をしたくないようじゃ。ではわしの方から少し昔話をしようかの……」
ダンブルドアは校長室の中をぐるぐる回りながら歩いた。
「初めに言うとすれば、今のわしの一番の感情は喜びじゃよ。君が生きていてくれたのは本当に嬉しいことじゃ、どんな形であれ……。君がホグワーツに入学して来たのはちょうど２０年前のことじゃった。君は組み分け困難者になっていたの……そうじゃ、その頃からわしは君のことが気になっておった。組み分け困難者とは、謂わば、その者の能力を多数の創始者が欲しているということだからの。能力が低い者は居ない。実際、君は賢かった……賢さとは勉学だけを指すのではない！　君は咄嗟の時の機転が利く子だった。
２年生の頃、ジェームズが湖のオオイカを吊り上げて大広間に連れ

込んでしまった時、あたかもオオイカの方から進んで大広間に上陸してきたように細工したのは君だったね？」
　ピーターは喚き続けていた。
「恐らく君が動物もどきになったのはリーマス・ルーピンの為じゃろう……誠に素晴らしいことじゃ。しかもわしに内緒で出来るとは。あのマグゴナガル先生でさえ、動物もどきになるためにわしの手ほどきを受け、何度も何度も失敗した末に成功させたというのに、学生だけで成功するとは見事なことじゃ。
　他にも守護霊の呪文など難しい魔法は沢山ある。じゃが動物もどきはその中でも特に忍耐と精神力が必要な危険な技じゃ。君たち４人程の強い絆で結ばれた親友を得られる人はそう多くないじゃろう」
　ダンブルドアは思慮深げに言った。
　そういえばダンブルドアの親友は誰なのだろうとハリーは思った。
「それから、卒業してからも君は不死鳥の騎士団に入ってくれた。君の小回りのよさと機転はそこでも発揮された。わしは君の才能に気づいておったからこそ、様々なことを任命したのじゃ。
　ジェームズから聞いたかもしれんが、忠誠の術を使うことを勧めたのはわしじゃ。さらにわしが秘密の守り人になろうとも申し出た。謙虚さを欠くことを承知で言うならば――わしはかなり優秀な魔法使いじゃからの。しかしジェームズはその申し出を頑なに断り、親友に秘密を託すと言い張った。彼らがどれほどの覚悟で親友に秘密を託したのか、君は分かるじゃろう？」
　ダンブルドアは細い指を組んで、続ける。
「ジェームズとリリーの死は君にも大きな衝撃と深い悲しみを与えたじゃろう。希望ある若者の死ほど悲痛なものはない。彼らがどれ程の人に勇気を与え、どれ程の人にとって救いとなったことか、その損失がどれ程大きいものか、親友の君なら一番知っていて、体感したはずじゃ。
　それと同じように、君の死の報せはわしを含む大勢の心にぽっかりと穴を開けたのじゃよ。わしからすると、人生は１００歳過ぎてからが本番のように思ってしまうものでの――それは老人の悪い癖でも

あるが――とにかく、これからが君にとって人生の本番であると思っていたのじゃ。しかしそんな時に君の死の報せを聞いたのじゃ。
まさか、と思った。あれほどの親友たちが離れ離れになるなんてわしはにわかに信じがたかった。いや、死ではない！　ジェームズとリリーの死が純粋な戦いに敗れた末のものならば、親友同士が離れ離れになることはないからの。死はただ住む世界が変わっただけのことに過ぎぬ。しかし心の距離が離れれば、物理的には近くにいようとも、それは死別するよりずっと遠い距離にいることと同義じゃ」
死ねば一生会えなくなるし、相手と話すこともできなくなる。どんなに会って話したいと強く望んでいてもだ。だから死別は最も大きな別れ――人と人とが離れ離れになる出来事だとハリーは思っていた。
「よく分からないけど、僕のスキャバースはもう二度と戻ってこないのか？」
ロンが小声で囁いたので、ハリーも小声で聞きかけた。
「ロン、スキャバースとの心の距離を感じてる？」
「うん。だってあんな汚らしいおじさんに変身するなんて……せめて美女がよかったよ」
「もし何も知らずにスキャバースが死んじゃったとして、その時と今とどっちの方がスキャバースとの距離を感じる？」
「もちろん今だよ！　だってスキャバースがスキャバースとしてそのまま可愛く死んで僕の前から姿を消すのと、おっさんになったって知ってスキャバースのイメージが崩壊して消え去るのとじゃ大違いじゃないか！」
ロンの言葉で、なるほどとハリーは思った。
「同情するよ、ロン」
ロンは同情されてもどうにもならないぜ、とばかりに口を尖らせた。
ダンブルドアは微笑ましげに2人を見て、そしてピーターを見た。
「魂を分かち合うような親友だと思っていた相手と、突然隔たりを感じてしまうことがある。もしくは別の道を行きたいと思うことがあ

る。親友のまま別の道を行くこともできるじゃろう。しかしグリフィンドールとスリザリンのように、その絆を解消させたいと思った時、絆が強ければ強いほど人は大きな代償を払わねばならない。彼ら創始者の場合は後世１０世紀に渡る寮の間の不和を残した。わしの場合は妹の死とその後１００年以上も背負うことになる後悔と贖罪の念を。そして――」

その時、ダンブルドアが初めてロンとハリーの存在に気がついたような表情をした。

「おお、なんと！　君達に話して聞かせるにはまだ時期尚早かもしれん。この無礼を許して欲しいのじゃが、君達は一度外に出てもらってもいいかね？」

ダンブルドアはドアを開け、杖を振って椅子を２つ出し、さらにクッキーの箱をロンに渡した。

ハリーとロンは言われるがままに外に出た。

ダンブルドアは孫を見るように優しげにハリーとロンを見つめ、校長室のドアをバタンと閉じた。

「……ねえ、ダンブルドア先生が言ってたことって、どういうことだろ？」

ロンは野次馬根性丸出しでワクワクと聞いた。

「……あれだけ生きてれば色々あるよ」

ハリーはロンが持っている箱を奪って、クッキーを取り出すとロンの口に押し込んだ。

「だってさ、ハリー。もし僕たちがいま大喧嘩したとして、君は僕の妹を殺すかい？」

「喧嘩の理由にもよるかなあ」

ハリーはニヤリと笑った。ロンはひえーと顔を青ざめさせた。

「うーそだよ。君がどんなにひどいことしても、妹が共犯じゃない限り、彼女を傷つけたりしないよ」

ロンは胸をなでおろした。

「よかった。もし君が僕の妹を殺したら、僕、君のことを刺し殺しちゃうかもしれない」

「魔法で殺すんじゃないの？」
「あんまり怖い話しないでよ、ハリー。『例のあの人』が生きてた時代は、杖の一振りで一家滅亡なんてマジでよくある話だったんだ」
「僕の両親も魔法で死んだよ。魔法の緑色の光が当たって死んだんだ」
「ウワー」
　ロンは恐ろしそうに体をビクッとさせた。
「それより、僕のスキャバースはなんであんな汚ったないおっさんになったんだい？」
「あいつは裏切り者の犯罪者だ。姿を隠す為にずっとネズミになってたんだよ」
「裏切りってつまり……」
「そうだよ、僕の両親を裏切ったんだ」
「わーお……信じられないよ」
　ロンは2枚目のクッキーを口に入れた。
　今まで苦楽を共にしたスキャバース。辛い時も、悲しい時も、スキャバースはいつも隣にいてくれた。
　ポケットに入れて持ち運べる大切なペットであり親友、それがスキャバースだった。
　ホグワーツ入学前、フレッドとジョージに悪戯仕掛けられて落ち込んでいた時に慰めてくれた。
　ホグワーツ特急で憎っくきマルフォイを噛んでくれた。
　ロンとスキャバースはベッドを共にした仲だった。
　なのにまさか、中身はあんな小汚い中年男だったなんて……。
　何か大切なものを失ってしまったような感じがする。
　ロンはさめざめと泣いた。
　ハリーはロンを励ました。
「大丈夫だよ、ロン。いいペットはまた見つかるよ」
「嫌だ！　僕にはスキャバースしかいないんだ！　ちっちゃい頃からスキャバースはずっと側に居てくれたんだ！」
「苦しいのは分かるよ。うん、あれは悲惨な出来事だった。ペットの

喪失の悲しみを癒すには新しいペットがいいらしいから、また今度のイースターにペット屋さんに行こうよ。……あれ、なんで僕が励ましてるんだ」
ハリーは少し違和感を感じた。
やっぱりロンがいるせいで場が締まらない。ハリーはロンをこの場から退かせようと思って拳を握って立ち上がった。
しかしその時、階段を上ってくる音が聞こえた。スネイプ先生が小瓶を持って立っていた。
「こんにちは、スネイプ先生」
ハリーは挨拶したが、スネイプはハリーとロンをジロリと見てから、ノックもせずに無言で校長室に入っていった。
ロンがあまりに間抜けな顔でスネイプ先生を見ていたので、ハリーは笑った。
「ロン、その顔やめてよ」
「いや、だってなんであいつが校長室に入っていくんだ？　もしかして僕のスキャバースをおっさんにしたのはスネイプなのかな？　きっとスネイプはネズミ化したおっさんと健気な少年が仲良くしているシチュエーションに興奮するんだよ。スネイプのやつめ！」
ロンはショックのあまり頭がおかしくなっているようだとハリーは思った。
「さすがのスネイプ先生でもそんな性癖はないと思うよ」
「なんで言い切れるんだ？　君はそんなにスネイプを隅から隅まで知ってるのか？」
「知らないけど、でも、そんな人じゃないよ！」
次の瞬間、スネイプが校長室から出てきた。ハリーとロンはパッと話をやめた。
「何を話していた？」
「て、天気の話です」
ロンがゲホゲホむせながら言った。ハリーはごまかしの微笑みを浮かべながらスネイプをじっと見た。
「……これから、もし少しでも疑わしい言動が見られたら減点して差

し上げよう。分かったなウィーズリー！」
そう言い残して、スネイプは螺旋階段を降りていった。
２０分程して校長室のドアが開いた。
「待たせたのう。やはりピーターに死喰い人であった過去があることは間違いないようじゃ。ひとまずわしは彼を魔法省に連れて行こうと思うが、ロナルド君、いいかの？」
「え、はい」
「ではハリー。恐らく確認が取れ次第、ピーターの罪に関する裁判とシリウス・ブラックの再審が始まるじゃろう……再審というよりは初めての裁判じゃがな」
「どういうことですか？」
「１１年前、シリウス・ブラックは裁判を受けずにアズカバンに直送されたのじゃ」
ロンはぎょえっとした顔をした。
校長室の中を覗くと、ピーターは椅子に縛り付けられて座っていた。
「ハリー、もし望むのであれば君が裁判に同席できるようにしてあげられるが、どうしたいかね？」
「したいです！　お願いします！」
ハリーはすぐさま言った。ダンブルドアは頷いた。
「君なら絶対にそう望むじゃろうと思っておった。ではこれからしばらくはわしに任せて欲しい。よいかの？」
「よろしくお願いします」
ハリーは力一杯頭を下げた。
ロンもつられて一緒にお辞儀した。

１７話　ウィゼンガモット大法廷

【ピーター・ペティグリュー真犯人か!?
　昨日、死亡したとされていたピーター・ペティグリュー（３１）が魔法省にダンブルドアと共に出頭した。
　彼は『例のあの人』に対する抵抗軍、〝不死鳥の騎士団〟に入っていながら死喰い人として活動していたことを自白したという。
　そして驚くべきことに１１年前に収監されたシリウス・ブラックが逮捕される原因となったマグル１２人殺害爆発事件はペティグリュー被告が起こしたものだという。
　魔法警察部隊は直ちに捜査を始めた。
　もしこれらの証言が本当であれば、ブラックは無実の罪でアズカバンに幽閉されていたこととなる。
　関係者によればブラックは裁判を受けることなくアズカバンに送られたという。
　魔法省は早急な司法制度の見直しが求められるであろう。】

「この人が、あなたのご両親を裏切った人なの？」
　翌日の朝食の時間、ハリーとロンはハーマイオニーが定期購読している日刊予言者新聞を覗き込んで読んでいた。
「そうだよ。僕がペティグリューを追い詰めたんだ」
　ハリーは苦々しげに言った。
「そういえば魔法界に死刑ってあるの？」
　ディーンが聞いてきた。
「イギリスにはないわ。でもアメリカにはある。椅子に座らされて、水の中に沈んでいくのよ。水面には幸福な自分の姿が映っていて、死刑囚は自ら死の水に飛び込んでいくの」
「それっておかしくないかい？　殺された方は苦しみながら死んだのに、殺した方は幸福に死ぬなんて」
「私もおかしいと思うわ。殺人に対する一番の償いは死んだ人を生き返らせることよ。万引きしたら賠償のお金を払うし、傷つけたら治療

費を払うし、でも死者を生き返らせることは出来ないでしょう？　殺人っていうのはそれだけ重い罪なのよ。確かに人道的に加害者を拷問したりは出来ないしするべきではないけど、わざわざ幸福のうちに死刑囚を死なせてあげる装置を作るのはおかしいと思うわ」
「被害者が受けた苦しみは拷問以上だと思うよ」
ハリーが言った。その声があまりに暗かったのでハーマイオニーは口を噤んだ。
「僕達で署名運動をしたらどうかな。だってハリーの両親は死んじゃってるのに、殺した方は生きてるなんておかしいじゃないか」
ロンが憤った。周りのグリフィンドール生達が頷いた。
ハリーは無言だった。
何をしてもこのやりきれない悔しい思いが完全に消化されることはないとハリーは気づいていた。
「死刑があったとしても、それは別に殺人の罪の対価ってわけじゃないんだ。そしたら大量殺人鬼であればあるほど命が重いってことになるから……。僕はただの学生だし、魔法界は法治国家だから、ペティグリューの扱いは魔法省に任せるよ」
ハリーはきっぱりと言った。

新学期が始まって、勉強はますます難しくなった。
ペティグリューのことがどこまで進んでいるのかハリーは知らなかったが、ダンブルドアと魔法省のことを信じてじっと待った。
複雑な心境を忘れるためにハリーはハーマイオニーと共に勉強に没頭したし、ロンにコサックダンスを教えて気を紛らわせた。
考えてもどうにもならない理不尽なことがこの世の中には溢れていると知っていた。
シリウス・ブラックはどうしているだろうとハリーは考えた。まだアズカバンに居るのだろうか。それとも裁判の為に魔法省に連れてこられたのだろうか。

＊

魔法大臣コーネリウス・ファッジは非常に焦っていた。
ブラックによって殺された哀れな被害者ピーター・ペティグリューが生きていて、さらに彼が真犯人だったなんて、こちらとしては非常に都合が悪い。
ピーターには昔マーリン勲章を与えてしまっているし、なにより無罪の魔法使いを１０年以上もアズカバンに閉じ込めていたなんて知られれば、世間から大バッシングを浴びるだろう。
あの時、日刊予言者新聞に圧力をかけておかなかったのは大失敗だった。
あの朝刊が出てから、魔法大臣室には吠えメールや嫌がらせの手紙が嵐のように届き続ける。
もうこの世論を覆すことは無理だろう。
ピーターをこっそり逃してブラックの無罪の証拠を抹消することも考えたが、ダンブルドアはファッジの考えを見透かしていたらしく、勝手に闇払いにピーターの管理を頼んでしまった。
しかし1つだけいい点があるとすれば、ブラックをアズカバン送りにすることを決めたのは自分ではなく部下のバーテミウス・クラウチだということだ。
彼を厳重な罰に処すことで、何とか今の地位を保てないだろうかとファッジは考えた。

＊

シリウス・ブラックは分厚いマントを着せられて、ボートで海を渡っていた。
両手は後ろで魔法で拘束されていて、足にも枷が付いていたが、これ程までに自由を感じたのは、初めてホグワーツ特急に乗った時以来２度目だった。
まさか裁判を受けられることになるとは思ってもいなかった。
外の世界がこんなに素晴らしいものだとは知らなかった。

長い冬が終わり、ようやく春が訪れたような気分だ。
ジェームズとリリーの死以来止まっていたシリウスの時計が再びカチリカチリと動き出した。

＊

地下１０階にある古い十号法廷が何年振りかに開かれた。
ここはかつて死喰い人らが裁判を受けた場で、重罪人が裁かれる場所である。
一面を黒ずんだ石壁が囲んでいて、四方にベンチが階段状に並んでいる。
ハリーはダンブルドアと共に一番前の傍聴席に座っていた。
周りに座る魔法法律評議員の人々は全員が赤紫色のローブを着て、胸に複雑な銀の飾り文字のWの印をつけていた。
そして一際高いベンチに魔法大臣のコーネリウス・ファッジが気難しい顔で座っている。
ブラックの無実と真犯人発覚という衝撃の事実を証明する裁判ということで、部屋には緊張感が高まっていた。
魔法法律評議員の方々は好奇心が勝るようで、ウキウキとしている。
擦れる音を立てて扉が開いた。部屋の空気が張り詰めた。
入ってきたのはピーター・ペティグリューだった。両腕を吸魂鬼に掴まれて、死人のような目をしている。
これからの自らの運命に絶望しているようだ。
ペティグリューは中央の椅子に座らせられ、金の鎖で縛り付けられた。
それからしばらくしてシリウス・ブラックが入ってきた。魔法省の職員に挟まれているが、吸魂鬼の姿はない。
ブラックはボウボウに伸びた髪をきって、髭を剃り、きちんとしたローブを着て、優雅に歩いてきた。瞳はシャッターを落としたように暗いが、幾分か昔の美貌が取り戻されているとハリーは思った。

シリウス・ブラックは端の椅子に座った。鎖は巻きついてこなかった。
ブラックは冷ややかな憎悪を超えた強い憎しみの目でペティグリューを睨んでいた。
「やっぱりあいつが犯人じゃないの……」という皆の心の声をハリーは聞いた気がした。
でもハリーには分かっていた。ブラックは確実に無実だ、と。
「えー、我々は１９８１年に起きたマグル１２名虐殺事件の再審を行う為に開廷した。ピーター・ペティグリュー。おまえは『例のあの人』の配下として我々の情報を密告した罪と、白昼のマグル街で魔法による爆発を起こしマグル１２名を殺害した罪に問われている。証拠は――」
それから裁判は淡々と進んだ。時折、陪審員席から息を飲む音や唸る声が聞こえた。
ペティグリューの記憶が水盆に映し出された時、席から次々と怒号が飛び交った。
ヴォルデモート卿にピーターがジェームズとリリーの居場所を伝えたシーンになり、シリウスは両手で顔を覆った。ダンブルドアがハリーの肩に手を回して抱き寄せた。
上映が終わり、クラウチは重々しく口を開いた。
「……審議の結果この記憶の信憑性は極めて高いと思われる。よってピーター・ペティグリューはアズカバンでの終身刑に値するであろう。それに賛成の陪審員は挙手願いたい」
クラウチの右手に並んだ魔法使いや魔女たちが一斉に手を挙げた。
ピーターは絶望に暮れた目で陪審員たちを見て、暴れ出した。
「違うんだ……わたしは、あの時だけだったんだ！　どうかアズカバンには連れて行かないで……！」
ピーターは哀れに叫んだ。
「お前のちっぽけな欲望のためにジェームズとリリーを売って!!　私をアズカバン送りにして！　まだ逃れようというのか!!」
涙ながらにシリウスが吼えた。

吸魂鬼が部屋に戻ってきて、ピーターの腕を掴んだ。ピーターは引きずられるようにして部屋から退出した。
「はい……ピーター・ペティグリューの判決を受けて、シリウス・ブラックは無罪放免とすることに賛成する者は挙手を」
ファッジは気まずげに手元の書類に目を落としてから言った。
殆どの魔法使いと魔女が手を挙げた。
「ではシリウス・ブラックは無実とする。……長きに渡り無実の罪でアズカバンに収監してしまったことは誠に申し訳なかった。今後このような過ちを繰り返さぬよう、魔法省は全力を挙げて対策を講じようと思う」
ファッジの上辺の謝罪の言葉はハリーの耳に入っていなかった。
ハリーは喜びでいっぱいになってブラックを見た。父さんの親友を救うことができたんだ。無実の罪でアズカバンに送られたシリウスを。
シリウスは言い渡された言葉が信じられない様子で、呆然と宙を見ていた。
次の瞬間、シリウスとハリーの目が合った――シリウスの険しい顔に笑顔が広がった。それは驚異的な変化だった。一瞬、昔の幸福なシリウスの姿が取り戻されたようだった。
ハリーは立ち上がって、ベンチから出て階段を駆け下りた。そしてシリウスに抱きついた。シリウスは強くハリーを抱き返した。
「シリウス……ごめんなさい、父さんの親友なのに裏切り者だと思ってしまって……」
「君は謝るべきじゃない。君のおかげでわたしの無実が証明されたんだ。私は君のご両親を裏切るぐらいなら死を選ぶよ。本当にありがとう。さすがはジェームズの子だ……」
シリウスはハリーを持ち上げてぐるぐる回した。
「あはははは!」
ハリーは心の底から笑った。
ダンブルドアと鳶色の髪の男性が近づいてきた。
「リーマス……!」

「シリウス、友よ、すまなかった」
２人は兄弟のように抱き合った。
彼が父さんと写真に写っていた３人目の人だ。
リーマスは感心と感謝が混じった瞳でハリーを見た。
「噂には聞いていたけど、君は本当にお父さんにそっくりだ。情けない私に代わって真実を発見してくれて、感謝してもしきれないよ。きっとジェームズも喜んでいるはずだ」
ハリーは嬉しかった。
「この地図がきっかけになったんです」
ハリーはローブの内側から忍びの地図を取り出して、杖で叩いた。
シリウスとリーマスは驚いて顔を見合わせた。
「ははは、もしかすると本当にジェームズが天国から君を真実に導いてくれたのかもしれないな」
リーマスは朗らかに笑った。
ハリーが首をかしげると、シリウスが補足した。
「これは私たちが君のお父さんと一緒に学生時代に作った地図だよ。ムーニー、ワームテール、パッドフット、プロングズ……懐かしい響きだ。このプロングズが君のお父さんのあだ名だった」
ハリーは不思議な気持ちになった。父さんと母さんは思ったより近くにいるのかもしれない。
「愛する人が死んだ時、その人は永久に我々のそばを離れると思うかね？　苦しい状況にあるとき、いつにも増して鮮明にその人たちのことを思い出しはせんかね？　君のお父さまは、君の中に生きておられるのじゃ」
ダンブルドアが微笑んだ。
「ハリー、もしも、もし君がよければだけれど……私は君の後見人なんだ。つまり、君の両親が、もし自分たちの身に何かあればと決めていたんだ」
シリウスの声は緊張していた。
ハリーは頷いて次の言葉を待った。
「もちろん、君は叔父さんや叔母さんとこのまま一緒に暮らしたいと

いうのなら、その気持ちはよくわかる。少し聞いた話だと、君はマグル界でも活躍していて有名なようだし……君のお父さんでさえ成し遂げなかったことだ」
　シリウスに褒められると他の誰に褒められた時より嬉しかった。
「しかし、まあ……考えてくれないか。もし君がもう1つの家族が欲しいと思うなら……」
「あなたと暮らせるの？」
　ハリーは食い気味に聞いた。
「もちろん君はそんなこと望まないと思ったが」
　シリウスは慌てて言った。
「いえ！　暮らしたいよ！　僕、あなたと家族になりたい！」
　ハリーはシリウスを見上げた。
　両親が死んでから初めて家族ができた気がした。

18話　イースター休暇

ハリーは天にも舞い上がりそうな気分だった。
シリウスと暮らせる……父さんと母さんの親友だったシリウスと……。
しかしその夢は一瞬にして砕かれた。
「え、少なくとも4週間はダーズリー家に居なきゃいけないんですか？」
「なぜですか？」
ハリーとシリウスはダンブルドアに詰め寄った。
「君には大切な子役としての仕事があるじゃろう。ペチュニア叔母さんは君が子役として活躍してくれることを望んでおる。その為に4週間は活動して欲しいとのことじゃ」
子役としての活動……シリウスのことで頭がいっぱいですっかり忘れていた。
「ああ、そうか……なら仕方ない。私も君がテレビと言ったかな？で輝いている姿を見てみたいよ」
シリウスが悲しさを押し殺して言った。
「あなたが言うなら……分かりました。4週間ですね」
ハリーは寂しそうにした。その様子を見てシリウスは高らかに宣言した。
「よし、分かった。私が君の叔父さん叔母さん家の近くに家を買って住もう！　そうすれば君はいつでも遊びに来れる！」
「えー？　いいんですか？　やったー！」
ハリーとシリウスは抱き合って喜んだ。ついさっき初めて会話したとは思えないほど2人は仲良くなっていた。
そんな2人にダンブルドアとリーマスはニコニコ笑っていた。
ハリーはとても聞き分けのいい子だと思っていたが、ずっと我慢させてしまっていたのかもしれない。どうかハリーとシリウスの幸せな家庭が長続きして欲しいとダンブルドアは願った。

翌日の朝食の時間、ホグワーツに戻ったハリーは皆から質問攻めにあった。
「ねえハリー、あのシリウス・ブラックが君の後見人だったって本当なの？」
「そうだよシェーマス。昨日、ホグズミード村に遊びに行って僕にマフラー買ってくれたんだ」
「私、早速シリウス・ブラックのことを調べたのだけど、彼ってとっても優秀だったらしいわ。あなたのお父さまと一、二を争う成績だったそうよ」
「すごいねハーマイオニー。まるで動く百科事典だよ」
「すごいよハリー！　きみ、無実の人を助け出したんだ！　やってない犯罪でアズカバンに入れられるなんて考えるだけで震えてくるよ……」
「ありがとうネビル」
ちなみにロンにも同情が集まった。ずっと大切にしてきたペットが中年の薄汚い男だったからだ。
全国から新しいネズミをプレゼントするとの申し出が出て、ロンはちょっとしたスターだった。ロン自身はまんざらでもなさそうだ。
元気になってくれてよかったとハリーは思った。
「ふん、可哀想なみなしごが刑務所帰りの男と家族になるなんて、泣ける話だねえ」
プラチナブロンドのドラコ・マルフォイは煽ってきた。
わざわざグリフィンドールのテーブルに近づいてまで話しかけてくるんだから可愛いものだ。
「マルフォイ、僕とシリウスに対して涙を流すぐらいなら、ロンの身に起きた悲劇に対して泣いてあげてよ。ロンは大切なペットがおっさんだったという悲しみに暮れてるんだ」
「え、僕を売るのかいハリー!?」
ロンは慌てた。マルフォイは不機嫌そうに鼻を鳴らした。
「野良ネズミなんて飼ってるせいさ。自業自得だよ」
マルフォイはそう言い残して去っていった。

「そういえばロン、マルフォイのお家にはクジャクがいるんだって」
「うん、その情報は今いらないかな」
「ロンもクジャク飼ったら？」
「そんな大きい動物飼ったら、ベッド丸ごと乗っ取られちゃうよ。それにマルフォイの野郎と同じものは飼いたくないし」
「そっか」
ハリーはしょんぼりした。
今の会話は何だったんだとロンは思った。

それからあっという間にイースター休暇が訪れた。
その間にいくつか良いことが起こったが、特によかったのはロンのパパが宝くじを当てたことだろう。
１００００ガリオンという超大金を当てたので、チャーリーの治療費の支払いに頭を悩ませることをしなくてよくなったのだ。
それどころか休暇ごとに家族みんなでマレーシア（チャーリーが治療を受けている病院がある）に行けるぐらいの余裕ができたのである。
チャーリーと会ってみたかったハリーは、シリウスを誘ってウィーズリー家の旅に同行させてもらうことにした。

暖かい春風が吹く３月、ウィーズリー一家とハリーとシリウスは『隠れ穴』にお邪魔させてもらって、旅行の計画を立てていた。
ハリーたちはまず３日後にマグルの空港に移動することになっている。
魔法省に申請すれば長距離移動が可能な移動キーを作ってもらうことも出来るのだが、時間がかかる上に高価なのでマグルの乗り物を使おう、と父アーサーが強く主張したのだ。
「ただ親父がマグルオタクなだけだぜ」とフレッドは語る。
実際、出費は飛行機の方が少ないが、手間は圧倒的にかかる。手間賃を考えたらどっちもどっちだ。
飛行機に乗ったことがあるのがハリーだけだったので、ハリーは一

生懸命みんなに説明した。
「飛行機はテロとか事故対策で、持ってっちゃいけないものがあるんだ。それがこのプリントにまとめてある」
ハリーは説明プリントをみんなに配った。
ウィーズリー兄妹はチンプンカンプンだ、という顔をした。
「これらを持って行ったらどうなるんだい？」
兄妹一の真面目者パーシーが、メモ帳を片手に尋ねた。
「飛行機に乗る前にセキュリティー検査があるから、そこで捨てるように言われるよ」
「ならちょっと魔法かけて検査員を騙せばいいじゃないか」
「ダメだぞ、ジョージ。我々はマグルとして行飛機に乗るんだ」
「飛行機です」
「おお、そうだったか」
アーサーは頭を掻いた。
シリウスはハリーの話にのめり込んでいたが、ハリーの声を聞くのを楽しんでいるだけで、内容は全く頭に入っていなそうだった。
「じゃあ復習です！　ボディーチェックの時に身につけてはいけないものは何でしょう？」
ハリーは気を取り直して明るく尋ねた。
「えっと……お菓子？」
ロンの妹、ジニーが答えた。
彼女はハリーの大ファンで、初対面の時は緊張でずっとカチカチになっていた。でも数日一緒に過ごした2人はもうすっかり仲良しだ。
「ブー！　お菓子は大丈夫だよ」
「釣り竿」
シリウスはどうだ、と言わんばかりに得意げに答えた。
おおーという雰囲気になる。ハリーは困った。
「えっと……釣り竿はダメだと思うよ。でもそれをボディーチェックの時に手に持っている人はそもそも居ないんじゃないかな」
シリウスは肩をすくめた。
「わかった。金属類だね」

ビルが冊子をパタンと閉じて言った。
「正解！　あと魔法界の品々も電磁波が狂うらしいから、なるべく持って行かない方がいいよ」
「かくれん防止器とか？」
「そういうこと」
ハリーはビルに向かって拍手した。
ビルはグリンゴッツ銀行で呪い破りの仕事をして働いている長男で、しっかり者だ。ファッションセンスも完璧で、髪はポニーテールに結い、ドラゴン皮のブーツを履いている。
「あと、一番大事なのは服装なんだ。今みたいにローブを着てちゃダメだ。ナチュラルなマグルの服装をしないといけないんだ」
「僕たちはよくマグルの服着てるから大丈夫だよ！　問題はママかな」
ロンがジトッとした目で、一昔前の流行りのローブを着たモリーを見た。
「あらまあ失礼しちゃうわ。私だってマグルの格好ぐらいしようと思えばできますとも」
モリーは手を腰に当てて胸を張った。モリーが巨乳なのでジニーも大きくなるに違いないとハリーは思った。
「もし何か疑問があれば僕が答えますね」
「あらありがとうハリー！　あなたにコーディネートしてもらおうかしら？」
モリーはハリーにメロメロだった。
「ならば私のもしてくれないか？　いいだろハリー？」
シリウスはモリーに対して謎の対抗意識を燃やしていた。
「うん、もちのロンさ！」
「ちょっと待って、それ僕の持ちネタなんだけど」
結局、翌日みんなでマグルの洋服店に行って、服を選ぶことになった。

＊

ヒースロー空港に行くまでの段階で、ハリーはこの旅の道のりが険しくなることを確信した。大の大人であるアーサーとシリウスがマグルの電車に興奮しっぱなしなのは側から見ると異様な光景だったし、子供たちは子供たちで物を無くしたり突然迷子になったり散々だった。

当然ながら出国審査や税関の審査を正規の方法で通過できる余裕もなく、アーサーがこっそりマグルに錯乱の呪文をかけて、なんとか飛行機搭乗まで漕ぎ着けた――本当に長い道のりだった。

「これ、いつ飛ぶの？」

「もう飛んでるよ」

「え?!」

離陸直後、ジニーは初飛行機お決まりの勘違いをした。それを聞いた他の全員がエッと叫んだので、ハリーたちは周りから怪訝な目で見られてしまった。

せめて大人たちは静かにしていて欲しいとハリーは切実に願った。

13時間もの長いフライトの間、魔法使いっぽさを出さずに暇つぶしするのは至難の業だった。

ウィーズリー兄弟がカエルチョコカードバトルをするのを止めるのは心が痛んだが、絵が動くカードなんてマグルに見られたら大事件だと思って、ハリーは心を鬼にして止めた。

機内食の不味さに怒ったフレッドとジョージが暴動を起こそうとしたりなんやかんやあったが、気がつけばみんな疲れて眠っていた。飛行機の明かりは落とされ、暗闇の中で飛行機のエンジン音が響き、ビニール袋がカサカサ擦れる音が時折聞こえてきた。

ハリーはようやく緊張が解けて、ホッとした。子役の頃に何度も飛行機に乗ってアメリカや日本に行ったことがある。しかし完全なプライベート旅行で飛行機に乗るのは初めてだった。

ハリーは隣に座るシリウスを見上げた。抜群のスタイルに、サラリと流れる黒髪と綺麗な細長い指。暗闇の中でも寝顔も整っているのが分かる。豚みたいなバーノン叔父さんとは大違いだ。

その時、シリウスがパチリと目を開けた。
「起きてたの？」
ハリーは驚いて小声で聞いた。
「驚いたかい？」
「うん、だって寝てると思ってた」
「そんなに早く眠れる訳がないさ、ハリー……マグルはこんな乗り物に乗ってたんだな。箒でもここまで高い所を飛んだことはない」
シリウスは昼間のはしゃぎっぷりとは正反対の趣で感慨に浸っていた。
「あのね、シリウス。僕、マグル界で映画に出てるって言ったよね。もう見てくれた？」
「ああ、見たとも！　私の従姉妹の夫がマグル生まれだから、教えてもらったんだ。どの役も本当に素敵だったよ。私のお気に入りは『オリバー・ツイスト』だ……リリーとジェームズも観たら喜ぶだろう」
シリウスは優しくハリーの肩に手を置いた。ハリーの顔がパッとほころんだ。
「いつになったらプリペット通りの近くに引っ越してくれる？」
「もうすぐだよ。魔法省から賠償金を搾り取ってやった。君はどんな家に住みたいかい？」
「うーん……シリウスが好きな家でいいよ。でも、広くても狭くてもいいから、あったかい部屋がいいな。あ、温度とかじゃなくて」
「任せとけ、ハリー」
シリウスはウインクした。
気がつくと2時間も経っていた。シリウスの腕の中でハリーは眠りについた。
ようやく一行はクアラルンプールに到着した。
マレーシアはイギリスよりずっと暑かった。空港から出て、サンサンと太陽が降り注ぐマレーシアの地を踏みしめる。
やっとここまで来た。ハリーは達成感でいっぱいだった。
その時、遠くで燃えるような赤毛の青年が手を振っているのが見えた。爽やかなハワイアン風の服を着ている。

「チャーリーだわ、ママ！」
「あらまあ！」
　みんなは急いでチャーリーの元に走った。
「どうして病院から出てきてるの、チャーリー？」
「ママ、僕はもうほとんど治ってるよ。ここ数週間は傷跡を薄くする治療とかばっかりだ。何故か医者が退院させてくれないだけで、もう元気いっぱいだよ。変だと思わない？」
　モリーは気まずそうに目を泳がせる。
「そうかしら、まあ、お医者様の指示には従うべきよ……」
　モリーはチャーリーがドラゴンの研究に戻るのが心配で、わざわざルーマニアの病院からマレーシアの病院に移動して強制的に入院生活を長引かせているのだ。
「まあ、なにより会えてよかったじゃないか、息子よ！」
　ウィーズリー一家がチャーリーと順番に抱き合った。それからハリーとシリウスも握手した。チャーリーの手は筋肉質でゴツゴツしていて固かったが、暖かかった。

19話　チャーリーと海外旅行

チャーリーと合流した一行は魔法界の屋台に行った。
魔法界にもマレーシアのお国柄が表れていて、屋台はごちゃごちゃして活気溢れていた。通りを歩く魔法使いたちはローブではなく長い布のようなものを巻いている。
「ここは貿易が盛んで多文化が混ざり合う土地なんだ。マグルが他国と貿易したみたいに、マレーシアの魔法族も周りの国と魔法の技術を積極的に交換し合った。だから魔法も多種多様で面白いよ。
ただ、この国はイギリスとかオランダとかポルトガルとかに植民地支配された過去もあるんだ。マレーシアの魔法族は自分達の文化を守る為に、侵略を企む外国の魔法族と徹底抗戦した。マグル界は支配されたけど、魔法界は守らなくちゃいけないって思ってね。で、結局マレーシア魔法軍は勝ったんだ。今のマレーシアの魔法使い達は、そのことをすごく誇りに思ってる」
チャーリーが解説した。
「それならマレーシアの魔法使いたちは今でも、イギリスやオランダを恨んでいるの？」
パーシーが聞いた。
「完全にわだかまりが消えたわけではないけど、でもみんな優しくしてくれるよ。僕としてはこの国の良いところは料理の美味しさかな。中華とかインド料理とか色々食べられて楽しいんだ」
ハリーは、チャーリーのオススメである『サテアヤム』というマレーシアの焼き鳥を食べた。グリルされた鶏肉にピーナッツソースがかけられていて、串に刺さっていて食べやすかった。
他にもラクサという酸っぱいスープやオタオタという焼いた魚のすり身などたくさん食べ歩きしたが、どれも独特で美味しかった。東南アジアの味がした。
夜になるとチャーリーは病院に戻っていったので、ハリーたちは予約していた魔法界の宿に向かった。バックパッカーが集まる安宿と言った感じの雰囲気で、ビールの箱を逆さにした椅子がいい味を出し

ていた。
そこには個別の部屋の他に、皆が集まる食堂のような大きい部屋があった。
はじめの晩にそこを覗いてから、ハリー達は毎晩決まってそこに行くようになった。
そこではインド系のつり目美人な魔女がインド古来の魔術を見せてくれたり、中国人の少年魔法使いが『気功』というカッコいい魔法を実演してくれた。
彼らも旅行でこの宿に泊まっているのだ。
当たり前なのかもしれないが、他の国にも魔法使いがいると知ってハリーは驚いた。
それから数日の間、ハリーはマレーシア魔法界旅行を満喫した。
マレーシアではハリーのことを知っている人は少なかったので、のびのびと遊ぶことができた。
マレーシア魔法界の長い布を巻いた衣服を着る体験で、ロンは布が絡まってパニックになった。その上フレッドとジョージがからかって余計に絡ませようとするから、ロンは死にかけた。
それを尻目にハリーはシリウスと楽しく着付け体験をした。シリウスは長身でスタイルが良いので何の衣装でもよく似合った。
最年少のジニーは目がぱっちりなのでとても可愛くて、アーサーは写真を撮りまくっていた。それに対抗してシリウスもハリーの写真を撮りまくった。
問題が起きたのは5日目のことだった。
「実はマレーシアにもドラゴンの飼育地があるんだ。チャイニーズ・ファイアボール種とウクライナ・アイアンベリー種のハーフが居るんだけど、とても綺麗な血な交わり方をしていてね、というのも――」
「チャーリー！　あなた、ここでもドラゴンを見に行ってるっていうの？」
モリーが金切り声を上げた。
「ちょっと見学してるだけだよ！　どれだけ暇か母さんは分かってないだろうけど、ほんっとうに暇で暇でやることがないんだ。傷はほぼ

治ってるんだからさ」
　モリーは顔を真っ赤にした。
　こりゃダメだ、という感じでロンは首を振った。
「チャーリーが危険生物と関わろうとするなんて昔っからなのに、ママはどうしても止めたがるんだ。チャーリーの奴、前に家の庭でノグテイルを飼おうとしたこともあるんだぜ」
　ロンがハリーの耳に手を当てて囁いた。
「ノグテイルって？」
「真っ黒の子豚みたいな気持ち悪い悪魔だよ。ほんと、ウゲーって感じだぜ」
「チャーリーは魔法生物なら何でも大っ好きだけど、特にドラゴンのことになるとむちゃくちゃバカになるんだ」
　ジョージが言うんだからよっぽどだ、とハリーは思った。
　その後、壮絶な親子の口論の末に、ハリー達はそのドラゴンの居住区をみんなで見学しに行くことになった。
　どうせ止めてもチャーリーはドラゴンを見に行ってしまうだろうから、勝手に行かれるよりは自分の監視下で行かせておきたいとモリーは考えたようである。
「ドラゴンはすごいんだ。鱗も目も全てが美しくて、皆を魅了する不思議な光を放ってる。卵が孵化する所は滅多に見れないんだけど、見ると絶対感動するよ。まあ簡単には見て欲しくないけどね。あれは本当にドラゴンを愛してる人だけに見てほしいシーンだよ」
　チャーリーは饒舌に話す。目はキラキラ輝いていて、実に楽しそうだ。
　チャーリーの案内でやってきたのは、島の外れのジャングルのような地帯だった。鉄柵で囲われていて、門がかかった錆びた門がある。
「ここが入り口だ」
「ドラゴンがいるのに、こんなガードで大丈夫なのか？」
　ロンがポンポン柵を触った。廃墟のような趣きがあった。
「これはフェイクだよ。実際には魔法で厳重に守られてるから安全だ。それにマレーシアのドラゴンは全頭鎖で繋がれてるからね。マ

レーシアの法律は厳しいんだ。僕としてはのびのびさせてあげて欲しいんだけどね」
「何を言ってるの！　ドラゴンは、繋いでおくに限るわ！　ちゃんと繋いでなかったせいで、あなたは大怪我したのよ」
「はいはい母さん。あれは僕の不注意だから、ドラゴンに罪はないよ」
　チャーリーはモリーを軽くあしらい、管理棟へと向かった。
　そして現地の人と親しげに会話してから、ハリー達の方へ戻ってきた。
「見学の許可が降りたよ！　じゃあ、初めはペルー・バイパーツース種とオーストラリア・ニュージーランド・オパールアイ種の掛け合わせの雑種から見よう！　このドラゴンは小型だけど、玉虫色に光る真珠みたいな鱗と多彩色な瞳孔の無い目が美しいんだ。攻撃性も低くて交流しやすい種だよ」
　チャーリーにガイドされて、ハリー達はジャングルに切り開かれた道を歩いた。
　ハリーは道のそばに生えた、水でできている木を発見した。
「あれ、何だろ？」
「おったまげー。きっとマレーシアの魔法植物だよ」
「スプラウト先生が見たら喜ぶかな？」
　ハリーはその木に触ろうと手を伸ばした。しかし見えない壁に阻まれた。
「道沿いに魔法で壁が作られてるから、僕達は入れないよ！」
　チャーリーが説明した。
　そこは大規模な動物園のようだった。違うのは、檻が完全に透明で目に見えないのと、とてもとても広いということだ。
　３０分ぐらい歩いたところで、ハリー達は空飛ぶ絨毯に乗ることになった。
「なんで最初からこれに乗せてくれないんだ？」
「見物客に安易に絨毯で移動させると、厄介なこと起こされるかもしれないだろ。だから、３０分まじめに歩けた人だけが絨毯を手にするんだ」

空飛ぶ絨毯は2枚あったので、2グループに分かれることになった。
ハリーはシリウス、チャーリー、ロン、アーサー、ジニーと共に乗った。
ヒューヒュー風を切って空を進むのは爽快だった。
「アラジンみたい……」
「え？　今なんて？」
「何でもない。ただ、そういうキャラクターがマグル界にいるんだ」
「その話が出来たのはきっと愚かな魔法使いが、絨毯に乗ってる姿をマグルに見られちゃったからだろうね。どの国でも魔法使いの移動手段はマグルにバレやすいんだ」
チャーリーが説明した。
シリウスは風で髪が綺麗になびいていた。
「学生の頃、一度、自作の絨毯で空を飛びたいって話になったんだ」
「ふうん、いいね」
「ああ。ジェームズがグリフィンドールの談話室に敷かれてた絨毯引っぺがして、私たちで魔法をかけた。浮遊魔法だとか、スピード魔法だとか、箒にかけられた魔法を参考にしてね」
「うわーお、豪快だね」
もし仮にハリーがテレビスタジオのセットを破壊して遊んだりしたら、好感度だだ落ちで出禁になり2度と呼ばれなくなる。
そんなことをしたのに退学になるどころか首席で卒業した父親はやっぱりすごい！
ハリーは再認識した。
後を飛ぶ2枚目の絨毯は、フレッドとジョージが飛んで回っての大騒ぎをするので転覆しかけていた。パーシーが真っ青になって絨毯の端に掴まっているのが面白くて、ハリーは思わず吹き出した。
「いいぞ、フレッド！　もうちょち右だ！」
ロンは楽しそうに囃し立てている。
「頑張れー！」
ジニーは誰かを応援している。フレッドとジョージに向けたもの

か、パーシーに向けたものか、はたまたそれを叱るモリーに向けたものかは分からない。一番最初の説が濃厚だとハリーは思った。

それからのドラゴン巡りは刺激的で楽しかった。

ドラゴンは巨大で美しかった。咆哮と共に大きな炎を吹き上げるドラゴンの野生的な獰猛さと、それに反するきめ細やかで繊細な造形にハリーは圧倒させられた。

ここで映画を撮れたらいいのに。魔法界に映画が無いのはもったいないとハリーは思った。マグル界で話題沸騰中の小説『ジュラシック・パーク』をここで撮影できたら、不朽の名作になること間違いなしだ。

何よりチャーリーの解説が最高だった。好きなことを語っている人の顔は輝いていて、聞いているだけで元気が出てくる。

最後の夜、チャーリーは病院の中庭にみんなを呼んだ。ハリーたちは部屋着を着て、サンダルを履いて、暗闇の中を歩いた。虫の鳴き声が響いている。

「よく来てくれたね、みんな！」

病院着の白いパジャマを着たチャーリーは笑顔で筋骨隆々の手を振った。右手には明かりを灯した杖を握っていて、顔が暗闇の中にぼーっと浮かんでいる。

「せっかくわざわざ遊びに来てくれたから、お礼をしたいと思って集まってもらったんだ」

そう言ってチャーリーはみんなを草むらに一列に並ばせた。

「何をするの？」

ジニーが眠そうな声で聞く。

「カウントダウンしよう。夜空を見上げててくれ。じゃあ5、4、3」

「2、1……」

皆で口を揃えてカウントする。

ゼロ、といったと同時にチャーリーは地面のある一点に向かって杖を振った。

シュルシュル……という音と共に花火が夜空に上がった。そして

色とりどりに変化して夜空を照らす。
ドラゴンの形になり、クィディッチのスニッチになり、ホグワーツの四寮の動物になり、次々と形を変える花火。
ハリーはシリウスの隣で夜空を見上げた。
「すごいよ！」
「綺麗だなハリー」
「うん！」
シリウスはハリーの背中に手を当てた。
「手持ちの花火もあるよ！」
チャーリーは皆に花火を配った。魔法界の花火は熱くなくて、そしてマグルのものより火が長持ちした。
ハリーたちは互いに火花を掛け合って遊んだ。
「きゃー、やめてちょうだい、フレッド！」
「母さん、僕はジョージだよ。全く子供の見分けもつかないのかい？」
「あら、ごめんなさい、ジョージ」
「ブッブー、ほんとは僕がフレッドさ！」
「母親を揶揄うのもいい加減になさい！」
モリーは特大の火花をフレッドに食らわせた。
「ウワー、ハリーやめろよ！」
「ふっふふーん」
「あ、待てよハリー！」
「お兄ちゃんにえいっ！」
「おいジニー！　後ろから攻撃するな！」
ハリーを追いかけるロンに対して後ろからジニーが水色の花火を当てた。
アーサーとシリウスは子供たちの様子を嬉しそうに眺めていた。
「いいですね、こんな夜も」
「ええ、子供たちが楽しそうにしているのを見るのは、親として何より幸せですよ」
アーサーは転がっていた木箱を引き寄せて座った。シリウスも隣に座る。

「一杯どうかな？」
アーサーは懐から酒を取り出した。
シリウスは酒を飲みながら、ハリーが走り回る姿を愛おしそうに見守った。
こうして、マレーシア旅行の最後の一晩は過ぎていった。

２０話　賢者の石

イースター休暇が終わったハリーはホグワーツに帰ってきた。
待っていたのはハーマイオニーのしごきだった。
薄々気が付いてはいたが、敢えて目を逸らしてきた辛い現実――学年末テストが２ヶ月後に迫っていた。
ハーマイオニーは復習予定表を作り上げ、ノートにはマーカーで色をつけ始めた。そしてロンとハリーにも自分と同じことをすることを強く勧めた。
「でも僕、もうノートは完璧だよ」
「新品として売り出すには完璧な状態ね。でもテスト対策としては最悪よ、最悪」
ハリーはマーカーで塗る以前に、魔法史のノートをとっていなかった。
「君は何でも知ってるじゃないか。どうして復習するんだよ」
「どうしてですって？　気は確か？　２年生に進級するには試験をパスしなけりゃいけないのよ。とっても大切な試験なのに、私としたことが……もう一月前から勉強を始めるべきだったわ」
「もし君が進級できなかったらみんな落第だ」
ロンはやれやれと首を振った。
しかしいつまでも休暇気分ではいられなかった。
先生方はハーマイオニーと同意見のようで、テストに向けて山のような宿題を出すようになった。
ハリーとロンは呻きながらハーマイオニーに勉強を教わった。
「いいこと？　ここ、絶対に出るわ。『ドラゴンの血の１２種類の利用法』。１から１２まで順番に覚えた方がいいわ」
「そんな難しいの知らないけど、僕たち本物を見たんだからいいじゃないか」
ロンがぼさいた。
「本物のドラゴンを見られるなんて素晴らしい体験じゃない！　あなた、もっと勉強の良さを知るべきだわ」

そんな中、ハーマイオニーが忍耐強く教えてくれたことで、ハリーはようやく魔法史を覚えられてきた手応えを感じて喜んだ。しかしハーマイオニーは容赦なかった。
「まだ先は長いわ。次は魔法薬学よ。ウィゲンウェルド薬の複雑な調合手順を頭に叩き込まきゃ」
「僕、もう無理だ」
「ハリーったら！　あなた、天才子役なんでしょう？　今までの芸能界での努力の日々は何のためにあったの？　そんな簡単に根を上げたら大勢のファンが悲しむわ！」
ハーマイオニーは熱血コーチさながらだった。ハリーは自分を奮い立たせた。
「そうだった！　僕、みんなの笑顔と希望のために頑張らないと！」
「その調子よ、ハリー！」
「よっ、選ばれし者！　僕、シリウスに押し売りされて、君の映画のリバイバル公演を見に行ったんだ。最高だったよ！」
「え、いつ行ったの？」
ハリーは驚いた。
「君が従兄弟の家に4日間ぐらい帰ったじゃないか。その時だよ」
「聞いてないよ、恥ずかしい！」
「あなたたち、無駄話は後よ！　口を動かす暇があればペンを動かしてちょうだい！」
ハーマイオニーが喝を入れた。
学年末テストまでの2ヶ月、ハリーは必死に勉強した。
学生時代にはジェームズに次いで2位だったという秀才シリウスに勉強のコツを手紙で聞いたが、「そうだな、学校のテストは簡単すぎて何もしなくても出来たよ」というパンチしたくなるような答えが返ってきた。
しかしそれではよくないと思ったのか、すぐにシリウスは両面鏡――マグル界でいうビデオ電話のような機能を持つ鏡を送ってくれた。
ハリーは分からない問題があった時にその鏡でシリウスを呼んで教わった。シリウスは何でも答えてくれて、ハーマイオニーも驚い

た。
「あなたの名付け親って素晴らしい家庭教師になれるわ。今は何をしてらっしゃるの？」
「アズカバンから出たばっかりだから、色んな人と会って挨拶して回ってるよ。何の仕事をするかは考え中みたい」
「そうね、あんなに理不尽な目にあったんだもの。ゆっくり休んで体を伸ばすべきだわ。そういえばロン、あなた新しいネズミは決めたの？」
「もうネズミはこりごりだよ。代わりに豆フクロウをシリウスから貰うことになったんだ」
ロンは手で大きさを示した。手にのるぐらいのサイズらしい。
「よかったね、ロン。フクロウなら手紙も運べるよ」
「うん、僕の家のフクロウは1匹しかいないからナイスなタイミングだったんだ、結果的には……。そろそろスキャバースにも飽きてた頃だし」
ロンはペットがおっさんだった悲しみを必死に乗り越えようとしていた。
ハリーはロンのグリフィンドール生らしい姿に感動した。

うだるような暑さの中、ホグワーツはテスト期間に突入した。
5年生と7年生は将来に関わる大切な試験を受けるので、他の学年に比べて目のギラつきが段違いだった。試験の不安でノイローゼになって、保健室にお世話になった生徒も居るらしい。ハリーは5年生になるのが怖かった。
上級生たちに場所を譲り、ハリーたちは談話室の片隅で最後の詰め込みをすることにした。
しかしハーマイオニーがお経を唱えるように延々とブツブツ呟き続けるせいで、ハリーは集中できなかった。
「もう僕たち充分がんばったよ。だって見てみろよ、フレッドとジョージなんて、イースター休暇が終わってから一度も教科書開いてないぜ」とロンが呑気に言ったので、ハリーも復習は諦めて天に祈る

ことにした。

筆記試験の大教室は混み合っていて、とても暑かった。カンニング防止の魔法がかけられた羽ペンが配られ、時間は前にある大きな砂時計で測られた。

ハリーは懸命に『メロフォルスの呪文をつくるための実験の詳細』やら『解錠呪文の欠点』を羊皮紙に書いた。

後者に関してハーマイオニーが綺麗にノートにまとめていたことは覚えているし、紙の右上に書かれていたことも覚えているのに、肝心の内容がぼんやりしていて思い出せない。

試験後にロンも同じことを言ったのでハリーは安心した。

それから実技試験も行われた。

フリットウィック先生が出した『パイナップルを机の端から端までタップダンスさせられるか』という問題で、ハリーのパイナップルは何故か陽気にコサックダンスを踊り始めた。ロンはサンバで、ネビルは平泳ぎだった。

マクゴナガル先生の試験は『ネズミを嗅ぎタバコ入れに変える』というものだったので、ロンは顔をしかめた。未だにネズミにはトラウマがあるらしい。

マクゴナガル先生は哀れそうにロンの肩を叩いて励ましていた。

スネイプ先生は、生徒たちが『忘れ薬』の作り方を思い出そうとしている時に、後ろに回ってジロジロと監視するので精神的にきた。

ハリーは「好きな子に見られてると思うと程よい緊張感になるよ」とネビルにアドバイスしたのだが、運悪くスネイプ先生に聞かれていた。スネイプ先生は蛆虫でも見るかのようにハリーを睨んだが、ハリーと目が合うと視線を逸らされた。ネビルは恐怖のあまり気絶した。

最後の魔法史の試験が終わり、ハリーたちは清々しい気持ちで生徒たちの群れに加わって中庭に出た。

試験の結果が出る1週間後まで、悠々と過ごせる素晴らしい時間が待っている。

「思ってたよりずーっと優しかったわ。ヘスフェスタス・ゴアによる魔法生物の反乱の鎮圧とか、初の女性大臣アーテミシア・ラフキンの功績なんて学ぶ必要なかったんだわ。マグルの知力を調査する委員会を立ち上げたのはオッタリン・ギャンボルだったわよね？」
「君がそう言うならそうなんじゃないか？　答え合わせしても気分が悪くなるだけだからやめてくれよ」
　ロンが止めてくれてハリーは助かった。
　3人は湖のほとりまで降りていき、ブナの木の木陰に寝転んだ。大イカが浅瀬で日向ぼっこしているのが見える。
「もう勉強とはおさらばだ」
　ロンは草の上に大の字になって、嬉しそうに息をついた。
「言っておきますけど、9月からは私たち2年生になるのよ。そのための予習を始めなくっちゃ」
「今日ぐらいはのんびりしてもバチは当たらないよ」
　ハリーはハーマイオニーをなだめた。
「僕、2年生になったらクイディッチしたいんだ」
「とってもいいと思うわ。あなたの飛行訓練の飛びっぷりは完璧だったもの」
「夏休み僕の家に来いよ。フレッドとジョージが喜んで教えてくれる」
「ほんと？　僕、行きたいよ！」
「うん、喜んで迎えるよ。あとさ、そういえば僕、妖女シスターズのライブのチケット手に入れたんだ！　よかったら一緒に来ないかい？」
「「妖女シスターズ？」」
　ハリーとハーマイオニーはハモった。
「おったまげー、知らないのかい君たち？　あの超有名ロックバンドだよ！　男8人組のイカれた奴らの！」
「私たちマグル育ちだから、ビートルズとかを聞いて育ってきたのよ。妖女シスターズの歌なんて聞いたことないわ」
「ジニーがそれを聞いたら、たぶん、人生の半分は損してるって言うよ。僕、君たちを引きずってでもライブに連れてくよ！」

ロンの気迫に押されて、ハリーとハーマイオニーは夏休みに妖女シスターズのライブに行くことになった。
「ふん、ウィーズリーが妖女シスターズのチケットを手に入れただって？　どこから見るんだい？　一番後ろのボロっちい席だろう？」
その時、今までの会話を聞いていたドラコ・マルフォイが近づいてきてロンを貶した。ロンは顔を真っ赤にした。
「真ん中の方の席だ。マルフォイこそ妖女シスターズのチケットなんて持ってないだろ。一緒に行ける友達もいないくせに！」
今度はドラコが怒る番だった。ドラコは斜め後ろでボーッと突っ立っているクラッブとゴイルの腕を掴んだ。
「僕には君よりずっと素晴らしい純血の友人がいる。僕は父上の権限で一番良い席を取らせることもできるんだからな！」
そう言ってドラコは肩を怒らせて離れていった。
「ムカつくなあの野郎。クラッブとゴイルなんてただの腰巾着としか思ってないくせに」
ロンはドラコの背中を睨んだ。
「たしかに大親友はいないかもしれないけど、でもドラコは孔雀飼ってるんだよ」
「その話、もう１０回ぐらい聞いたわ。あなた、そんなに孔雀が好きなの？」
ハーマイオニーは呆れて溜息をついた。

それから3日後、ホグワーツに驚くべき知らせが広がった。
なんと闇の魔術に対する防衛術教授のクィリナス・クィレル先生が逮捕されたというのだ。
ホグワーツの立入禁止の廊下に隠された『賢者の石』を盗もうとしたらしい。
グリフィンドールのテーブルでは、1年生のみんながハーマイオニーの新聞に群がっていた。
「クィレル先生が悪い人だったなんてショックだな……」
ネビルは落ち込んでいた。

「それより『賢者の石』の説明を見てよ！　『この石はいかなる金属をも黄金に変える力があり、飲めば不老不死になる命の水の源でもある』だってさ！　いいなー。クィレルが盗みたくなるのも分かるよ」
シェーマスは興奮気味に読み上げた。
「でも次の行を見て。フラメル夫婦は賢者の石を破壊したらしいわ」
ラベンダーが下の文を指差した。
『ニコラス・フラメル（６６５）はインタビューに対し「私たちはもう充分過ぎるほど生きました。新たなる冒険に踏み出す時が来たのです。妻と二人で話し合い、このようにすることを決めました」と答えた』と書かれている。
「６６５歳か……魔法使いってこんなに長生きするものなの？」
「ううん、フラメルは特別さ！　確か平均寿命は１５０歳ぐらいだよ」
ハリーの疑問に対してロンが答える。
その夜、ハリーは両面鏡でシリウスを呼び出した。
「どうしたハリー？」
「クィレル先生が逮捕された記事読んだ？」
「ああ、見たとも。私も君にその話をしようと思っていたところだ」
「わあよかった。あのね、フラメル夫婦が賢者の石を壊したってことは二人は死んじゃうってことだよね？」
「そうだな。ただ、身辺整理をするぐらいの時間は充分に残されている」
「でも、その後に死んじゃうんだよね？」
ハリーの頭に浮かんでいるのは両親の顔だった。シリウスは大きく息を吐いた。
「ハリー、フラメルさんのインタビューを読んだだろう？　死は全ての終わりではなく、新たなる冒険の始まりだ。人生の終焉を美しく飾るためにフラメル夫婦は賢者の石を壊すことを決めたんだよ」
ハリーにはまだよく分からなかった。
「それよりハリー、クィレル先生に関して言いたいことがある。今、どこにいる？」
「寝室だよ。誰もいない」

「ならよかった。これから言うことは衝撃的かもしれないがしっかり聞いてほしい」
「うん」
「ダンブルドアによると、クィレルはヴォルデモート卿に操られて賢者の石を盗もうとしたということだ」
ハリーは困惑した。
「でもヴォルデモートは倒されたのでしょう？　それにヴォルデモート卿なんて新聞に一文字も載ってなかったよ」
「証拠がなかったから、新聞には書かれなかった。ただダンブルドアが言うから確実だ。ハリー、脅すつもりはないが、ヴォルデモートは思わぬところからやってくる。ヴォルデモートは生きている。そのことを心の片隅にでも留めておいてほしい」
「わかった」
「もちろん私はダンブルドアに猛抗議しておいた。そんな危険人物を教師に雇わないでほしいとね。ハリー、もし変なことがあったらすぐに私に相談するんだよ」
「もちろんだよシリウス！」
「いい子だ」
シリウスはにっこり笑った。

学年末パーティーは最高に楽しかった。
ハリーはシリウス・ブラックの無実を暴いたことでウィゼンガモット特別功労賞を受賞した。
グリフィンドールが寮対抗杯を獲得したので、大広間はグリフィンドールカラーの赤と金で飾られていた。
7年ぶりにスリザリン以外の寮が優勝を掴み取ったので、皆は飲んで食べてのお祭り騒ぎだった。
それから試験の結果も発表された。ハリーもロンも良い成績だった。ハーマイオニーはもちろん学年トップだ。
ハリーたちはトランクに荷物を詰めて、ホグワーツ特急に乗り込んだ。

離れていくホグズミード駅を見ながら、ハリーはめまぐるしい一年を振り返った。今までで一番濃密な一年だった。
ハリーはこの一年で魔法界での大切な親友、そして家族を手に入れた。
それらは賢者の石が作り出す永遠の命や無限の純金よりずっと大切な物だった。
喋ったり笑ったりしているうちにホグワーツ特急はキングズ・クロス駅に到着した。
プラットホームに降りて、3人は別れの挨拶をした。
「夏休みに二人とも家に泊まりに来てよ。フクロウ便を送るよ」
「ありがとう。妖女シスターズのライブ、楽しみにしてるわ」
「うん、3人で遊ぼう」
人の波に押されながら、3人はマグルの世界へと進んでいった。
ハリーは変装用に帽子を被った。
改札口を出ると、ロンの両親とシリウスが並んで立っていた。シリウスは黒のライダースジャケットにスキニーパンツを履いていて、モデルみたいにカッコよかった。
「シリウス!」
「おかえり、ハリー」
2人は固くハグした。
「こんにちはハリー。忙しい一年だった?」
モリーが声をかけた。
「はい、とても。でも充実していて楽しかったです」
「よかったわ。また家に遊びに来てちょうだいね」
「うん、来てね」
ロンの妹のジニーが可愛く言った。
「そろそろ行こうか、ハリー」
「うん。じゃあまたね」
「またね、ハリー! また夏休み遊ぼうね!」
「うん!」
シリウスはオートバイで来ていた。

ハリーはシリウスの後ろに座って、腰を掴んだ。
「よし、じゃあ飛ばすからしっかり掴まってな」
「ヘルメットは付けなくていいの？」
「あんな鉄一枚に何の意味があるんだ？」
シリウスはエンジンをふかした。ハリーは強くシリウスの腰に手を回した。
オートバイは猛スピードで走り出して、晴れ渡るロンドンの青空に飛び立った。

秘密の部屋

1話　夏休み

ハリーは今までで一番楽しい夏休みを過ごしていた。

夏休み最初に向かったのはシリウスの新家だ。

プリベット通りの端に建てられた家はシンプルでさっぱりしていた。マグル風の形だが、黒と白と赤のレンガで出来ているところはどこか魔法使いらしさがある。

家は2階建てで、リビング、ダイニング、キッチンの他に部屋が4つある。

壁にはハリーの写真や魔法で動くポスターがたくさん貼られていた。

2階に用意されたハリーの部屋にはベッドと勉強机が運び込まれ、ドアには〝ハリー〟と書かれた看板が打ち付けられている。

ハリーはとても嬉しかった。

「僕、夏休みの間ずっとここに居たいよ！」

「私もできることなら君とずっと一緒に暮らしたいよ。ただ、11歳まで君を育ててくれたのはダーズリーの方々だ。だから初めの4週間だけはダーズリー家で寝泊まりしてほしい」

「そうだよね。うん、わかった。でも日中はこっちに来てもいい？」

「もちろんだ」

「わーい！」

ハリーは喜んでソファーの上で跳ねた。

それからハリーは子役の仕事をいくつかこなした。寮制の学校に行っているということになっているので、学校生活について聞かれた時には色々とでっち上げて話した。

やはり子役の仕事は格段に減っていた。でもレッスンスクールで久々に演技の稽古をするのは楽しかった。

ダーズリー家と再会できたのは、ハリーとしては嬉しかったのだが、あちら側は1ミリもそう思っていなかった。

ダドリーは1年前よりさらに太って、おバカになっていた。ハリーとは口をきく気もないらしい。
まあこんな関係も悪くない、とハリーは自分に思い込ませた。

溜まっていた子役の仕事とバーノンのドリル会社の客（ゴルフが好きなメイソン夫妻）の接待を終えたハリーはシリウスの家に引っ越した。シリウスと一緒に暮らせるのはこの上ない喜びだった。
ハリーはソファーに深く腰掛けてのんびりしながら、両親が赤ん坊の自分を抱いている写真をポケットから取り出して額縁に入れた。
両親はずっと変わらず幸せそうに微笑んで、時々カメラに向かって手を振っている。
もしヴォルデモート卿が居なければ、ピーター・ペティグリューが裏切らなければ、ハリーは両親と暮らせたはずだった。
「どうしたんだ？」
リビングに戻ってきたシリウスはジェームズとリリーの写真を見て、懐かしそうに目を細めた。
「魔法界の写真は動くからいいね。話せたらもっといいのに」
「そうだな……よし、これは一番目立つ棚に飾ろう」
シリウスは写真をリビングの真ん中の棚の上に置いた。
ハリーは嬉しそうに頷いた。

＊

夏休み後半、ハリーはロンの家を訪ねた。
オッタリー・セント・キャッチポール村に佇むロンの家は、豚小屋を改造したような見た目だった。ピサの斜塔のように斜めに立っていて、煙突も変な方向に飛び出している。庭には魔法植物がボウボウに生えていて、古びた長靴が落ちている。
でもハリーはロンの家が大好きだった。古いけれどウィーズリー家の暖かさを感じられるからだ。
怪我が治ったチャーリーも一時的に帰宅していて、ハリーに沢山ド

ラゴンの話をしてくれた。
ハリーは庭小人駆除など様々な珍しい体験が出来た。
途中からハーマイオニーも合流して、『隠れ穴』はより賑やかになった。ハリーとロンはハーマイオニーのお風呂を覗く誘惑を必死に振り切らなければいけなかった。
妖女シスターズのライブに備えて、ハリーとハーマイオニーはウィーズリー兄弟からメンバーの名前、有名な歌、掛け声など色々と教わった。
知れば知るほど、ハリーはライブが楽しみになってきた。ハーマイオニーはロックが好きではないらしく初めは渋い顔をしていたが、少しは穏やかな表情になったような気がする。

妖女シスターズのライブの前日には、シリウスも『隠れ穴』にやってきた。手に紙袋を持っている。
「妖女シスターズのTシャツを手に入れたぞ」
シリウスは黒地に派手なプリントがされたTシャツを一人一人に配った。みんなのテンションは最高潮に達した。
「おったまげー最高だよ!」
「ありがとうシリウス!」
「あらまあ、わざわざありがとうございます。ほら子供達、ちゃんとお礼言うのよ」
「「ありがとう!」」
フレッドとジョージとジニーとロンが揃って言った。
「明日はどうやって行くことになっているんだ?」
シリウスは聞いた。
「明日はキングズ・クロス駅6と7分の2番線から出る電車に乗るのよ。ライブは午後2時からだから、11時には家を出ましょうね。だから子供達は早寝するのよ」
モリーは言いつけた。
その夜、ハリーはワクワクしてなかなか寝付けなかった。ハリーは暗闇の中で部屋を目だけ動かして見回した。

ロンの部屋は狭くて古い匂いがするし、天井裏でナールおばけがゴソゴソ動いている音が聞こえるけれど、漫画や贔屓のクィディッチチームのポスターがどっさりあった。こんな素敵な部屋で眠れるのは幸せなことだとハリーは思った。

翌日、6と7分の2番線のホームはライブに向かう魔法使いや魔女たちでごった返していた。みんな何かしらのグッズを身につけて、浮き足立った雰囲気でわいわい話している。

電車がホームに入ると歓声が上がった。

車体に稲妻のようなフォントで『Ｔｈｅ　Ｗｅｉｒｄ　Ｓｉｓｔｅｒｓ』と描かれていた。

混み合う車内で何とか席を確保してハリーたちは会場までやってきた。

森の奥深くに石造りの円柱状の建物が聳え立っている。壁にはカラースプレーでカラフルに落書きされていた。

「あそこが会場なのか？」

ジョージが呟いた。

「そうだよ。それにしてもあのドラゴンの絵、大迫力だなあ」

チャーリーは壁の絵に見惚れていた。

「あれは妖女シスターズ専用の会場なの？」

ハーマイオニーは疑わしそうに建物を眺めていた。

優等生のハーマイオニーはロックバンドと縁のない生活を送ってきたので、戸惑っていた。

「そうだよ、あれは妖女シスターズがデザインしたんだ。あのスニッチが描かれた壁の前でジャンプして写真を撮るのがお決まりさ」

フレッドが解説した。

たしかに壁の前には行列が出来ていて、写真屋が写真を撮っていた。

「せっかくだから撮りに行こうよ」

ビルの声にみんな賛成した。

会場に行くまでの道にはグッズを売る屋台や食べ物屋が立ち並ん

でいて、ちょっとしたお祭り状態だった。
ビルは妖女シスターズがプロデュースしたピアスを買った。
ハリーは妖女シスターズのメンバーがプリントされたスノーボールを買って、ロンとハーマイオニーにプレゼントした。
「これ、今までのお礼だよ。ハーマイオニーはテスト対策してくれたし、ロンは妖女シスターズのコンサートに連れてきてくれたから！」
２人とも喜んで受け取ってくれた。
馬鹿騒ぎしている若者の集団やちびっ子魔女軍団とすれ違い、写真を撮り、ハリー達はとうとう会場に入った。
円形のホールに椅子が並べられて、中央に大きな舞台があった。席は５階ぐらいまであって、ハリーたちは２階の真ん中ぐらいの席だった。
「まだ時間があるわね」
モリーが時間を確認して言う。
「よっしゃ、俺たちやりたい事があったんだ！」
フレッドとジョージはあっという間に走り出して消えてしまった。
モリーはやれやれと溜息をついた。
「全くあの２人ときたら……」
「ママ、わたし、トイレ行きたい」
ジニーがモリーの服の袖を引っ張って小声で言った。
「まあジニー！　だから事前に行っておきなさいって言ったじゃない……」
「私がハリーたちを見るよ」
シリウスが胸を叩く。
「ありがとうシリウス。なら私はジニーをお手洗いに連れて行くわ。ビルとチャーリーは……」
「僕達は適当にぶらぶらするよ」
ビルが微笑んだ。
「俺達ならフレッドとジョージより信用があるだろ？」
チャーリーとビルには大家族の次男と長男としての落ち着きがあった。

ハリーはロン、ハーマイオニー、シリウスと共に外に出た。
「フレッドとジョージがやりたいことって何なのかしら？」
「きっと小遣い稼ぎだよ。試作品の悪戯グッズを売って金儲けしようってずっと言ってるんだ」
「すごいなあ2人とも」
「あなたは3歳の頃から稼いでるじゃない」
「ペチュニア叔母さんのおかげだよ……あ、あのアイス美味しそう！」
「おい、あっちの焼肉も美味しそうだよ！」
「どっちも美味しそうだわ。でも2つとも並んでる時間はないわね」
「なら、私が肉を買うから、君たちはアイスに並べばいい」
シリウスは微笑んだ。
「わーシリウスありがとう！」
ハリーたちはアイスの列に並んだ。
「おや楽しそうなこと」
談笑していると、聞き覚えのある低い声が聞こえてきた。
振り返るとマルフォイがクラッブ、ゴイル、そして屋敷しもべ妖精と共に立っていた。
クラッブとゴイルはアイスクリーム、パスタスープ、糖蜜パイ、かぼちゃジュース、チョコレートバーに夢中で食らいついている。
「黙れマルフォイ」
「父上から聞いたんだけど、ウィーズリー、お前の家は豚小屋らしいじゃないか。君達、そこに遊びに行っただって？　僕なら反吐が出るよ」
結局、ドラコは羨ましがって嫉妬しているだけじゃないかとハリーは感じた。
「ロンの家は最高だったよ。君の父さんがそう感じてないとしてもね。それより、その屋敷しもべ妖精はどうして付いてきてるの？」
「ドビーでございます。ドビーめは坊っちゃまの付き添いでいらっしゃっているのでございます！」
坊っちゃま、という言葉でロンが吹き出した。マルフォイは顔をしかめる。

「何がおかしいんだ？」
「私たちあなたに構ってる暇ないわ。突っかかりたいだけならどっか行ってちょうだい」
「マグル生まれが僕に話しかけないでくれないか、グレンジャー。ウィーズリー、君もだ。血を裏切る者め」
マルフォイはそのまま立ち去った。
「羨ましがってるだけだから間に受けなくて大丈夫。それより、アイスの味は何にしたい？」
ハリーは何事もなかったかのように話を続けた。
「なんでそんなにスルーできるんだよ？」
「うーん、たぶん僕がドラコみたいな人達だらけの場所で過ごしてきたからかな」
ハリーはにっこり笑顔で答えた。
ロンとハーマイオニーの顔は少し引きつった。

午後1時59分、会場の明かりが一斉に消え、会場のざわめきは一瞬にして無くなり静まり返った。
「今から凄いことが起こるぞ」という雰囲気が辺りを満たしている。
そして期待が最大まで高まった瞬間、スポットライトがパッと輝いた。
妖女シスターズのメンバーがヒッポグリフに乗って空を駆け回り、動きに合わせてライトが動く。
大音量で曲がかかり、ハリーはノリノリで杖を振った。
シリウスがハリーの杖に手をかけて、赤色の光を灯した。
「ありがとう！」
「なんてことないさ。それよりあのドレッドヘアのメンバーに注目してみろ。アクロバットで有名な奴だ」
メンバー達は自由自在に空を飛び回った。まるで縄なしのサーカスのようだった。
突然、姿くらましで客席に現れたかと思えば天井付近に現れ、観客達は大興奮だ。

魔法で水の球が浮かび上がって弾けたり、炎がドラゴンの形になって噴射されたり、マグルでは到底できない大迫力のパフォーマンスの数々が繰り広げられた。

「♪Ｃａｎ　Ｙｏｕ　Ｄａｎｃｅ　Ｌｉｋｅ　ａ　Ｈｉｐｐｏｇｒｉｆｆ？」

ボーカルが激しく歌い上げ、マイクを観客に向ける。

「♪ＭＡＭＡＭＡＭＡＭＡＭＡＭＡＭＡＭＡＭＡ！」

ハリー達はノリノリでジャンプしながら歌った。

一曲目、二曲目、三曲目……ライブは終盤に行くにつれてますます盛り上がった。

アップテンポの曲からしみじみする歌まであって、その度に観客達は杖の色を変えて振った。観客みんなが肩を組んで体を揺らしたりもした。

興奮のうちにライブは終わった。

ハリーはこのライブが衝撃すぎて、終わってもしばらく動けなかった。

ハリーはすっかり妖女シスターズの虜になった。ハーマイオニーも楽しそうに笑っている。

帰りの電車は行きよりもさらに熱気と楽しさで溢れていた。

2話　屋敷しもべ妖精

それからハリーは隠れ穴からプリベット通りに戻った――といってもダーズリー家ではなく、シリウスの家だ。
２人とももっとお互いと一緒に居る時間を望んでいた。
ロンはちょっと寂しそうだったが、無理に引き止めはしないでくれた。
ある日の夜、ハリーとシリウスは一緒にパスタを作って食べていた。
シリウスの魔法は見事で、一瞬で湯は沸き、パスタは茹で上がった。シリウスもハリーもトマト系の味付けが好きだったので、ミートソースをかけて食べることにした。
「魔法使いってみんな料理がうまいの？　シリウスのお母さんは上手かった？」
ハリーはパスタをフォークで丸めながら何気なく聞いた。シリウスは顔をしかめて、苦々しく言った。
「母は料理をしなかった。すべて屋敷しもべ妖精が作っていたんだ」
「シリウスの家、屋敷しもべ妖精がいたの？」
「ああ。偏屈で嫌味ったらしいひねくれた奴だ……母には忠実だったがね」
「その妖精、今も生きてるの？」
「生きていても二度とお会いしたくない相手だな」
「そっか」
シリウスは母とその屋敷しもべ妖精が大嫌いなのかもしれないとハリーは思った。
「……私にとっては、君のお祖父さんとお祖母さんの方がよっぽど家族のようだった。家出したんだ。１６の時に。ポッター家の人たちは本当によくしてくれた」
シリウスは邪険な口調になったのを上塗りしようと思ったのか、明るく言った。
「よかった。それまで大変だったんだね」

ハリーはにっこり言った。シリウスは微かに笑った。
「……そうだ、そういえばテレビを買うことにしたんだ。調べてみると、魔法がある環境でもビデオなら見られるらしい」
「ほんとうに？　やったー！」
ハリーは両手を上げて喜んだ。シリウスは幸せそうに微笑んだ。
その時、窓をコツコツと叩く音が聞こえてきた。
振り返ると、灰色のフクロウが窓のふちに止まっている。
それはホグワーツからの手紙で、新学期に新しく必要な教科書のリストが入っていた。
「基本呪文集2学年用、泣き妖怪バンシーとのナウな休日、グールお化けとのクールな散策、鬼婆とのオツな休暇、トロールとのとろい旅……このリストの教科書、呪文集以外、全部ギルデロイ・ロックハートの本だよ！」
「ロックハートだと？」
シリウスは教科書リストをひったくった。そしてずらりと並ぶギルデロイ・ロックハートの名前を見て苦笑する。
「この方と知り合いなの？」
「4年下の後輩だった……ダンブルドアに変な人を教師に雇わないで欲しいとお願いしたはずなんだがな。ああ今のは聞かなかったことにしてくれ」
「来年の先生も変な人なのかな？」
クィレルが逮捕された為、来年からは新しい先生が入ってくることになっている。
「あいつがこんなにたくさん本を出すようになるとは世も末だな。どんな内容かは知らないが、ロックハートの本を教科書にするとは、次の先生は大層面白いユーモアの持ち主だ」
「でも後頭部にヴォルデモートが居たりしないよね？」
「もし2年連続でそんなことがあったら、私は君をホグワーツから奪い返すよ」
「オッケー。ちゃんと迎えにきてね」
「勿論だとも」

ハリーとシリウスは約束した。
「あ、あとロンとハーマイオニーからも手紙が来てる……今度、ダイアゴン横丁に一緒に買い物に行かないかだって！　ねえシリウス、一緒に行ってもいい？」
「素晴らしいじゃないか！」
シリウスは嬉しそうに言った。

＊

当日、ハリーはシリウスの家から煙突飛行でダイアゴン横丁に向かうことになった。
「じゃあ、僕から行くよ」
ハリーは煙突飛行粉をひとつまみ取り、暖炉の前に進み出た。高く燃え上がるエメラルド・グリーンの炎の中に入り、はっきりと「ダイアゴン横丁！」と発音すると、体がグルグル回転し始めるのを感じた。前にも体験した気持ち悪い感覚だ。
しかし突然、ハリーは何かに手を取られ、引っ張られるのを感じた。必死に引き離そうとするものの、それは凄まじい力で手を握ってくる。
「だめ……やめて……」
暴風の中、ハリーは何とか声を絞り出した。
「わたくしめはハリー・ポッター様とお話がしたいのでございます！」
ズドン、という衝撃とともにハリーは暖炉に着いた。しかしそこはダイアゴン横丁ではなかった。
石の暖炉から足を踏み出すと、そこは怪しい魔法道具を売っている店のようだった。
血に染まったトランプ、萎びた手、銀色の仮面がショーウィンドウに飾られている。
「ドビーめはハリー・ポッター様にお目にかかりたかったのでございます……とっても光栄です……」
足元を見ると、見覚えのある屋敷しもべ妖精がちょこんと立ってい

た。
「僕、あなたと一度会ったことがあるよ。マルフォイ家の屋敷しもべ妖精だよね？」
「ハリー・ポッターがドビーめを覚えていらっしゃる……なんたる光栄……ハリー・ポッター様、こちらでございます。ハリー・ポッターはこの店から出るべきでございます」
「でも君がここに連れてきたんだよね？」
ドビーは骨ばった手でハリーの腕を強く握りしめて、店のドアを開けて通りに出た。
向かいの店のショーウィンドウには縮んだ生首が飾られ、他にも怪しい店ばかりが軒を連ねていた。
店の入り口の薄暗がりの中で、みすぼらしい身なりの魔法使いがハリーを見てコソコソ話している。
お世辞にも治安が良いとは言えない場所だった。
「ドビー、どうしてこんなところに僕を連れてきたの？」
「……ドビーめはいったい何から話してよいやら……複雑でございまして……ドビーめはもっと早くあなた様にお目にかかりたかったでございます。しかしお坊ちゃまがコンサートのチケットを……ドビーは悪い子！　ドビーは悪い子！」
ドビーは突然、石の壁に頭を打ち付け始めた。ハリーは薬でもやってるんじゃないかと心配になった。
「やめてドビー。どうしたの？」
「ドビーめは自分で自分にお仕置きをしなければならないのです。自分の家族の悪口を言いかけたのでございます」
「マルフォイ家の？」
「お願いでございます、どうか、マルフォイ様にこのことをお話ししないでください。ドビーめはあなた様のことを思って家を抜け出したのでございます……ドビーは悪い子！　ドビーは悪い子！」
ドビーは薬物中毒の人そのものだとハリーは思った。マルフォイ家もこんな妖精と一緒に暮らしているとは大変そうだ。精神病院に入院させるべきだとハリーは感じた。

「君がしたのは誘拐と同じことだよ。マルフォイ家の誰かに唆されてやったのか知らないけど、早く元の場所に返してくれない？」
「いいえ、ドビーめはあなた様に警告しに来たのでございます。ハリー・ポッターはホグワーツに戻ってはなりません」
「君に僕の行動を制限する権限はないよ」
「ハリー・ポッターは安全な場所にいなければいけません。あなた様は偉大なお優しい方です。失われるべきではない存在でございます。あなた様がホグワーツに戻れば、死ぬほど危険でございます」
「また後頭部にヴォルデモートがいたりするの？」
「ああ、その名前をおっしゃらないで！　しかし――ええ、非常に危険でございます」
「分かったよ、シリウスに相談するよ。だから早く元の場所に戻してくれない？」
　その時、さっき出てきた店のドアが開く音がした。ドビーは目を見開いて口を押さえ、焦り始めた。
「絶対に、絶対にハリー・ポッターはホグワーツに行ってはなりません！」
　ドビーは最後にキーキー声で警告して、バチリという音とともに姿を消した。
　ハリーは驚きのあまり突っ立った。
　知らない土地に一人ぼっちで置いて行かれてしまった。
「おや、ハリー・ポッターじゃないか」
　ドラコ・マルフォイの声だった。隣には父親と思わしき男が立っている。
　いかにも貴族という感じの出で立ちだ。
「久しぶりだね」
　ハリーはにっこり言った。
「ドラコ、ご学友か？　――これはこれは。ハリー・ポッター君じゃないか」
　マルフォイ氏は灰色の目でハリーを見下ろした。
「こんにちは。いつもお世話になってます」

「さよう。闇の帝王を打ち倒した英雄……去年も素晴らしい活躍をしたそうで。アズカバンの囚人の無罪を証明したとか？」
　マルフォイは八百屋の野菜を品定めするようにハリーを見ていた。ドラコは父親とハリーに交互に視線を移している。
「ありがとうございます」
　その時、駆けてくる音が聞こえた。
「ハリー、そんなところで何をしてる！」
　シリウスだった。シリウスはハリーの肩を掴み、マルフォイ氏から遠ざけた。
「ルシウス、私の息子に手を出そうものなら分かってるな？」
　シリウスはルシウスに食ってかかりそうな勢いだった。ルシウスは薄笑いを浮かべた。
「その子はここをウロついていただけだ。しかし……その有り余るエネルギーを見るに、アズカバン生活はさぞかし快適だったようで何よりだ」
「……覚えてろ。お前が死喰い人時代にしたことを恨んでる奴は大勢いるぞ」
　二人の間に見えない火花が散った。シリウスはルシウスより少し背が高かった。見下ろされるような形になり、ルシウスは舌打ちした。
「生憎、私には他にも大事な要件があるのだよ。アズカバン帰りとは立場が違うものでな。ドラコ、行くぞ！」
　ドラコはハリーの方を睨みつけ、父親の後をついていった。
　シリウスはルシウスの後ろ姿を鋭く睨みつけていたが、ふとハリーの方に向き直った。
「なんでこんな所に来たんだ、ハリー？」
「あのね……屋敷しもべ妖精に手を引っ張られたんだ」
「なにぃ？　一体どこのどいつだ。まさかクリーチャーじゃないな？」
「クリーチャーじゃないよ。ねえ、クリーチャーって誰？」
「ああ、気にするな。それよりどいつだ？　ハリーをノクターン横丁

に誘拐したのは」
　シリウスは殺気立っていた。
「誰なのかは忘れちゃったけど、僕にホグワーツに行って欲しくないみたいだった。危険があるんだって」
「危険？」
「うん、でもただの嫌がらせだよね、きっと」
「ハリー、本当にどの家の屋敷しもべ妖精なのか知らないのか？」
　シリウスは立ち止まり、ハリーの顔を正面から見つめた。
　ハリーは少しためらってから口を開いた。
「あのね、秘密にしてほしいって言われたんだけど……マルフォイ家の屋敷しもべ妖精なんだ。ドビーって名前の。お願い、特にマルフォイ家には言わないで」
　ハリーは口が軽いわけではないが、誘拐まがいの事をされた相手の言う事を全部守る必要は無いと思って言った。
「でもね、マルフォイ家の人にそそのかされて来たんじゃないと思うんだ。むしろ、マルフォイ家の人にバレたら咎められるって思ってるんじゃないかな」
　シリウスは黙り込んでいた。
「いいか、ハリー。ほんの11年前まで、魔法界ではヴォルデモート卿が勢力を振るっていたんだ。君はまだ赤ん坊だったから分からないだろうが、暴力、騙し合い……あらゆる悪行が横行していた。そしてヴォルデモートの腹心と言われていた人の中には、魔法省の追及を逃れて今も普通に暮らしている人が大勢いる。そういう奴らは息を潜め、ヴォルデモートが復活する機会を窺っているんだ。だから気をつけろ、ハリー」
「ごめん、僕、あんまり実感が湧かなくて」
　ハリーは有名であることには慣れていたが、ヴォルデモートを倒したという実感がなかった。
「普段から両面鏡を持ち歩いてくれ。少しでも変なことがあれば、すぐに私を呼び出すんだ。君まで失いたくはない」
「分かった」

ハリーは真剣な顔で頷いた。

しばらく歩くと、懐かしのダイアゴン横丁が見えてきた。

「ハリー！」

ハーマイオニーがグリンゴッツの白い階段の上に立っていた。

「ハーマイオニー！　久しぶり！」

ハリーは階段を駆け上がり、ハーマイオニーは階段を駆け下りたので、2人は真ん中で一緒になった。

「ああ、また会えて嬉しいわ。私、あなたが出てるテレビ、ほとんどぜーんぶ見たわ。元気にしてた？」

「うん、今はシリウスの家に住んでるんだ」

「それって素晴らしいことだわ！　ロンとは会った？」

「ううん、まだ」

「あそこにいるのはウィーズリーさんたちじゃないか？」

シリウスが指差した先には、赤毛一家がいた。

「ロン！」

「ハリー！　それにハーマイオニー！」

「あらまあ久しぶりね、ハリー、ハーマイオニー」

「こんにちは、モリーおばさん」

「もうお金は下ろしたかしら？」

シリウスがドラゴン皮の袋を掲げた。

「事前にグリンゴッツに用があったから、その時に取っておいたんだ」

「そう。じゃあ私たちは金庫に行ってくるわ……アーサー？」

アーサーはハーマイオニーのマグルの両親に夢中になっていた。マグルの2人はその積極性に引き気味で、むしろハリーと話したそうにしていた。

「ごめんなさいねえ、まったく呆れるほどマグル好きで……」

「気にしないでください。私のパパとママも魔法に夢中なんです」

ハーマイオニーは笑顔で答えた。

ウィーズリー一家が金庫から帰ってきたところで、みんなは別行動をとることになった。

「私はリーマスと会う約束をしてるから、漏れ鍋に行ってくるよ」
「わかった。じゃあ僕はロンとハーマイオニーといるね」
「1時間後にフローリシュ・アンド・ブロッツ書店で落ち合いましょう。『夜の闇横丁』には絶対に入ってはいけませんよ」
ずらかろうとするフレッドとジョージに向かってモリーが叫んだ。
それからハリーはロン、ハーマイオニーと共にアイスクリームを買って食べ歩きしながら、横丁を巡り歩いた。
マグル界にいる時ほど人目を気にしなくていいのでハリーは嬉しかった。
「見てよあれ、カッコいい！　チャドリー・キャノンズのユニフォームだ！」
ロンは高級クィディッチ用具店のウィンドウに飾られたユニフォームの目の前から動かなくなった。
「それって最弱チームなのよね？」
ハーマイオニーは言い放った。ロンは怒ってハーマイオニーを睨みつける。
「たまたま調子がふるわないだけさ」
「たった14年間、ずっと調子が悪いだけだもんね」
ハリーも茶化した。ロンは口を尖らせた。
「君たちにもチャドリー・キャノンズの試合を見に行かせてあげたいよ。絶対に惚れるはずさ。でも、もしもファンになっても、僕に誘われて好きになったってことは覚えとけよ」
ロンは同担拒否のアイドルファンのような考え方らしい。
それから新しい羊皮紙とインクを買い、いたずら専門店でフレッドとジョージに会い、雑貨屋では『権力を手にした監督生たち』という本を読み耽るパーシーに遭遇した。
ロンは「そりゃパーシーは野心家さ……将来の夢は魔法大臣なんだ」と2人に向かって低い声で呟いた。
それから約束の時間になって、フローリッシュ・アンド・ブロッツ書店に行くと、驚くべきことに大混雑だった。
ハリーを含む客たちは、入り口付近で押し合いへし合いしながら中

に入ろうとしている。
「すごいわ、本物の彼に会えるわ！」
その時、ハーマイオニーが黄色い声をあげて上階の窓の大きな横断幕を指差した。
『サイン会
ギルデロイ・ロックハート
自伝「私はマジックだ」
本日午後１２時３０分～４時３０分』
ハーマイオニーは彼にお熱なのか。
ハリーはハーマイオニーの新しい一面を発見した。

3話　ロックハートとルーナ

ギルデロイ・ロックハートのサイン会で混み合う店内で、ハリー達はなんとかウィーズリー一家とグレンジャー夫妻、シリウスとリーマスに合流した。

シリウスは紙に包まれた長い何かを持っていたが、それについて質問する前にモリーが遮った。

「ああ、よかった、来たのね」

モリーは髪がうまくセットされているか、気が気でない様子だった。

「もうすぐギルデロイに会えるわ……」

ギルデロイ・ロックハートは魔法使いの三角帽を斜めにして被り、中央の机に座ってサインを書いていた。

周りには自身の大きな写真がいくつも貼られていて、いっせいにウインクし、白い歯を輝かせている。

そして小男が大きな古型の黒いカメラでロックハートを撮影している。フラッシュを焚くたびに紫の煙が上がった。

これが魔法界の有名人か。マグル界とはまた違った雰囲気があるが、素直にカッコいいとハリーは思った。

魔法界は全体的にマグル界より古風で神秘的だが、ロックハートにもその資質が感じられた。

「そこ、どいて。日刊預言者新聞に載せるんだから」

カメラマンは邪魔そうにロンを押した。

その時、ロックハートが顔を上げた。ロックハートとハリーの目が合った。

「もしや、ハリー・ポッターかな？」

ロックハートは叫び、両手を広げた。人垣がさっと割れて道を作った。

ハリーは少し驚きながらも、皆が望んでいるようだったので、笑顔でロックハートの元に向かった。

ハリーとロックハートは笑顔で握手して、その様子をカメラマンが

何枚も写真に撮ったので、ウィーズリー一家の頭上には紫色の雲が出来た。
「素晴らしい！　私と君が一緒に写れば、一面大見出し間違いなしですよ！」
　ロックハートは上機嫌にハリーの肩に腕を回した。ぐいぐいくるんだなぁと思いながら、ハリーは完璧な笑顔でロックハートを見つめた。
「みなさん！　なんと記念すべき瞬間でしょう！　ハリー君、君はどうしてここフローリッシュ・アンド・ブロッツ書店に足を踏み入れたのかな？」
　ロックハートは歯を輝かせ、ハリーに向かってウインクした。
「それは、ギルデロイ・ロックハートさんの本を買うためです」
　ハリーは答えた。
「そう、私の本を買うために！　ではなぜ本を買う必要があったのかな？」
　ロックハートの声がさらに高くなった。
「ホグワーツの教科書に指定されていたからです」
　ハリーは興味津々にロックハートを見つめながら答えた。
「その通り！　皆様に発表致しましょう！　わたくしロックハートは、この九月から、ホグワーツ魔法魔術学校で『闇の魔術に対する防衛術』の担当教授職を務めさせていただくことになりました！」
　人々から歓声と拍手喝采が起きた。
　ハリーはビックリしたが、それからにっこり笑って大きく拍手した。
「では、ハリー君には私の著書を全てプレゼント致しましょう！」
「わー、ありがとうございます！」
　ハリーがギルデロイ・ロックハートの存在を知ったのはつい最近のことだったが、ハリーは長年のファンであったかのように喜んで本を受け取った。
　それが嬉しかったのかロックハートはハリーに、自らの武勇伝や野望を長々と語り始めた。

ハリーは「へえー！」とか「すごいですね！」とか言いながら聞いていた。段々と音ゲーをやっているような感覚になって、ハリーはリズムよく相槌を打つのを楽しんだ。
ロックハートの密かな野望が、自家製のトリートメントを世界中で売ることだということまでわかったところで、ハリーはようやく解放されて、シリウスの元に走った。隣にはリーマス・ルーピンもいた。
「ハリー、なんと言えばいいのか……君は偉いよ」
ルーピンはハリーに向かって微笑んだ。
ハリーは首を傾げた。
「嫌な相手にはそういう態度を取っていいんだぞ。ジェームズはいつもそうだった」
「嫌じゃないよ。数々の冒険をしてきた英雄だもん。雪男を倒したりとかカッコいいよ。あと僕、相槌を打つのが趣味なんだ」
ハリーはさっきの長い会話の中で得た知識を使って言った。本人がいる書店の中で、悪口を言うのは良くない気がした。
それに実際、ハリーはロックハートのことが好きだった。
「ハリー、なんだかすごくテレビで見てる時みたいだったわ！」
ハーマイオニーが興奮気味に言った。
「いい気持ちだったろうねぇ、ポッター」
階段の上から声が聞こえてきた。
ドラコ・マルフォイが二階から降りてきていた。
「有名人のハリー・ポッター様は、ちょっと書店に行っただけで一面かい？」
「別にそういうわけじゃないよ」
ハリーはさっぱりと言った。
「君はさっきも見たな。ルシウスの息子だな？」
シリウスが凄みを効かせながら前に出てきた。ドラコはたじろいだが、父親そっくりに眉をちょっとひそめた。
「可哀想に。君は親無し子だから、アズカバン帰りに同情されてるわけだ」
「君の父親は君に言って良いことと悪いことの分別を教えなかったら

しいな」
　シリウスがドラコに近づいたところで、別の声が後ろから聞こえてきた。
「おやおや、私の息子が何かしたとでも？」
　ルシウスだった。それと同時にウィーズリー一家もやってきた。
「ルシウス、お前がこの１２年間息子に何を教育したのかは知らないが……アズカバンのお仲間たちはお前が罪を逃れたことを大層恨んでいたぞ。そうだ、お前の過去の所業は息子に教えているのか？」
　ルシウスのこめかみの血管が浮き上がった。しかしシリウスはルシウスから目を離さなかった。
「２人とも……いったいどうした？」
　アーサーが恐る恐る声をかけた。ルシウスの目がアーサーの方に、そしてその隣にいるグレンジャー夫妻の方に移った。
「ウィーズリー……、こんな連中と付き合ってるとは。君の家族はもう落ちるところまで落ちたと思っていたんですがねぇ」
　次の瞬間、アーサーはルシウスに飛びかかり、本棚に背中を叩きつけた。シリウスは杖を取り出し、ルシウスを吹き飛ばした。
「いけいけ、パパ！」
　フレッドとジョージが拳を上げて応援した。
「だめよ、あなた、やめて！　ギルデロイの前なのよ！」
　モリーは甲高い悲鳴をあげた。
「どうしたのですか、はしたない！」
　その時、バーンと光が弾けた。
「あ……やっほー」
　ネビル・ロングボトムが気まずそうにハリーとロンとハーマイオニーに向かって手を振った。隣にはハゲタカの剥製が載った三角帽子を被った老魔女が、厳しい表情で杖を握りしめている。
「ここは書店であって、決闘場では無いのですよ……おや、ルシウス」
　老魔女はハゲタカさながらな鋭い眼光でルシウスを見た。
「あれ、君のお祖母さんなのかい？」
「うん……そうだよ」

「おったまげー。男気ありすぎだぜ、マジで」
それから何やかんやで騒動は収まり、マルフォイ親子は捨て台詞を吐いて消え去ったので、ハリー達は書店を去った。

＊

素晴らしい夏休みはあっという間に過ぎ去った。
「ハリー、私は秋から闇払いになろうと思ってるんだ」
ハリーがホグワーツに行く前の日、シリウスは突然、切り出した。
「闇払いって、闇の魔法使いを退治する職業だよね？　危険じゃないの？」
「もちろん多少の危険は付き物だ。しかし誰かが闇の魔法使いを取り締まらなければ、魔法界は奴らに乗っ取られてしまうだろ？」
「でも僕、シリウスが心配だよ」
「今は前みたいにヴォルデモート卿の全盛期ではない。だから前ほどの危険は無いんだ」
シリウスは、本当はもっと危険な方が良かったと思っている口調だった。
「……わかった。シリウスが闇払いになりたいなら応援するよ。でも無茶なことしないでね」
シリウスはジェームズが裏切られて殺された時、真っ先にピーター・ペティグリューを追って復讐を果たそうとした人である。
率直に言わせてもらえば猪突猛進だ。
シリウスを責める気は全くないが、復讐に向かう前に誰か一人にでも真実を告げていれば、これほどの悲劇にはならず、自分とシリウスはもっと早く一緒に住めていたはずだとハリーは思っていた。
「そうだ、それと屋敷しもべ妖精のことだが、もしまたハリーに突撃してくるようなことがあれば直ぐに教えてくれないか。どんな脅し文句を言われても、だ」
「脅し文句……？」
ハリーは借金を抱えてヤクザに脅される家族の息子役を演じた時

を思い出して怖くなった。
「そうだ」
シリウスは言った。

＊

9月1日がやってきた。ハリーはシリウスと共にキングズ・クロス駅に来ていた。カートにはトランクとヘドウィグのカゴを乗せている。
シリウスはいつになく警戒しているように見えた。
「よし……じゃあ僕から行くよ」
ハリーは9と4分の3番線に入る柱を見据えて深呼吸する。
その時、シリウスが動いた。俊敏に柱の裏に回り、杖を取り出す。次にバチリという音が聞こえて、シリウスは戻ってきた。
ハリーは唖然とした。
「……なにごと？」
「ああ、何でもない。行くんだハリー」
「わかった」
ハリーは柱をくぐって懐かしの魔法界に戻った。
プラットホームの人の人はまだまばらだった。ハリーとシリウスはベンチに座って、発車まで時間を潰すことにした。
しばらくするとハーマイオニーがやってきた。
「ハリー、こんにちは！」
「やっほーハーマイオニー」
「あなた、新しい教科書はどれぐらい読み込んできた？　私は5周しか読んでないんだけど、やっぱり足りなかったかしら？」
「僕、一巡もしてないよ」
それからハーマイオニーの両親も交えてしばらくお喋りを楽しんだが、ロンが来る気配は一向になかった。
「もうあと5分で発車するわ。私たち、そろそろ列車に乗らないと」
「そうだね」

ハリーはシリウスと一緒にトランクと鳥かごを列車の中に引き上げた。
「ハリー、楽しく過ごすんだよ」
「ありがとうシリウス！」
ハリーとシリウスは列車とホームの境目で抱き合った。
ドアが閉まり、白い煙を黙々と上げてホグワーツ特急は発車した。遠くなって行くシリウスの姿をハリーはギリギリまで目で追って、手を振り続けた。
角を曲がって見えなくなったところでハリーとハーマイオニーはコンパートメントを探しに行くことにした。
「あ、ハリーじゃないか！　あとハーマイオニー！」
ロンとジニーが後方車両から歩いてきた。
「ロン！　どうしてホームにいなかったの？」
「ギリッギリで着いたんだ」
「フレッドとジョージが暖炉に悪戯したせいで出発が遅れたの」
ジニーが付け加えた。
「とにかく、私たち早くコンパートメントを見つけなきゃいけないわ」
しかし列車が発車してから時間が経っていたこともあり、空いているコンパートメントは見つからなかった。
かろうじて見つけたのは女の子が一人でいるコンパートメントだ。
その少女は全体的に色素が薄くて、濁ったブロンドの髪が胸まで伸びていた。耳にコルクのピアスを付けて、雑誌を没頭して読んでいる。
この子は不思議ちゃんだとハリーはすぐに分かった。
「大丈夫なのか、ここ？」
「いいよ行こう！」
ハリーはガラガラっとドアを開けた。
女の子は雑誌の上から大きな目をのぞかせた。
「同席してもいいかな？　空いてるコンパートメントがなかったんだ」
「うん、いいよ。あたししかここに居ないもン」

その子はそう呟くと、再び雑誌に顔をうずめた。
「ありがとう！」
ハリーは笑顔で言った。
ロンは怪訝な顔で女の子を見ながら、一番最後にコンパートメントに入った。
「ハーマイオニー、教科書全部5周したってことは、ロックハートの本も全部読んだってことだよね？」
ハリーはハーマイオニーに聞いた。
「もちろんよ」
「教えてくれない？」
「いいわよ。でもどうして？」
「ロックハート先生の授業に備えてだよ。どうやってあの先生の授業を受けようか考えてたんだ」
ハリーは神妙に答えた。
「あいつ、ただのカッコつけ野郎だろ」
「あらロン、そんなことないわ。ギルデロ――ロックハート先生は素晴らしい方よ」
「君、ロックハートのことをギルデロイって呼んでるのかい？」
ロンはウゲーと吐く真似をした。
「黙りなさいロン。それでハリー、何の話から聞きたい？　私のオススメは『狼男との大いなる山歩き』よ。この本の素晴らしいところは――」
「あんた、ハリー・ポッターだ」
ハーマイオニーの話を遮った女の子はじーっとハリーを見つめていた。
「うん、そうだよ。グリフィンドールの2年生なんだ。よろしくね。こっちは友達のロンとハーマイオニー。あと新入生のジニーだよ」
「あたしも新入生なんだ」
女の子は夢見るように言った。
「わたしと一緒だわ！　わたしジネブラ・ウィーズリーよ。あなたは？」

「ルーナ・ラブグッドだよ」
ルーナはジニーに手をまっすぐ差し出した。ジニーは少しためらいがちに握った。
「ルーナはマグルに育てられたの？」
ハリーは尋ねた。
「ううん、パパもママも魔法使いだよ。お家には雑誌を刷ってくれる機械があるんだ。魔法で動くの」
ルーナは瞬きせずにハリーを見つめた。
この子は地上と天国の間に住んでいるような雰囲気を持っているとハリーは感じた。
「あ、私も魔法族出身よ！　入りたい寮はあるの？」
ジニーは新しい友達を作るために一生懸命だった。
「レイブンクローがいいな。ロウェナ・レイブンクローの寮。計り知れぬ英知こそ、我らが最大の宝なり♪」
ルーナは歌うように言った。
「へぇ、わたしはグリフィンドールがいいなぁ。この3人もみんなグリフィンドールなのよ」
「ふぅん、グリフィンドールはちょっと向こう見ずな人が多いってパパが言ってた」
ルーナはバシッと言う人らしい。
ロンはムッとした。
「それなら、レイブンクローだって頭でっかち野郎ばっかりだぜ」
「あたしはそう思わないもン」
ルーナはそう言うと、再び雑誌の陰に隠れた。
ジニーがルーナと仲を深めようと頑張る中、ハリーはハーマイオニーとともにロックハート先生の授業の予習をした。
「君までロックハートに夢中かい？」
ロンはフンと鼻を鳴らした。
「ねえロン、ロックハートってどの層から人気なの？」
「中年のおばさん達だよ。僕のママもロックハートにメロメロさ。でも若い女の子でも好きな子はいるかな」

ロンはハーマイオニーをじとっとした目で見て付け足した。
車内販売のお婆さんから百味ビーンズを買って、くじ引き気分で食べて遊んでいるうちに日は沈み、ハリー達は再びホグワーツに戻ってきた。
「いいか、落ち着くんだぞジニー。取り乱すんじゃないぞ。分かったか？」
「わたしは大丈夫よ。ロンの方が取り乱してるわ」
ロンは愛する妹の組み分けが心配で心配で落ち着かないといった様子だった。
「またね、ジニー、ルーナ」
ハリーは新入生の２人に別れを告げた。暗い夜道を、２人はちょっと緊張気味に船着き場へ歩いていった。
「ホグワーツに入学したのが１年も前なんて信じられないよ」
ハリーは暗闇に灯るランタンの光を見ながら呟いた。

４話　ロックハート先生とコリン

ホグワーツの大広間の天井には星が煌めき、何千本ものロウソクが宙に浮かんでいた。

４つの長テーブルには寮ごとに生徒たちが座り、新入生の入場――またはその後のご馳走――を待ちわびている。

帽子は昨年と同様に歌を歌い（歌詞は新しくなっていた）、マクゴナガルがＡＢＣ順に新入生の名前を呼んだ。

本人たちの希望通り、ルーナ・ラブグッドはレイブンクロー、ロンの妹のジニーはグリフィンドールに組み分けされた。

そして食事がテーブルに現れ、宴が始まった瞬間、ハリーは肩を叩かれた。茶髪の小さな男の子が座っていた。

「僕、あなたの作品、全部見てました！　僕、あなたの大ファンなんです！　それに、魔法界でも『例のあの人』を倒したなんて！　うわー、同じ学校にいるなんて信じられない！　サインしてくれませんか？」

コリン・クリービーという新入生の少年は、ハリーの大ファンだった。

校長先生が話をする間もずっと落ち着かない様子でハリーをチラチラ見ていたらしい（とハーマイオニーか後で証言した）。

「ありがとうコリン！　でも、ホグワーツの食事はすごく美味しいから、今は食べることに集中した方がいいんじゃないかな？」

「それもそうですね！」

コリンはフィッシュ＆ａｍｐ・チップスを流し込むような勢いで食べた。（途中でむせたのでハリーが背中を叩いてあげたら、大喜びしてしまってさらにむせた）

そして水を一杯飲むと、再びハリーに向かって話した。

「僕、マグル出身なんです。小学校の友達はみんなハリーが大好きでした。コサックダンス、一緒に踊ってくれませんか？　弟に自慢したいんです」

「わかったよ！　今度一緒に踊ろうね」

ハリーはリズムに乗って小さく手を動かした。

「はい！　絶対一緒に踊りましょうね！　そういえば去年、無実の人を救ったって本当ですか？」
「うん、ロンのおかげだよ」
　ロンは突然話を振られてビックリした。しかし残念ながらコリンはロンに興味を持ってくれなかった。
「へー、そうなんですか。それよりハリー！　一瞬で泣けるって本当ですか？　見せてくれませんか？」
　学校の中で、ここまで全面に「大好き！」という感情を出してくる子は珍しかった。嬉しいが、少し困るのも事実だ。
「いま急に泣き出したら変な目で見られるから今度でいいかな、コリン？」
「はい、わかりました。それから、あとで一緒に写真撮ってもらってもいいですか？　僕、あなたに会ったことを証明したいんです」
「いいよ、折角だからあとでみんなで撮ろう。入学の記念にね」
「ありがとうございます！　もし、もしよかったら僕とあなたとのツーショットも撮ってもらっていいですか？　それで、写真にサインしてくれませんか？」
「いいよ！　でも――マグル界には絶対に流さないでくれるかな？」
「はい分かりました。じゃあ僕、そうします、絶対に！」
　結局、その日のパーティーはコリンと話し、コサックダンスをして終了した。

　ハリーがようやく寝室に帰った時には、ロンはもう寝る準備をしていた。ベッドの下にフレッドとジョージから嫌がらせでもらった（スキャバースそっくりの）ネズミのぬいぐるみが打ち捨てられている。
　コリン・クリービー……マグル生まれの男の子。面白い子だが、これからどう接しようかとハリーは思った。
「あの……僕のヒキガエル、どこに行ったか知らない？」
　その時、ネビルがおずおずとルームメイトたちに尋ねた。
　必死にみんなで捜索して、ついに寝ることができたのは1時間半後だった。

２年生になって授業は難しくなった。
しかしシリウスと一緒にこっそり予習していたハリーは、マグゴナガル先生の『コガネムシをボタンに変える』という課題も、スプラウト先生の『マンドレイクの植え替え』もきっちりこなすことができた（もちろんハーマイオニーには敵わないが）。
シリウスは毎日のようにハリーに手紙を送ってくれた。手紙の最後には肉球のスタンプが押してあって可愛かった。
そしてコリン・クリービーは毎日のようにハリーのところに押しかけてきた。
「ハリー、いつ一緒に写真を撮りますか？」
その日の午後も、コリンは教室移動中のハリーを目敏く見つけ、声をかけた。
どうやら時間割を暗記しているらしい。ハリーはコリンに向かって手を振った。
「やっほーコリン、もう写真なら撮らなかったっけ？」
「あれは、僕たち新入生とあなたで撮ったやつです。僕、あなたとのツーショットが撮りたいんです」
「あ、そっか。じゃあ今度の週末に撮ろうね」
「はい。あと、泣くところを見せて欲しいんです。いつ見せてくれますか？」
「わかった。でも今はまだ学校が始まったばかりだし、落ち着いてからでいいかな？」
ハリーはにっこり提案した。
「いいんですか？　僕、すごく嬉しいです！」
「うん。じゃあまたね」
「さようなら、ハリー！」
コリンが去ってから一番に口を開いたのはハーマイオニーだ。
「なんで叱らないのよ？　次来たら私がガツンと言ってやるわ」
「別にいいよハーマイオニー！　コリンは僕を好いてくれてるし、嬉しいよ」

「それは我慢してるだけよ。あんなストーカー並みに付きまとわれて、私の方が気が滅入っちゃう」
「でも僕は気にならないよ」
それは本心だった。
コリンは良くも悪くも純粋で、ハリーへの好意は混じり気のない純粋なものだ。そういう子は貴重だった。そして、悪意的に絡んでくる人よりずっと良かった。
「そう。でも、いつか絶対に嫌になる時がくるわ。今は我慢してるだけよ。その時まで待ってあげるわ」
ハーマイオニーは物知り顔で言った。

＊

初めてのロックハート先生の授業は――一言で言えば、悲惨そのものだった。
ロックハートの人気は授業開始前から2つにくっきり分かれていた。
今か今かとロックハート先生の入場を待ちわびる女生徒たちと、だるそうに机につっぷす男たちだ。教室の前後で雰囲気がまるで違う。
ハリーとロンはその狭間の席に座り、教科書を取り出した。
「重すぎないか、これ？」
そう言いながらロンは本を自分の目の前に積み上げた。
「何冊もあるからね。それより、そんな風に置いたら教卓が見えなくなるよ？」
「そうしたいんだよ、ハリー！　誰がロックハートの顔なんて見たいもんか」
ロンの声は大きくて、女の子たちに丸聞こえだった。「なんて酷いこと言うのかしら」という目線を浴びせられたロンは、気まずそうに本の奥に身を隠して机に伏せた。
全員が席に着いた頃、ロックハート先生は金色のローブを翻して教室に現れた。

教室をぐるりと見回し、つかつかとネビル・ロングボトムの方に歩き、彼の本を持ち上げる。その表紙には白い歯を輝かせて笑うロックハート先生が写っている。
ロックハートは己の写真を指差し、口を開く。
「ギルデロイ・ロックハート。勲三等マーリン勲章、闇の力に対する防衛術連盟名誉会員。そして、『週刊魔女』五回連続『チャーミング・スマイル賞』受賞。もっとも、私はそんな話をするつもりではありませんよ。バンドンの泣き妖怪バンシーをスマイルで追い払った訳じゃありませんしね！」
笑ったのはほんの数人だった。もちろんハリーは笑った。子役としての条件反射だった。
「全員が私の本を全巻揃えたようだね。たいへんよろしい。今日は最初に少しミニテストをやろうと思います。心配ご無用――君たちが私の本をどれぐらい読み、覚えているかをチェックするだけの簡単なテストですからね」
ハリーにはハーマイオニーの瞳の輝きが眩しかった。彼女の大好きな『テスト』、それもギルデロイ・ロックハート先生に関するテストとなれば、彼女に敵う人はいない。
「では、はじめ！」
ハリーは問題に目を通す。
『第1問、ギルデロイ・ロックハートの好きな色は？』
『第2問、ギルデロイ・ロックハートの密かな大望は？』
意外と行けるぞ、とハリーは思った。書店でロックハートに会った時に、聞いたことばかりだ。それに本の内容もハーマイオニーから教わっていたので、大体は頭の中に入っている。
ハリーはスラスラ答えを書き込んでいく。しかし途中から難易度が跳ね上がって頓挫した。知っているといっても一度会っただけだ。ここまで出来たら充分だろうとハリーは思った。
30分後、ロックハートはテストを回収した。
「おやおや、私の好きな色がライラック色だということを殆ど誰も覚えていないようですね。それと――『狼男との大いなる山歩き』の第

１２章ではっきり書いているように、私の誕生日の理想的なプレゼントは魔法界と非魔法界のハーモニーです」
ロックハートは悪戯っぽくウインクした。ロンは唖然としていた。
ロックハートはパラパラと生徒たちの解答を見て、ある紙で手を止めた。
「おお、ハーマイオニー・グレンジャー……満点です！　どこにいますか？」
ハーマイオニーの手は感動で微かに震えていた。
「素晴らしい！　グリフィンドールに１０点です！」
女の子達が湧いた。ハリーはハーマイオニーに賞賛の拍手を送った。一方のロンは「あのテストで満点とか頭おかしいよ」とブツクサ言っている。
「さて、授業は……」
ロックハートは机の下から覆いのかかった大きな籠を持ち上げた。
「さあご覧あれ！　コーンウォール地方のピクシー妖精の世にも穢らわしいその姿を！　危険だからといって震え上がってはなりません。この世で最も穢らわしいものと戦うのか私の使命なのです！」
ロックハートは声高に叫び、大げさな仕草で覆いを取り払った。
中には群青色の小人のような気持ち悪い生物がうじゃうじゃ入っていた。
ロンは呆れてものが言えない様子だったし、シェーマス・フィネガンは吹き出すのを堪えられなかった。
「どうしたのですか？」
これには、さすがのロックハートも引っかかりを覚えた。
「だって――これのどこが危険なんですか？」
シェーマスは笑いそうになるのを必死に抑えて、唇をヒクヒクさせながら言った。
「ならばお手並み拝見と行きましょう。さあ、危険じゃないのでしょう！　対処してみなさい！」
ロックハートはカゴを勢いよく開けた。とたんに数十匹のピクシー妖精が飛び出して、四方八方に飛び回って暴れだした。

本を引き裂き、ガラス窓を割り、インク瓶を破壊し、ピクシー妖精はやりたい放題だった。
ネビルは天井のシャンデリアにぶら下げられて振り子のように揺れている。
どうしようもないと判断したハリーは机の下に避難して、ロックハートが対処してくれるのを待った。
この混乱を収められるのだから、やはりロックハートはハーマイオニーの言うように素晴らしい人だなぁとハリーは尊敬した。
「おや、何も出来ませんか？　ではお見せしましょう。ペスキピクシペステルノミ！」
ロックハートは杖を複雑に振り回して、高らかに呪文を唱えた――何も起こらない。
――彼に尊敬の念を抱いたことをハリーはすぐさま後悔した。
終業のチャイムとともに、ロックハートはハーマイオニーに後処理を命じて、逃げるように教室を立ち去った。
ハーマイオニーは嬉しそうに返事をして、テキパキとピクシー妖精を2匹でひとまとめにして失神させていった。
「なんだよあいつ」
「きっと私達に経験を積ませようとしたんだわ」
ハーマイオニーは徹底的にロックハートを庇った。いつもは理性的な彼女にしては珍しい。
だって、どう考えてもロックハート先生は闇の魔術に対する教師に向いてない――とハリーは思った。
「あんな授業が一年も続くなんて最悪だよな」
「初回の授業だけで全てが決まるわけじゃないわ。ロックハートさんの本を読んだでしょ？　何度も人々を救った英雄よ」
「本人はそうおっしゃいますがね」
ロンは呟いた。

＊

コリン・クリービーのファン活動は日に日に過激になっていった。
薬草学の授業を受けるために温室に向かっている時に突然現れて、『ハリー・ポッター特別サイン会』を今から臨時で開くと宣言された時にはビックリして言葉も出なかった。
コリンの後ろには、彼に説得されて付いてきたであろう生徒たちが軽く２０人は並んでいる。
「あの、今……写真を撮ってもらえませんか？　もう待ちきれないんです。それで、よかったら……写真にサインしてもらえませんか？　みんな欲しくてほしくて待ちわびてるんです」
「サインに写真だって？　ポッター、君はサイン入り写真を配ってるのか？」
そこにドラコ・マルフォイが現れた。
「そりゃ、ハリーはサイン入り写真を配るよ。超有名人なんだから当然じゃないか！」
列に並んでいた、ハッフルパフのマグル生まれのジャスティン・フィンチ―フレッチリーが大きな声で言った。
それはマルフォイの望んでいた反応では無かったらしい。マルフォイは不機嫌そうに鼻を鳴らした。
「君、やきもち妬いてるんだ」
コリンが言った。
「妬いてる？　僕は、額に醜い傷なんか必要ないね。みなしごになったことで特別な人間になるなんて、惨めなことじゃないか」
「そうじゃなくて、ハリーは映画に――」
「もういいよ、ありがとうジャスティン！　コリン、ここはマグル界じゃなくて魔法学校だから、もうちょっと控えめにこっそり活動してくれると嬉し――」
「おや、どうしたのですか？　サイン入り写真を配っているのは誰かな？」
ハリーが事態をまとめにかかろうとした時、ロックハートがやってきた。
「おお、ハリー！　また出会ったね！」

「こんにちは、ロックハート先生！」
ハリーは笑顔でロックハート先生と言葉を交わした。
「では、特別大サービスで2人のツーショットだ」
ロックハートはハリーの肩に手を回し、輝くような微笑みを作った。ハリーも即座に笑顔を作った。コリンは慌ててカメラを構え写真を撮った。
ちょうどその時、午後の授業の始まりのベルが鳴った。
「もうこんな時間か！　さあ行きたまえ！　それとハリー、君は私の後を継ぐ者になれるかもしれないな。もちろん、今のままでは無理ですがね。君はまだ若いですからね、私のように数多くの経験を積んでこそ、人々から喝采を浴びることが出来るのですよ。覚えておきなさい」
「はい、ありがとうございました」
ハリーは挨拶して、温室に急いで向かった。
ロックハートは独特なタイプの人間で、初めはうざったいと思ったが、逆に面白いかもしれないと思い初めていた。

＊

2回目の闇の魔術に対する防衛術の授業の時がやってきた。
みんな前の授業みたいに悲惨なことになりやしないかと恐れていたが、幸いそんなことは起こらなかった。
「さて、バンパイアとバッチリ船旅を開いてください。では第1章から――私が吸血鬼の存在を知ったのは6歳の時だ。その時、これは私が倒すべき相手だと私は確信したのです！　幼い頃から計画を立て、ホグワーツを卒業した翌年、私はマグルの船に紛れて乗って、まず初めにイタリアのヴェネツィアを目指しました――」
ロックハートの新授業形式は、ずばり、自分の著書を拾い読みして自らの武勇伝を語る、というものだった。
ハーマイオニーはうっとりした表情で話を聞いている。
ナルシストもここまでくると魅力になるもんだ。

ちなみに彼の話を聞く意味は薄そうだと判断したハリーは、本を台本だと思って読んで、演技の練習をしている。
「――私はかの恐ろしい吸血鬼ラミーカと対峙しました。鋭い牙が私の首元を捉え――死を覚悟したその時！　ある手段を思いついたのです！」
話の盛り上がりに差し掛かり、ロックハートはますます調子づいて話した。
反比例的にロンやシェーマス、ディーンのやる気はどんどん失われている。ちなみにハリーも本を2巡して、暇になっていた。
「では、これからの場面は実際に演じて見せましょう――」
ロックハートは生徒達をぐるりと見て、ハリーの方に手を出した。
「ハリー！　お相手役をしてくれるかな」
まさかそんなことになるとは思ってなかった。不意打ちの指名に、ハリーは面食らった。
「ハリー、ガチでやってよ、ガチで！」
突然授業への興味を取り戻したディーンがハリーに囁いた。
ハーマイオニーも期待を込めた目でハリーを見ている。
マグル生まれの生徒達が興味津々な一方、魔法界育ちの生徒達の関心は薄そうだ。
――やってみるか！
ハリーは本を持って立ち上がり、教室の前方に進み出た。
まさかホグワーツの授業中に演技できる機会があるとは知らなかったが、嬉しい気持ちの方が優っていた。

5話　ロックハート先生とロン

ギルデロイ・ロックハートの心は熱く燃えていた。
村人を吸血鬼から守らなければならないという使命感が漲ってくる。
豪快に攻撃を振りかぶり、かつ冷静な判断で目の前の吸血鬼と戦い続ける。
一撃、二撃、三撃……ロックハートは必死に杖を振り続け――生徒達からの拍手の音が聞こえた。
――そうだ、私はいま芝居をしていたのだ――ハリー・ポッターを相手に。
次の瞬間、ロックハートの視界からノルウェーの村が消え失せ、見慣れた教室と生徒達の姿が入ってきた。
ロックハートは軽い失望に襲われた。
さっきまで……さっきまでの自分は『本物』だった。本当の英雄だった。まるで自分が自分でないような感覚だった。
なぜハリーが天才子役と言われるようになったのか、ロックハートには分かった気がした。
「ハリー、良かったですよ。グリフィンドールに１０点差し上げましょう！」
「ありがとうございます」
今のハリーはごく普通の男の子らしく笑っている。
彼をパートナーに付ければ自分はもっと輝けるとロックハートは思った。
「では今日は解散です。次の授業までに『雪男との大いなる』を読み込んできて下さい。ファンの皆さんなら、もちろん既に穴が空くほど読んでいるでしょうがね！」
それからロックハートはハリーを呼んで、「また次回も授業の手伝いをお願いしますね」とウインクしながら囁いた。ハリーはちょっと困ったけれど頷いた。まさがこの先生は1年間ずっと演技の授業でもし続ける気なのだろうか。

授業が終わると、みんなが一斉にハリーの方に寄ってきた。
「私、ビックリしちゃったわ。どうしてあんなすごいお芝居ができるの？」
「私も。本当に本の世界の中に入ったのかと思ったわ。幻覚の魔法でも使ったの？」
ラベンダーとパーバティはキャピキャピ喜んでいる。
「小さい頃からやってたってだけだよ」
ハリーは恥ずかしそうに答えた。
「やっぱりこれ、みんなの前でもやるべきだよ。僕達だけに見せるなんて勿体ないよ！」
ディーンは興奮冷めやらない様子だ。
「でも、ハリーってプロだったんだよね。僕、見ちゃったから、お金あげないとダメだったりする……？」
ネビルが不安そうに呟いた。
「そんな押し売りみたいなことしないよ！」
「でも本来はお金を取っていいぐらいの出来なのよ。ハリーの生の演技って、マグル界では無料で見られないわ」
ハーマイオニーは得意げだ。マグル生まれのディーンも神妙に頷いた。

ホグワーツにおいて、噂はクィディッチの金のスニッチ並みに早く広まる。
その日の昼食の時間には大多数がハリーの闇の魔術の防衛術の授業での評判を知っていた。
他のクラスのロックハート先生の授業は、目も当てられないような状態だったらしい。だから皆グリフィンドールの2年生のことを羨んだ。
「やあ、ハリー。やっぱり誰相手でも君の演技はすごかったんだね。ロックハートと演技して完璧に演じられるなんて尊敬するよ」
6年生のマグル生まれのレイブンクロー生、フレディ・レイコックはハリーを褒めた。

彼は去年、ハリーに『魔法とマグルのＣＧの技術を融合させて映像作品を作る』という夢を語り、その役者にハリーを使いたいとお願いしてきた人だ。
「僕はまだいいけど、ＯＷＬを控えた５年生とか、ＮＥＷＴの７年生とかは可哀想だよ。あんな授業を受けさせられて、重要なテストに臨むなんて……ゾッとする。だからレイブンクローでは毎週末に特別対策会を開いてるんだ。５年生と７年生の殺気と言ったら……半径２メートル以内に居るだけで刺し殺されそうだよ」
勉学に取り組む姿勢に関して、レイブンクローは４寮の中でずば抜けて真面目だ。
「でも、君と一緒に闇の魔術に対する防衛術の授業を受けられたら最高だろうな。どうせなら、学校全員で一斉に大広間で授業して欲しいよ」
コリンのファン活動もさらに熱心になって、コリンは「ああ、僕が１年早く生まれてたら良かったのに！」と嘆き続けていた。
その日は色々な人に話しかけられて、ハリーは忙しい１日を過ごした。
夜に談話室に帰ってシリウスからの手紙を確認している時、ハリーはロックハートの授業の後からロンと話していないことに気がついた。
ロンのベッドを見ると、ロンは静かにノートを片付けている。
僕も明日の準備をしてから寝ようかな、とハリーは思った。
「ねえロン、明日の時間割ってなんだったっけ？」
「――ようやく僕のこと思い出したってわけか」
「あはは、どういうことロン？」
ハリーはロンがふざけてそんな言い方をしたのかと思って笑ったが、すぐにロンが本気で怒っていると気がついた。
「『生き残った男の子』の上にマグル界でも有名なんだから、僕のことなんてどうでもいいに決まってるもんな」
ハリーは驚き過ぎて口をパクパクさせた。
ロンがそういう風に思っていたなんて、全く気がつかなかった。

「もういいよ僕なんかと無理して話さなくて。君にとってみれば、僕なんて金魚のフンみたいなもんだろ、どうせ」
「今日、話せなかったことはごめん。でも僕、そんなこと全然思ってないんだ……本当に。だって特急で初めて話したのは君だし、それに……」
ハリーは必死にロンを説得する言葉を探しながら言ったが、効果は無かった。
ロンはベッドのカーテンを閉めた。
取り残されたハリーは、ただ真紅のビロードのカーテンを見つめることしか出来なかった。

明日の朝、ハリーが起きた時にはもうロンは寝室に居なかった。
ロックハート先生の授業なんかで出しゃばったからこんなことになったんだ、とハリーは後悔した。
子役として名を知られていることが学校では悪影響になることは、マグルの小学校で散々学んだじゃないか。
ロックハート先生の申し出なんて断ればよかった。そもそも、ロックハート先生があんな提案をしなければ……ハリーは悶々と考えた。
ハリーにとってロンは大切な友達だった。
ロンは、ハリーが〝生き残った男の子〟だと知っても、数分後にはごく普通に趣味の話を聞かせてくれた。
それはハリーにとって特別なことだった。
「ねえハリー。あなた、ロンと喧嘩したの？」
その日の移動教室の時間、ハーマイオニーは心配そうに言った。
ハリーとロンはいつも一緒に移動しているが、今日はしてなかったからすぐ気付かれた。
「僕がロンを怒らせちゃったみたい。馬鹿なことしたから」
ハーマイオニーは少し考えてから、合点がいったように手を叩いた。
「つまりロンがあなたに嫉妬していじけてるってことね」
ハーマイオニーはズバリと言った。

「そんな言い方しないであげてよ。僕が悪かったんだ。ロックハートの提案にすぐオッケーしちゃったから……」
ハリーはロンに嫌われて落ち込んでいた。
「あなたがそんなに落ち込むなんて珍しいわね」
ハリーはスネイプにいびられても、コリンにまとわり付かれても飄々としていたから、ロンのことでこんなに落ち込むのは変に思えたのだ。
「だって、友達だよ？　ロンは僕が有名だとか気にしないでくれると思ってたのに」
ハーマイオニーとハリーは階段に差し掛かった。
「そうね……やっぱり、友達だと思うなら悩みを打ち明けるのが大事じゃないかしら。私はハリーが子役の時にどんなに大変だったか知ってるけど、ロンは知らないでしょう。それもあって嫉妬しちゃうんだと思うわ」
ハーマイオニーは階段に仕掛けられたトラップを器用にかわしながら言った。
「僕、別にすごく大変だったわけじゃないよ」
ハリーは言い返した。
「だから、それが良くないのよ。あなた、自分の感情を押し殺し過ぎてるわ。あなたはもっとロンに対して怒っていいのよ」
「だって僕、本当にロンと友達になれてよかったって思ってるんだよ。怒ったら、もっと仲が悪くなるかもしれないよね？」
「大丈夫よ！　そんなことないわ！」
ハーマイオニーは自信たっぷりに言ったが、ハリーはどうしても不安だった。

＊

それから1日経っても、ロンは徹底的に話そうとしてくれなかった。
学校ではまだハリーの演技の話題が尽きないので、ロンと仲直り出

来る未来はどんどん遠のいている気がした。
ホグワーツでは、ハリーが子役だと広まっても、大体の人が明るく声をかけてくれるので嬉しかったが、肝心のロンに無視されるなら無意味だった。
最近、ロンはもっぱら妹のジニーと居るようだった。
シェーマスやディーンはロンの嫉妬について「気にする必要ないよ」と言ってくれたが、そんなことできなかった。
コリン・クリービーと本日5回目の遭遇を果たした後、ハリーの足は自然と人気の少ない方へと向かってみることにした。
どうすればロンとよりを戻せるのか考えたかったのだ。
しばらく行くと、ハリーは小さな中庭を発見した。中央に噴水があって、周りの花壇に植物が色々と植えられている。
「うわーお」
いい気分転換ができそうな場所だ。他にも数人がいるが、静かにノートに向かって勉強をしている。
ハリーは噴水の淵に座った。噴水を覗き込むと、クラゲとイカが混ざり合ったような奇妙な生物が何匹も水の中を漂っている。
「それ、気になるの？」
しばらくして突然、頭上から女の子の声がしてハリーはびっくりした。
顔を上げると、金髪に透き通るような目の女の子――汽車の中で出会ったルーナ・ラブグッドがぼーっと突っ立っていた。
「レイブンクローの先輩が変身術の授業でクラゲをクリオネにしようとしたんだ。その失敗作がこれ」
「それ、噴水の中に入れていいの？」
「問題ないよ。ただ時々スミを吐いて分裂するだけだもん」
ルーナは楽しげに呟き、手の指と指を水の上で擦り合わせる。するとその奇妙な生物は一斉に水面付近に集まってきた。
「うわあ……！」
「わたし毎日見に来てるんだ。レイブンクローの大先輩に教えてもらったの」

「大先輩？」
「うん。トイレに住んでるんだ」
レイブンクローは個性的な寮だと言われているが、そこまでとは知らなかった。
もしレイブンクローに入っていたら、子役だった程度の個性は受け入れられてたのかなぁとハリーは一瞬思ったが、すぐにその考えを捨てた。
マグルの小学校に比べたらここは信じられないぐらい良い場所だ。
あの時に比べたら、大抵のことはよく思えるはずだ……ロンと仲違いしたのだって、前までは仲違いする友達すら居なかったことを考えれば、かなりの進歩だ。
しかしそんなことを他の人に言えるはずがない。
言ったとしても、「充分みんなから好かれてるのに、もっと友達が欲しいなんて、有名人は贅沢な悩みをお持ちざますねぇ！」と思われるのが関の山だ。
共通の悩みを持つ相手がいないことが、幼い頃のハリーが持っていた一番の悩みだった。
「そうだ！　僕、ちょうど環境を変えてみたいと思ってたところなんだ。だからトイレに住んでみようかな」
「それは思い留まるべきだと思うよ」
ルーナは淡い色の目で真っ直ぐにハリーを向けた。
「じゃあどこに住めばいいかな？」
「寝室が嫌なら、寮監の先生に相談すればいいと思うよ。マクゴナガル先生の自室に泊まらせてもらえばどうかな。女の先生が嫌ならスネイプ先生かフリットウィック先生でも。それかロックハート先生でもいいよ」
ルーナは肩にかけた鞄から、『ザ・クィブラー』と書かれた雑誌を取り出して、読み上げ始めた。
「有名人であることに悩んでいるあなたへ、わたくしが旅先でプライベートな時間を過ごすためにどうしたかお教え致しましょう。わたくしは鳥や吸魂鬼からも好かれる性分でしたが、この方法を使えば1

人の時間を作ることができました！」
「え、吸魂鬼から好かれる？」
「うん。まだ続きがある。ある時、北欧フィンランドの田舎町を訪れた際、わたくしは吸魂鬼に好かれてしまい、日々付きまとわれました。そこでわたくしは有名人としての思いを吸魂鬼に演説すると、彼らは納得してくれました。そして無事、一人で旅を楽しむことができました」
　突っ込みどころが多すぎるとハリーは思った。
　それに、この記事を書いた人が誰なのか分かった気がした。
「それ、有名人用の雑誌なの？」
「違うよ。一般向けの大衆紙だよ。色んなコンテンツを入れることを重視してるんだ。1冊15クヌートだけど買う？」
「買う！」
　ハリーは奇抜な記事を載せた雑誌が気に入った。
「ありがとう。パパが喜ぶと思うな」
　15クヌートと引き換えに、ルーナから雑誌を受け取る。
「これ、君のお父さんが出版してるの？」
「そうだよ。世の中の真実を書くことを使命にしてるんだ」
　ルーナは誇らしげに言った。
「だからあんたも、もしも世間に伝えたいことがあるなら寄稿してくれて構わないよ」
「なるほど」
　ハリーは雑誌の目次を開いた。
『泣き妖怪バンシーとのナウな休日――武勇伝の裏』『ホグワーツはレイブンクローの秘密基地だったのか』『ピーター・ペティグリュー――殺人鬼？それとも陽気な猿回し師？』
　実に興味深い雑誌だ。
「そうだ。ロックハート先生のところに行ってみたらどうかな」
「どうして？」
「きっと面白い話してくれるよ。ロックハート先生も有名人だから、あんたと同じ悩み持ってるかもしれない」

ハリーはそう思わなかった。それにロックハート先生のところに一人で行くのは危険だと過去の経験が知らせていた。
ルーナはハリーが微妙な顔をしていることに気がついた。
「あんたロックハート先生のことが嫌なんだ」
「ううん、嫌ってわけじゃないよ。でも……」
「私はよく会いに行くよ。いろんな話を聞かせてくれる」
「あ、僕も君とならロックハート先生のところに行ってみたいかも!」
「うん、行こう」
ルーナが嬉しそうなので、ハリーもなんだか嬉しくなってきて微笑んだ。
その時、グリフィンドールのローブが廊下の方に居るのが目に入った。
「あ、ロン! 待ってよ!」
ハリーは慌てて中庭から飛び出したが、ロンは振り返らずに大階段の方に走り去ってしまった。
ロンが階段に乗った瞬間、階段は動き出した。
ハリーは肩を落とした。
どうしたらロンが前のように仲良くしてくれるのか、ハリーには分からなかった。
それは仲違いした経験が少ないからではなくて、むしろ多すぎるからだった。仲良しだと思っていた子から次会った時に距離を置かれるなんて日常茶飯事だ。
学校に行ける日数が少ないから仕方ないと、ハリーは諦めの境地に達していた。
しかしロンとの友情は簡単に諦められるものではないぐらい大切なものだ。
「おーいロナルドー!」
ルーナがハリーの後を追いかけてきて、ロンに向かって声をかけた。
しかしもうロンは遠くまで行ってしまっていた。
「ロンのこと知ってるの?」

「ジニー・ウィーズリーの兄さんだって彼女から聞いたんだ」
「なるほど……あのさ、どうやったらロンと仲直りできると思う？」
　ルーナは困った顔をした。
「あたし友達が多い方じゃないんだ」
　ハリーはルーナと波長が合う理由が分かった。
「すっごく分かるよルーナ!!!」
　ハリーはルーナの手を強く握った。ルーナは面食らったままだった。

＊

　一方、ホグワーツの校長室にはダンブルドアと、呼び出されたスネイプが居た。
「どうかね、授業の様子は？」
「……どうして私を闇の魔術に対する防衛術の担当にさせて下さらないのですか？」
　スネイプは責めるような口調だ。スネイプが闇の魔術に対する防衛術の教授の座を狙っているのは、ホグワーツ生なら誰でも知っていることである。
「ロックハート先生が見つかったからじゃ」
　ダンブルドアは朗らかに答える。
「あなたは私よりも彼奴の方が良い授業をすると思っていらっしゃるのですか？」
「今のところ生徒の間では良い話題になっているようじゃが」
「それはポッター……特定の生徒との絡みがあったからです」
「授業は生徒と作り上げるものじゃ」
「……ならば私も次の授業から自らの武勇伝を芝居にすればいいのですか？」
「セブルス、それは君が自由に決めていいことじゃ。もしその授業をするのであれば招待してくれんかの？　ぜひ見物に行きたいのう」
　スネイプは顔をしかめた。
「ダンブルドア先生、私は真剣に話をしているんです！」
「そうだったの。それはそうとして君のさっきの案は――なかなか良

いかもしれん。ここだけの秘密じゃが、わしは何年もかけてあるものをコレクションしてきたのじゃ」
ダンブルドアは杖を本棚に向けて軽く振った。すると本棚は音を立てて動き出し、奥に新たな棚が現れた。
「これじゃ」
ダンブルドアは棚を開けた。
スネイプは絶句した。そして、これを見てしまったことは口外するまいと強く誓った。
「なぜそんなに驚いておるのじゃ」
「ダンブルドア先生、あなたは校長です！　自分の学校の生徒のものをこんなに集めていると知られたら……」
「これは校長としてではなく、個人的なコレクションだから問題ないのじゃ」
ダンブルドアは棚いっぱいのハリー・ポッターグッズに向かって両手を広げた。
個人的なコレクションならば校長室に置くべきではないんじゃないか、とスネイプは思った。
不死鳥のフォークスはそっぽを向いてホーホー鳴いている。
「君は彼の出演している作品を見たことがあるかね？」
スネイプは首を横に振る。
「それはもったいないことじゃ！　そうじゃ、わしのコレクションを貸してあげよう」
ダンブルドアは棚からビデオを一斉に取り出して魔法で空に浮かべた。
「うむ……どれがいいじゃろうか……ふむ、これはどうじゃろうか？」
ダンブルドアが選び出したビデオのパッケージには、赤毛に染めた8才頃のハリーが木の上に座っているのが写っていた。眼鏡はしていない。これだけで随分と雰囲気が違って見える。
スネイプは怪訝な目でダンブルドアを見るが、ダンブルドアは涼しい顔だ。
「映画が嫌ならショートムービーもある。どうかね、一緒に鑑賞会で

も？」
結局のところ、スネイプは校長の誘いを断りきれなかった。鑑賞中はどんな顔をしていれば良いのか分からなくて気まずかった。
あかりが消された校長室に並べられた長椅子に座っての鑑賞会を終えると、ダンブルドアはすぐさま立ち上がって映像を写していた機材を片付けた。
「どうかね、分かったじゃろう？　なぜわしが君に映画を見せようと思ったのかを」
ダンブルドアは棚の物を吟味していくつかをポンポンと紙袋に入れながら、スネイプに聞いた。
スネイプはてっきりダンブルドアが悪戯心を暴走させたのだと思い込んでいたが、どうやら違っていたらしい。
「どうやら分からなかったようじゃの。お土産をあげるから、彼についてほんの少し心に留めておいてくれ」
ダンブルドアは紙袋をスネイプに押し付けた。
中を軽く覗くと、ハリーのポスターや写真やビデオやらが大量に入っている。
「いりませんこんなもの！」
「まあまあ、持っておいて損はないじゃろう。見続けていれば意外とファンになれるかもしれん。あと、その中にはハリーが出ていない映像もある。それがヒントじゃ」
帰ったらすぐに燃えたぎる大鍋の中に入れて処分しよう。スネイプはそう思った。

6話　ホグワーツ探索

ハリーはルーナと一緒にロックハート先生の部屋を目指して歩いていた。廊下はひんやりとしていて肌寒かった。
「よくロックハート先生に会いに行くの？」
「たまに。レイブンクローの先輩だから」
「どんな話をしてくれるの？」
「大体はロックハート先生の旅先での話かな。私の話も聞いてくれるんだ。大人になったら未知の魔法生物を探しに行きたいって言ったら、いいねって言ってくれた」
ルーナは空中をぼんやり見続けながら話した。
レイブンクローは個性的な人が多いなぁとハリーは思った。寮監のフリットウィック先生は大変に違いない。
「他にもレイブンクロー出身の先生っているの？」
ちなみにグリフィンドール出身の先生は、校長のダンブルドアと変身術のマクゴナガルだ。
「いるよ。フリットウィック先生と、あとトレローニー先生とか」
「トレローニー先生？」
「占い学の先生だよ。塔の上に住んでるから普段はあまり姿を見せないんだ」
「その先生ともよく話すの？」
「うん、時々。運勢を占ってくれるよ」
同じホグワーツで暮らしているのに、こんなにも自分の違う生活を送っている人がいるのがハリーには不思議だった。
「そういえば、レイブンクローはみんなロックハート先生の授業に腹を立ててるって聞いたけど本当？」
「腹を立てているというよりは困ってる。グリフィンドールではそうじゃないの？」
「うん。みんなあんまり気にしてない」
「5年生も7年生も？　信じられない」
ルーナは目をさらに大きくした。

「5年生のテストってそんなに大事なの？」
「もちろんだよ！　私のママは7年生の時に魔法生物飼育学のテストを受け忘れたせいで就職したかった研究室に入れなくなって、独自で研究することになったんだ」
「そうなんだ」
ハリーは自分の両親の職業なんて知るはずもなかった。
シリウスの職業は……囚人だろうか？
囚人になんて絶対になりたくない。シリウスの役立たずめ！
他の大人の知り合いといえば――ルーピンがいる。しかし彼も仕事に就くのは苦労してそうだ。夏休みの間、何回か会って話をする機会があったが、あまり人生を謳歌しているようには見えなかった。
今度の長期休暇に家に帰ったら、魔法界の職業についてシリウスに聞こうとハリーは思った。
＊
ロックハート先生の部屋の前に着くと、ルーナはためらいなくドアをノックした。
「ルーナ・ラブグッドです」
「ハリー・ポッターです！」
ロックハートはマントを翻して出てきた。
「こんにちは皆さん！　どうなさいました？　いいえ、言わなくても分かりますとも。私に会いたくて次の授業まで待ちきれなかったのですね！」
「あ、はい！　あと、ルーナに誘われて来たんです。えっと……ロックハート先生のお話を聞きたくて」
「それは素晴らしい！　ええ、お話ししてあげましょう」
ロックハートはキザな笑みを浮かべて、大袈裟な所作で部屋の中に招き入れた。
まず目に入って来たのはロックハートの巨大ポスターだった。
キラキラ光る紫のローブに身を包んだロックハートが何回もウインクを繰り返している。
ロックハートの突き抜けたナルシストさは賛否両論あるだろうが、

少なくともハリーは好きだった。
何事も中途半端にやるよりはとことん極めた方がいい。
「さあ、そちらの椅子に座って」
ハリーは3人がけの椅子にルーナと並んで座った。
ロックハートのは豪華な肘掛け椅子だ。
テーブルの上にはロックハートのブロマイドが積み重なって置かれている。
「ハリーに有名人としての悩みがあるんだって」
「あ、そういうわけじゃないんです。ただ……」
「分かりますよポッター君。有名人には悩みが付きものです。特に私ほどの人気が出れば――わかるでしょう?」
ロックハートは白い歯を浮かべて微笑んだ。
ハリーは頷いた。
「さて、私があなたにサインをあげましょう。今回だけは特別です。どうかあまり周りに見せびらかさないように……大量の人が押しかけてくると困ってしまいますからね」
ロックハートは人差し指を唇に当てた。
それからロックハートはさっと杖を振って紅茶を入れようとしたが、失敗してグラスが割れてしまった。
なんとなく気まずい雰囲気が部屋に流れる。
ハリーは欠片を拾うのを手伝おうかと立ち上がった時、ルーナは突然、新種の魔法生物に関する話を始めた。
ロックハートはこれは良かったとばかりにグラスを割ったという事実を完全にスルーしてルーナの方に向き直った。
ハリーは一人で後片付けをすることになった。
「ナーグルはヤドリギに生息していて人の脳の中に入って頭をぼーっとさせるんだ。だからぼんやりしちゃうのはナーグルに取り憑かれたせいなんだよ」
「私の存在も女性をメロメロにさせてしまいますから、ナーグルと似ていますね。以前も、少し買い物に出ただけで取り囲まれてしまってね」

「うん、だからロックハート先生の本に出てきた、いつも心ここに在らずの男の子も、ナーグルに取り憑かれてたんだよ。私、卒業したらパパと一緒に探しに行くんだ」
　完全にかみ合っているとは言えないが、全く別のことを話しているわけでもない微妙なラインでロックハートとルーナは話し続けている。
「そうそう、私の次の展望としては脚本家を目指しているのだよ。どうかなハリー？　私には脚本家としての才能もあると思うのだが？」
　ハリーは掻き集めた欠片を習った魔法（レパロ！）でくっつけ直そうと奮闘していた所だったので、びっくり仰天した。
「ああ、あると思います！　そういえば魔法界の劇ってどんなものなんですか？」
　実際ロックハートの文才は本物だとハリーは感じていた。
「そうですね……一度、本物の劇を見てみればどうでしょう？」
「今は『マーリン伝説』をやってるよ。先輩が話してた」
「私ほどの知名度が有れば特等席を取れるでしょうから、私が掛け合ってみましょうか、ハリー？」
「いいんですか？」
　ハリーはロックハートを好きになった。
「もちろんです。ルーナさんも行きますか？」
「あたしも行きたいな」
「では私がお願いしておきましょう！」

　ロックハートと別れてから、ハリーは本来の目的に気がついた。
「あ、ロンのこと聞くの忘れてた！」
「そうだね。これからトレローニー先生のところにも遊びに行くから、一緒に行く？　あんたの運勢を占ってくれるかもしれない」
「行ってみたい！」
　ハリーは元気に答えた。

＊

ロンは絶賛やさぐれ中だった。
優秀な兄妹達に優秀な友達、こんな人達に囲まれてたら誰だって落ち込むに決まってる！
「自尊心？なにそれ食べられるの？」状態だ。
ハリーが有名なことはずっと前から知っていた。特別なことも知っていた。
だってあの『生き残った男の子』、例のあの人を倒した少年だ。
マグル界でも有名らしいということは知っていたが、深く考えたことはなかった。
しかし、ロックハートの授業でのハリーの演技を見た今となっては……。
あんなに見る人を惹きつける力があれば有名になるはずだ。
去年、マグル界でのハリーの知名度のことを聞いた時、「偶然ちょっぴり有名になっただけだよ」なんて抜かしていたが、大嘘だった。
ハリーとこれ以上近くにいればメンタルが保てない。
だからちょっと意地悪なことをハリーに言ってしまったのだ。
でもやっぱりハリーと話さなくなると寂しかった。
ただこれ以上惨めな思いはしたくない。
自分にもハリーと同じぐらいの才能があったらどんなに良かったか。
ロンは大きく鼻を鳴らして、蛙チョコをやけ食いした。
「そんなにチョコ食べてたら肌がボロボロになるわ」
ハーマイオニーは隣にドスンと座った。両手いっぱいに宿題を抱えている。
「ちょっとこのレポートに誤字が無いか確認しててくれないかしら？
第三者の目が必要なの」
ハーマイオニーは分厚い巻物を前に突き出した。ロンは「はぁ？」と首を傾げながら巻物を開いた。
「……これ、ロックハートに提出する任意のレポートじゃないか！
こんなにガチでやるべきもんじゃない！　この時間で君はもっとす

んばらしい何かが出来たはずだよ！」
「人の価値観はそれぞれなのよ。口出ししないで頂戴。それに私は必須課題を全て終わらせてからこのレポートに取り掛かったのよ。あなたはまだそれすら終わってないでしょう。じゃ、よろしくね」
ハーマイオニーはスタスタ歩き去ろうとしたが、何か思い出したように体を一瞬止めて戻ってきた。
「それと、もしちゃんと校正作業をしてくれたら、お礼にあなたの宿題見てあげるわ」
「ハーマイオニー、きみ、最高だぜ！」
「あくまでも見てあげるだけよ。代わりにやってあげるんじゃないわ」
「……それより、今からどこ行くんだい？」
「コリン・クリービーのところよ」
ハーマイオニーの目は正義感に輝いている。
「何しに行くつもりだい？」
「もちろんハリーのことを注意しに行くのよ。じゃあ、よろしくね」
ハーマイオニーは念押ししてから立ち去った。

＊

「なるほど……あなたの人生は不幸の連続でしょう……ああ、なんてこと、死の犬グリムも憑いてる……！」
占い学の先生――トレローニー先生は個性の塊だった。
もしマグルの学校で先生をするなら絶対に美術を受け持つであろうファッションだ。
牛乳瓶の底のような分厚い眼鏡に、よく分からないジャラジャラしたネックレスやブレスレットを大量に付けている。
ハリーはその先生に最悪の占いをされたばかりだった。
「……どうしたら運勢が上向きますか？」
ハリーは悲しそうに尋ねた。
ハリーは今まで何度かテレビの企画で占いを受けたことがあるから、「占いを受ける客」としての態度は完璧に学んでいた。
リアクションが薄くてもつまらないし、まさかカメラが回ってる前

で「タロットなんで嘘に決まってるだろばーか！」なんて言ってしまえば大問題になる。
だからわざとらしすぎない絶妙なリアクションを狙う必要がある。
「いいえ、あなたの運勢は良くなりません。むしろ、時間が経つごとに周りを巻き込んで不幸は広がるでしょう！　ああ、お可哀想に！」
なんて占い師だ。
ハリーは頭を抱えた。
＊
「コリン・クリービー！　止まりなさい！」
ハーマイオニーは中庭でコリンを発見した。
彼はハリー・ポッターの大ファンで、ハリーにしつこく付きまとい困らせている迷惑な後輩だ。
ハーマイオニーは彼に腹を立てていた。
子役時代のハリー・ポッターと言えば、芸能人に疎いハーマイオニーですら知っているほど有名だ。
しかし有名な分だけトラブルも多かった。
ハリーをストーキングしたり脅迫したりと様々な理由で大勢の人が逮捕された。
ハリーが出演している映画が、メイン俳優の逮捕により未公開になった事件もあるが、その犯罪にハリーが巻き込まれていたらしいという噂もある。
せっかく魔法界に来たのだから、ハリーには普通に自由に暮らしてほしい。
それがハーマイオニーの願いだった。
「コリン、ハリーに迷惑をかけないでちょうだい！　もしそれが出来ないなら接近禁止令を出すわよ！」
「え？　な、なんのことですか？」
コリンはいきなり先輩に話しかけられて目を丸くしている。
「毎日毎日ハリーに付きまとって、ハリーは迷惑してるのよ。本当のファンなら、ハリーが楽しく普通の人みたいにプライベートを過ごせることを望むと思わない？」

「……でもハリーは文句言ってこないよ！」
「それは言えないだけよ。ハリーの側に立って考えてみなさい。もし文句言ったことで、ファンが逆上したらどうするの？　もっと怖いことになるかもしれないわ。いいえ、実際にそうなった経験があるのでしょうね。だから言いたくても言えないのよ」
ハーマイオニーは重々しく語った。
「でも僕はそんな逆上するようなファンじゃ無いよ！」
コリンは素早く反論した。
ハーマイオニーは溜息をついた。コリンは悪意を持って接しているわけではない。だからこれだけ反発するのだ。
「そういえば……あなた、写真を撮るのが趣味なのよね」
「はい、特にハリーの写真を撮るのが！」
「これからハリーに隠れてこっそりカメラの技術を磨いて、ハリーが大人になった時に、カメラマンとして働けるようにするのはどうかしら？　サプライズだから、ハリーに気づかれたらダメよ。ハリーに話しかけにいく時間をカメラの技術を向上させるために使うのよ。そしたら学生時代だけじゃなくて、ずっとハリーのそばにいて仕事が出来るわ」
ハーマイオニーは提案した。
コリンは――瞳をキラキラ輝かせている。
コリンの未来に明るい光が射した瞬間だった。
＊
魔法界のカメラについて学ぶために図書館に向かって走り出したコリンの姿を見送って、ハーマイオニーは清々しさでいっぱいだった。
少しだが、ハリーが平穏な生活を送るための手助けができた。
コリンにしてもロンにしても、もっと男の子達は頭を働かせられないのかしら！とハーマイオニーは思った。
ファンだからといって何度も何度も話しかけられたら嫌になる。それに有名なのはいいことばかりじゃない。
ハリーの有名さに嫉妬して仲違いしてるロンに、有名になることの

負の側面を話してもいい――というよりも話したかったが、ハーマイオニーは何とか堪えていた。
マグル界でのことを必要以上に魔法界での友達に広めるのは良くないと分かっていたからだ。
でも、これ以上ロンからハリーの方に歩み寄る気が無いのなら……。
まったく男の子たちは困ったもんだ。
まだまだ不安は沢山あったが、ハーマイオニーの胸は達成感でいっぱいだった。
石像が置かれた廊下の角を曲がると――石の床一面が水浸しになっていた。水面に映るのは黄色の小さな瞳だ。
ハーマイオニーの見た景色はそれが最後だった。